

# 嘉数トウンヤマ遺跡Ⅱ

一個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査—

2009年（平成21年）3月  
沖縄県宜野湾市教育委員会

# 嘉数トウンヤマ遺跡Ⅱ

一個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査—

2009年（平成21年）3月

沖縄県宜野湾市教育委員会

## 序

本報告書は、周知の遺跡である嘉数トウンヤマ遺跡の包蔵地内において、個人農地の土地造成が計画されたことから、それに先立って、平成18年度に宜野湾市教育委員会が実施した本発掘調査の成果をまとめたものであります。

嘉数地域は、嘉数高台公園等の整備事業のほか、昨今の宅地開発等の市街地化が著しい中で、いまなお碁盤目状の集落形態を呈しており、旧来の面影を残した数少ない地域であります。また、集落の北側には嘉数高台として名高いウィーヌヤマがあり、さらに北麓には比屋良川が流れ、県指定有形文化財「小禄墓」を主として、流域沿いには断崖を利用した古墓群が連なっており、その他にも拌所や石獅子、湧泉等が確認されております。嘉数トウンヤマ遺跡の後背にも、トゥン（嘉数之殿）とジトウヒヌカン（地頭火の神）と称される祠が配置されており、これらが地域の財産として大切に継承されております。

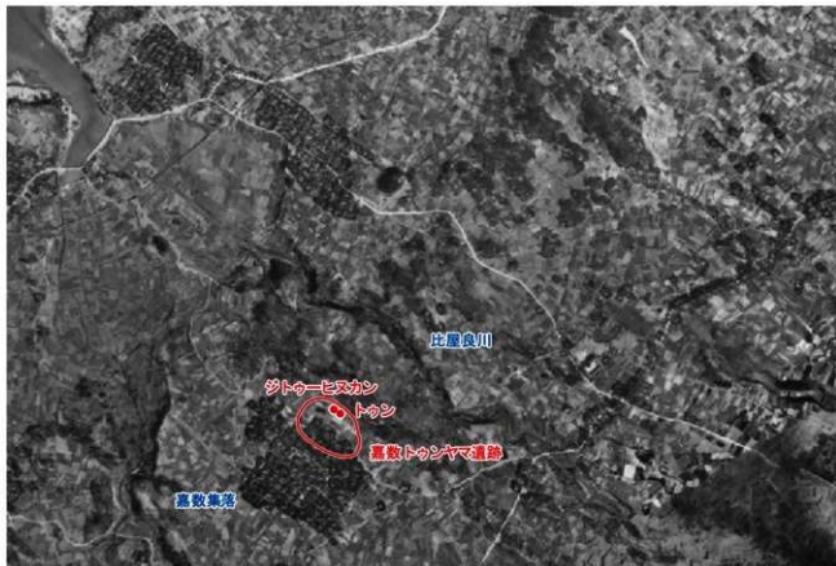
今回の本発掘調査により、掘立柱建物跡や倉庫跡と思われる多数の柱穴群や中世（グスク時代）の烟跡として検討されている小穴群のほか、近世嘉数村の溝状礫敷遺構も確認されています。特に溝状礫敷遺構の造成時に遺構内に充填された沖縄製陶器は数量、器種、復元資料とも突出しており、近世末の村落における沖縄製陶器の組成を把握する上で重要な事例であります。今回の報告書では近世以降の沖縄製陶器を中心に、関連する遺構を報告しています。これらの調査成果からは、中世から近世を経て、近代へと連綿と営まれてきた往時の嘉数村の様相について窺い知りができると言えます。

今回の調査成果が、広く市民の歴史的教材ないしは文化財の保護・活用資料として生かされ、歴史学等の学術資料として御検討いただければ幸いに存じます。

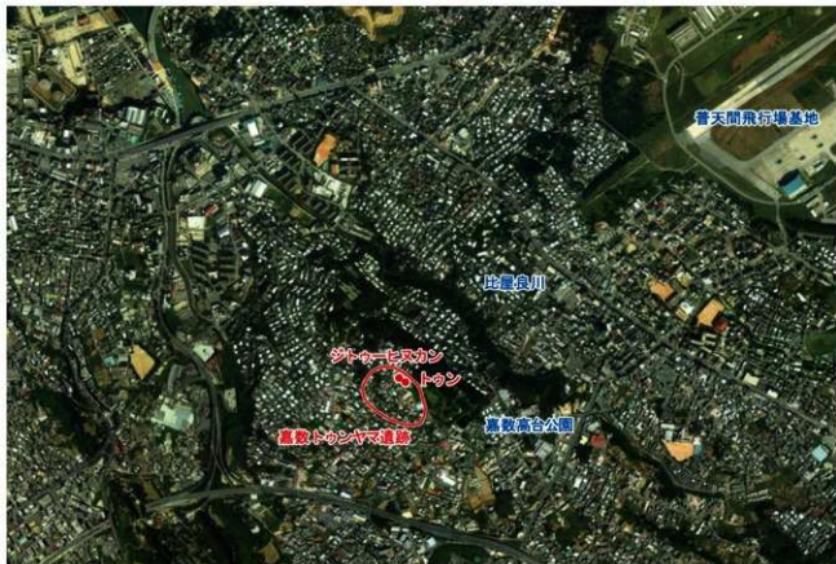
末尾になりましたが、多大な御指導を賜りました文化庁文化財部と沖縄県教育庁文化課、並びに貴重な御指導・御助言を賜りました市文化財保護審議会の先生方と嘉数区自治会、その他関係各位に対しまして心から感謝申し上げます。

2009（平成21）年3月

沖縄県 宜野湾市教育委員会  
教育長職務代行者  
教育部長 新田 和夫



卷頭図版1 嘉数トウンヤマ遺跡（昭和20年撮影空中写真オルゾ）



卷頭図版2 嘉数トウンヤマ遺跡（平成10年撮影空中写真オルゾ）



卷頭圖版 3 調查區全景（溝狀礫數遺構完掘狀況）



①南・北溝状礫敷遺構地山造成状況



②南・北溝状礫敷遺構の延長



③南溝状礫敷遺構補充填状況



④補充填土坑No.1 積充填状況1



⑤補充填土坑No.1 積充填状況2



⑥補充填土坑No.2 断面



⑦補充填土坑No.2 完掘状況



⑧南溝状礫敷遺構と溝1の連続

## 例 言

1. 本報告書は、個人農地の土地造成に先立ち、宜野湾市教育委員会が国・県の補助を受けて、平成18年度に実施した、嘉数トウンヤマ遺跡の緊急発掘調査の近世から近代にかけての成果を収録したものである。
2. 現地調査の実施にあたっては、嘉数区自治会及び地権者、隣地地権者の協力を得た。
3. 発掘調査並びに本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系（旧座標系）第XV座標系の座標北を用い、層位・遺構は海拔高（那覇）を基準とした高さである。
4. 本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図（1:2,500）を使用しており、他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営しているGISデータを使用している。
5. 本書で使用した層名は、農林水産省水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
6. 出土遺物のうち、沖縄産陶器の胎土分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
7. 本書の執筆は、豊里友哉・仲村 健・城間 肇・伊藤 圭・玉城夕貴・上田圭一・矢作健一があたり、執筆分担は下記する一覧に記してある。

仲村 健（宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 主事）

第Ⅰ章

城間 肇（宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 主事）

第Ⅱ章—第1・2・3・4・6節

玉城夕貴（宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 副主任嘱託員）

第Ⅱ章—第5節

豊里友哉（宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 係長）

第Ⅱ章—第4節、第Ⅲ章—第3節1、第V章

伊藤 圭（宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 主任嘱託員）

第Ⅲ章—第3節、第3節2～6、第V章

上田圭一・矢作健一（パリノ・サーヴェイ株式会社）

第Ⅳ章

8. 現地調査・資料整理にて得られた遺物・実測図・写真・デジタルデータ等の各種調査記録は、すべて宜野湾市教育委員会文化課にて保管している。

## 目 次

序

巻頭図版

例言

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第1節 遺跡の位置と環境	5
第2節 自然的環境	6
第3節 歴史的環境	7
第4節 嘉数地域の位置と環境	8
第5節 嘉数区の聖地と祭祀	9
第6節 嘉数トゥンヤマ遺跡と周辺遺跡	11
第Ⅲ章 発掘調査の成果	13
第1節 調査区の設定と層序	13
1. 調査区の設定	13
2. 基本的層序	14
第2節 遺構	21
1. 溝状縦敷遺構	21
第3節 遺物	31
1. 沖縄産施釉陶器	33
2. 沖縄産無釉陶器	56
3. アカムヌー	69
4. 沖縄産瓦質土器	84
5. 本土産陶磁器	84
6. その他の近世～現代遺物	86
第Ⅳ章 自然科学分析調査の成果	90
第Ⅴ章 結語	97
参考文献	98
図 版	101
報告書抄録	

## 卷頭図版目次

卷頭図版1 嘉数トウンヤマ遺跡（昭和20年撮影空中写真オルソ）

卷頭図版2 嘉数トウンヤマ遺跡（平成10年撮影空中写真オルソ）

卷頭図版3 調査区全景（溝状構造構造完掘状況）

卷頭図版4 遺構・遺物検出状況

## 挿図目次

第1図 宜野湾市の位置図	5	第28図 沖縄產施釉陶器10 鍋、安瓶、壺	55
第2図 宜野湾市遺跡変遷図	7	第29図 嘉数トウンヤマ遺跡における壺の文様	56
第3図 宜野湾間切嘉数村全圖（明治36年）一部加筆	8	第30図 沖縄產無釉陶器の組成と各分類の出土状況	57
第4図 嘉数村の聖地	9	第31図 沖縄產無釉陶器1 壺、甕	63
第5図 嘉数周辺地域の遺跡情報図1	11	第32図 沖縄產無釉陶器2 壺	64
第6図 嘉数周辺地域の遺跡情報図2	12	第33図 沖縄產無釉陶器3 甕	65
第7図 発掘調査地区位置図（S=1/5000）	13	第34図 沖縄產無釉陶器4 握鉢	66
第8図 グリッド設定図（S=1/1000）	13	第35図 沖縄產無釉陶器5 握鉢	67
第9図 調査区設定状況（S=1/1000）	14	第36図 沖縄產無釉陶器6 鉢、皿？、急須、火鉢、蓋	68
第10図 断面図1	15	第37図 鍋身の器形と鍋蓋との対応関係	70
第11図 断面図2	17	第38図 アカムヌーの組成と各分類の出土状況	71
第12図 断面図3	19	第39図 アカムヌー1 鍋蓋、鍋	76
第13図 全体平面図1	23	第40図 アカムヌー2 鍋	77
第14図 全体平面図2	25	第41図 アカムヌー3 羽釜、鉢	78
第15図 全体平面図1（オルソ画像）	27	第42図 アカムヌー4 鉢、握鉢、急須、急須	79
第16図 全体平面図2（オルソ画像）	29	第43図 アカムヌー5 火炉	80
第17図 口径計測位置	31	第44図 アカムヌー6 火炉	81
第18図 近世以降の人工遺物組成と遺構別の出土状況	31	第45図 アカムヌー7 火炉	82
第19図 沖縄產施釉陶器1 瓶	46	第46図 アカムヌー8 火炉、不明	83
第20図 沖縄產施釉陶器2 碗	47	第47図 沖縄產瓦質土器	84
第21図 沖縄產施釉陶器3 瓶	48	第48図 本土產陶器の出土割合	84
第22図 沖縄產施釉陶器4 小碗	49	第49図 本土產陶器	85
第23図 沖縄產施釉陶器5 鉢	50	第50図 その他の遺物1 円盤状製品	88
第24図 沖縄產施釉陶器6 鉢	51	第51図 その他の遺物2 ピーズ、煙管、簪、古銭	89
第25図 沖縄產施釉陶器7 皿	52	第52図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）	94
第26図 沖縄產施釉陶器8 灯明皿、急須蓋、急須、瓶、瓶子	53	第53図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）	95
第27図 沖縄產施釉陶器9 香炉、花生け、火入れ、酒器	54	第54図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）	96

## 図版目次

図版1 調査経過	4	図版12 沖縄產施釉陶器7 鉢	107
図版2 戦前の旧嘉数村（昭和20年米軍撮影）	8	図版13 沖縄產施釉陶器8 鉢	108
図版3 イースヤマの祠	10	図版14 沖縄產施釉陶器9 皿	109
図版4 トウンヤマのトゥンの祠	10	図版15 沖縄產施釉陶器10 灯明皿、急須蓋、急須	110
図版5 トゥンに隣接する地祇火神の祠	10	図版16 沖縄產施釉陶器11 瓶、瓶子、香炉、花生け	111
図版6 沖縄產施釉陶器1 瓶	101	図版17 沖縄產施釉陶器12 火入れ、酒器	112
図版7 沖縄產施釉陶器2 碗	102	図版18 沖縄產施釉陶器13 鍋、安瓶、壺	113
図版8 沖縄產施釉陶器3 瓶	103	図版19 沖縄產無釉陶器1 壺	114
図版9 沖縄產施釉陶器4 碗	104	図版20 沖縄產無釉陶器2 壺	115
図版10 沖縄產施釉陶器5 小碗	105	図版21 沖縄產無釉陶器3 壺	116
図版11 沖縄產施釉陶器6 鉢	106	図版22 沖縄產無釉陶器4 壺	117

図版 23	沖縄産無釉陶器 5 捕鉢	118	図版 37	アカムヌー 11 鉢	131
図版 24	沖縄産無釉陶器 6 捕鉢	119	図版 38	アカムヌー 12 鉢	132
図版 25	沖縄産無釉陶器 7 鉢	120	図版 39	アカムヌー 13 捕鉢、急須蓋、急須	133
図版 26	沖縄産無釉陶器 8 皿?、急須、火鉢、蓋、火入れ	121	図版 40	アカムヌー 14 急須	134
図版 27	アカムヌー 1 鍋蓋、鍋	122	図版 41	アカムヌー 15 急須	135
図版 28	アカムヌー 2 鍋	123	図版 42	アカムヌー 16 火炉	136
図版 29	アカムヌー 3 鍋	124	図版 43	アカムヌー 17 火炉	137
図版 30	アカムヌー 4 鍋	125	図版 44	アカムヌー 18 火炉	138
図版 31	アカムヌー 5 鍋	126	図版 45	アカムヌー 19 火炉、不明	139
図版 32	アカムヌー 6 鍋	127	図版 46	アカムヌー 20 火炉	140
図版 33	アカムヌー 7 鍋	128	図版 47	沖縄産瓦質土器	141
図版 34	アカムヌー 8 鍋	127	図版 48	本土産陶磁器	142
図版 35	アカムヌー 9 鍋	129	図版 49	その他の遺物 1 シーサー、不明	143
図版 36	アカムヌー 10 鍋、羽釜、鉢	130	図版 50	その他の遺物 2 円盤状製品、ビーズ、煙管、簪、古錢	144

## 挿表目次

第 1 表	嘉数周辺地域の埋蔵文化財包蔵地一覧	11	第 12 表	本土産陶磁器集計表	84
第 2 表	嘉数周辺地域の遺跡	12	第 13 表	沖縄産瓦質土器觀察一覧	85
第 3 表	近世以降の遺物集計表	32	第 14 表	本土産陶磁器觀察一覧	85
第 4 表	沖縄産施釉陶器集計表	37	第 15 表	赤瓦集計表	86
第 5 表	沖縄産施釉陶器觀察一覧	42	第 16 表	円盤状製品集計表	86
第 6 表	沖縄産無釉陶器分類一覧	57	第 17 表	陶製器物の類觀察一覧	87
第 7 表	沖縄産無釉陶器集計表	58	第 18 表	円盤状製品觀察一覧	87
第 8 表	沖縄産無釉陶器觀察一覧	61	第 19 表	煙管觀察一覧	87
第 9 表	アカムヌー分類一覧	70	第 20 表	簪觀察一覧	88
第 10 表	アカムヌー集計表	72	第 21 表	古錢觀察一覧	88
第 11 表	アカムヌー觀察一覧	74	第 22 表	胎土分析試料一覧および胎土分類	91

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯

## 第1節 調査に至る経緯

嘉数トウンヤマ遺跡は、『土に埋もれた宜野湾』（1989年）・『宜野湾市文化財情報図』（2002年）等にて報告がなされている「周知の遺跡」である。同遺跡が所在する嘉数地域は、比屋良川護岸整備、嘉数高台公園、比屋良川流域公園整備等の各種開発事業のほか、戦後の外人住宅建設や昨今の宅地開発等の市街地化によって旧来の姿を失いつつあり、同遺跡についても遺跡の性格を把握するための詳細な確認調査が必要性とされていた。

### 嘉数トウンヤマ遺跡の個人農地の土地造成に伴う保護調整と緊急発掘調査の実施

嘉数トウンヤマ遺跡の包蔵地一帯の当該用地において、文化財パトロールによって、国有地管理処分に伴う競売計画がなされていることが判明した。市教育委員会では競売計画を担当している内閣府沖縄総合事務局財務部と調整し、当該用地での試掘・確認調査の事前実施についての理解を得た。その結果を県教育庁文化課に対して報告し、開発調整用資料の取得を目的として、文化庁国庫補助事業による試掘・確認調査の実施について承諾を得て、平成16年8月9日より試掘・確認調査に着手し平成16年11月15日調査を完了した。調査の結果、管理処分の対象となった国有地全域に埋蔵文化財が包蔵されていることが確認された。（その成果については平成19年度刊行した「嘉数トウンヤマI」で報告している。）

確認された埋蔵文化財の取り扱いについて、沖縄総合事務局との調整を行い、地下遺構への影響等によっては記録保存のための「本発掘調査の措置」が必要とされる旨、競売物件調書に記載された。当該用地の落札者である地権者は当該用地において、切土造成を実施し、高さ1m程度の擁壁を設置し、畑地の造成は重機により深さ1m程度、攪拌して土地改良して使用する。」とのことであった。平成18年4月24日これらの経緯を県文化課へ報告し、今後の取り扱いについて確認した。個人の農地土地造成であるため、文化庁国庫補助事業として発掘調査を実施することになった。

同日、地権者より文化財保護法第99条の規定に基づき、当該用地の発掘調査の依頼が宜野湾市教育委員会へあり、平成18年4月28日付け、地権者から同法第93条第1項により、沖縄県教育委員会教育長へ埋蔵文化財発掘届が提出された。市教育委員会では同法第99条第1項の規定に基づき、平成18年6月26日付け宜教文第2号により発掘調査通知を沖縄県教育委員会教育長へ提出し、緊急発掘調査の実施に向けた事務手続きを終了した。

以上の経緯により、市教育委員会は調査担当者1名、臨時職員14名を充て、平成18年6月1日から緊急発掘調査を開始し、平成19年1月15日に発掘調査を完了した。同年1月26日付け宜教文第2号文書にて、宜野湾警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出したほか、県教育庁文化課には埋蔵文化財保管証を発掘調査終了報告をそれぞれ提出した。その後、沖縄県教育委員会による埋蔵文化財認定通知があつた旨の事務連絡が宜野湾警察署長より、平成19年3月13日付け文書にて宜野湾市教育委員会宛に提出された。

## 第2節 調査体制

嘉数トウンヤマ遺跡包蔵地内の個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査については、平成18年度に実施し、資料整理および報告書作成に係る整理業務は、平成19・20年度にかけて実施した。なお、調査体制は下記のとおりである。

事業主体	沖縄県宜野湾市教育委員会		
事業責任者	教育長	普天間朝光	(平成18～20年度)
	教育長職務代行者	新田 和夫	(平成20年度)
事業総括	教育部 教育部長	外間 伸儀	(平成18年度)
	" "	新田 和夫	(平成18・19年度)
	" 教育次長	新田 和夫	(平成18年度)
	"	伊佐 友孝	(平成18～20年度)
	文化課 課長	城間 盛久	(平成18年度)
	"	和田 敬悟	(平成19・20年度)
事業事務	文化課 文化財保護係長	呉屋 義勝	(平成18年度)
	" "	豊里 友哉	(平成19・20年度)
	" 文化財保護係主任主事	仲村 健	(平成18～20年度)
	" "	城間 肇	(平成18～20年度)
	" "	森田 直哉	(平成18年度)
	" 臨時職員	西銘 五月	(平成18・19年度)
	" "	野原 美幸	(平成20年度)
調査業務	" 文化財保護係主任主事	仲村 健	(平成18～20年度)
	" "	城間 肇	(平成18～20年度)
	" "	森田 直哉	(平成18年度)
	"嘱託職員	伊藤 圭	(平成19・20年度)
調査作業員	" 臨時職員	上里やよい、仲松光子、米須富士江、伊波晴美 比嘉ムツ子、宮城常正、津波古美津江、徳里末子 伊佐美幸、町田弘美、友利久美子、岸本静子 伊波加代子、渡久地美江子、上連天賀、村越克己 崎山幸子、宮城和江、宮城真由美、比嘉武也 (平成18～20年度) 宮里みどり (平成18年度)	
資料整理業務	" 文化財保護係主任主事	仲村 健	(平成18～20年度)
	" "	城間 肇	(平成18～20年度)
	" "	森田 直哉	(平成18年度)
	"嘱託職員	仲田 初枝	(平成19年度)
	" "	伊藤 圭	(平成19・20年度)
	" "	杉村千重美	(平成19・20年度)

資料整理業務	文化課 嘲託職員	許田 栄美（平成 20 年度） 伊禮さおり（平成 20 年度） 古謝 和美（平成 20 年度）
	" "	
	" "	
資料整理作業員	" 臨時職員	新田政江、伊波晴美、田盛謙代、古謝和美 喜名ひとみ、平川邦子、池田一美、真志喜正枝 山田葉月、原田円、伊佐祐姫、翁長和佳子 比嘉ムツ子、宮里みどり、宮平優子、新垣綾子 比嘉美香、稻嶺恵利奈（平成 18～20 年度） 杉村千重美（平成 18 年度）
委託業務	画像解析業務	（財）京都市埋蔵文化財研究所
	自然科学分析調査	パリノ・サーヴェイ株式会社
	発掘労務作業	社団法人宜野湾市シルバー人材センター

#### 調査指導及び調査協力

調査指導および調査協力、調査指導および調査協力者として以下の方々に指導を仰いだ。

坂井 秀弥	文化庁文化財部記念物課	主任文化財調査官
清野 孝之	"	文化財調査官
島袋 洋	沖縄県教育文化課	記念物班長
盛本 黙	"	主幹
瀬戸 哲也	"	主任
中山 晋	埋蔵文化財文化財センター	調査課 主任
知念 隆博	"	" 主任
宮城 黙	嘉数区自治会長	
知花 良弘	嘉数区在住（地権者）	
知花 栄一	嘉数区在住（隣地地権者）	
嵩元 政秀	宜野湾市文化財保護審議会	会長
新垣 義夫	普天満宮 宮司	（宜野湾市文化財保護審議会 委員）
赤嶺 政信	琉球大学 教授	（ " 委員）
池田 荣史	" 教授	（ " 委員）
大城 逸朗	おきなわ石の会 会長	（ " 委員）

### 第3節 調査経過

#### 発掘調査の経過

嘉数トウンヤマ遺跡包蔵地内の個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査については、嘉数区自治会に対して事前の協力依頼を行い、伐採等の環境整備に始まって、実質的な現地調査は平成18年6月7日より着手した。今回の調査は、市文化課文化財保護担当職員1人・発掘作業員14人・発掘労務作業員（市シルバーハンモックセンター会員）10人の計25人で実施し、調査面積は883m<sup>2</sup>であった。

調査区設定については、平成16年度の範囲確認調査区のグリッドを流用して行った。トウン（嘉数之殿）と称される嘉数集落の拝所から南方向の軸線を基軸とし、それに直交する形で東西に任意の作業軸を設けてグリッドを設定した。グリッドの規模は5m×5mである。

調査はプレハブ設置前に南東側にトレント1を設けて、重機による掘削と礫敷遺構の検出、諸記録を行い埋め戻しプレハブを設置した。次に西側にL字状のトレント2を設けて掘削し、溝状遺構と多数のピットを検出した。その後、調査は北西隅から南西に広げる形でグリッド掘りを行い、層序を確認しながら進めていった。主要なグリッド断面図を作成しつつ、畦を撤去して、9月初旬には15ライン以西の全体的な遺構が検出された。調査区中央部分のM14・15、N15、O15グリッドからはグスク時代に想定される多数の柱穴、土坑が、また、その北側から東にかけて柱穴等を切る形で溝状遺構が検出された。調査区南側からは重機による搅乱が広範囲にみられた。全体写真は作業状況に合わせてグリッド毎にオルソ画像を作成していく最終的にそれらをつなぎ合わせて完成させた。

調査を進めるに溝状遺構は北側と南側に2基あり、それぞれ礫敷されており、溝礫敷内からは近世の遺物が多数出土した。10月初旬からは調査区中央部分の柱穴や土坑を半裁または4分割しながら調査を進めていたが、予想以上に柱穴、土坑の切り合いが多く、12月末に15ライン以西の調査が終了し、翌年1月に残土置き場であった16、17ラインのグリッドを掘削し、2基の溝状礫敷遺構の東側とその他の柱穴、土坑の検出、掘削や諸記録を行い。平成19年1月15日に埋め戻し、原状回復作業をもって発掘調査を終了した。



図版1 調査経過

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

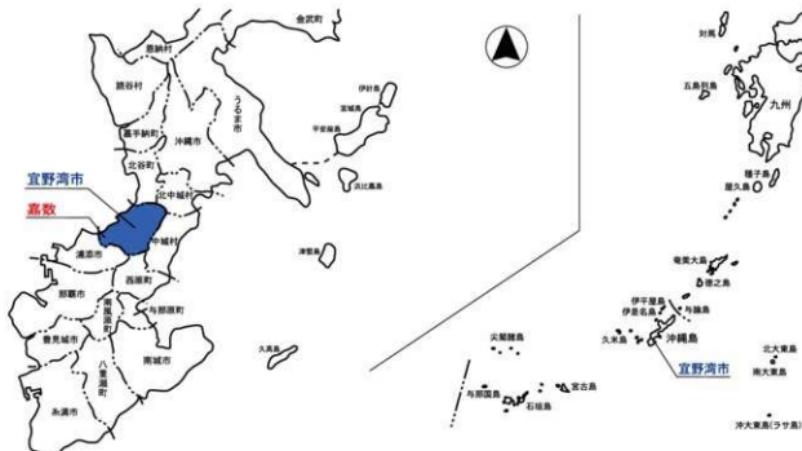
### 第1節 遺跡の位置と環境

#### 宜野湾市の位置と環境

宜野湾市は、沖縄本島中部西海岸にあって東シナ海に面し、周辺には北谷町・北中城村・中城村・西原町・浦添市が隣接する。那覇市からは北に 12.4 km 離れた地点に位置し、市域には国道 58 号線、330 号線等の主要幹線が、普天間飛行場基地の外縁部に廻っている。さらに、沖縄自動車道北中城 IC・西原 IC へのアクセス道路として、県道宜野湾北中城線や 34 号線などの県内主要幹線道路も展開し、本島中南部と北部地域を結ぶ要所となっている。

総面積は 19.69 km<sup>2</sup>で、略東西 6.1 km、略南北 5.2 km の略長方形を呈す。市域北側にキャンプ瑞慶覧、中央に普天間飛行場基地が占拠し、市民居住区域は普天間飛行場基地の外縁部に展開するドーナツ状をなす。地目比率は、米軍基地が 32.4%、民間地の宅地 38%、田畠 5%、原野 2%、その他 23% となっている（2007 現在）。

地形は、ひな壇状の 4 つの段丘面を形成し、海岸沿いの沖積低地、内陸側の 3 つの段丘面は大半が琉球石灰岩層で成り立つ。琉球石灰岩層の段丘線には洞穴と湧泉が点在し、本市の自然及び人文的景観の特徴となっている。また、中城と接する範囲では、クチャと称される泥岩の島尻層群が見られる。海拔高度の最高位は、中城村・西原町・本市の 3 市町村界にあたるサンカホージリと称する 146 m の地点である。河川は浦添市と西原町の境に比屋良川、北谷町・北中城村・中城村との境に普天間川が流れている。気候は亜熱帯性で、年間平均気温は 22.7°C と温暖である。雨量は春から夏が多く、夏から秋は台風が多い。年間降水量は 1800 ~ 2500 mm 程である。



第1図 宜野湾市の位置図

前身の「宜野湾間切」は、1671 年に浦添・中城・北谷の三間切から 13 村を割き、新たに 1 つの村を設けて、14 村で新設された。1649 年編纂『絵図郷村帳』には、宜野湾間切新設以降の「村名」として、浦添間切に「かよく・宜湾・かミ山・加數・志やな・大志やな・内ミナ・喜友名・あら城・いさ」、中城間切に「前ふてま・寺ふてま」、北谷間切に「あきな」がある。先の三間切から割かれた「村」がそれらの「村々」に相当し、「真志喜」村が新たな「村」に相当する。

1908 年（明治 41 年）「沖縄県及島根町村制」の施行により、従来の間切は町・村に、村は字に改められた、宜野湾間切は宜野湾村となる。宜野湾村の戸数は 2,401 戸、人口は 11,184 人を数え、1939 年（昭和 14 年）には、志真志・長田・愛知・赤道・中原・上原・真栄原の 7 つの屋取集落が新たな「字」として設置され、1943 年（昭和 18 年）には真栄原から佐真下が分離して新たな「字」が設置された。今次大戦を経て、1955 年段階で 18,469 人の人口も 1960 年 3 月には 3 万人を越え、1962 年 7 月 1 日に宜野湾市に昇格し、1964 年 2 月には戦後の混乱期の産物である対人的行政区を、地域を明確にした 20 の行政区に分割統合している。

市制施行後も市域の市街化傾向は急激をきわめ、嘉数ハイツ・大謝名団地・上大謝名区の自治会が新設されるに及び、宜野湾市は都合 23 自治会 20 行政区によって編成されるようになった。さらに、「那覇広域都市計画圈」において軍用地を除く市全域が市街化区域に指定されることとなった。これに併せて、西海岸の公有水面埋め立てに伴うコンベンションセンター・市営球場などの公共施設の整備により、宜野湾市は新しい市街地として発達している状況にある。宜野湾市の総世帯数は、2009 年 12 月現在、38,103 世帯、人口は 92,294 人となっている状況で年々増加傾向にあると言える。現在、宜野湾市は将来の都市像「ねたてのぎのわん」の実現に向けて、経済の自立＝コンベンション・リゾート都市の形成、生活・居住の自立＝ハイアメニティ都市の形成、文化の自立＝国際学園文化都市の形成を柱とする諸公共事業が推進されている。

## 第 2 節 自然的環境

宜野湾市の地形は、4 つの海岸段丘からなる。第 1 面は、比屋良川河口右岸から宇地泊・大山・伊佐に連なる標高 3 ~ 30 m（低位段丘下位面）の海岸低地で、第 2 面は、海岸低地から崖や急斜面となって比高 5 ~ 10 m 程上方になる大山・真志喜・宇地泊・伊佐一帯で、標高 30 ~ 40 m（低位段丘上位面）の石灰岩段丘をなす。第 3 面は、キャンプ瑞慶覧から普天間飛行場基地へと延びる標高 50 ~ 90 m（中位段丘下位面）の石灰岩段丘で、普天間飛行場基地の滑走路建設の際に大部分が改変されたが、1950 年米軍作成地形図では、標高 60 ~ 80 m の地形が 500 m の幅で続いている。第 4 面は、標高 90 m 以上（中位段丘上位面）の高位置で、野嵩のヒージャーバンタ～沖縄国際大以東に残存し、代表的なのは赤道から宜野湾の緑地帯である。石灰岩段丘縁辺部には、洞穴・湧泉が発達し、洞穴は第 3 段丘や第 4 段丘の周縁に点在、湧泉は第 2 段丘や第 4 段丘の麓部に多い。

地質は、泥岩（クチャ）の島尻層群と、不整合に覆う琉球石灰岩層、海岸低地の沖積層で形成される。島尻層群は、標高 80 ~ 120 m の位置の丘陵地に発達しており、その上層には肥沃なジャーガルが被さっている。琉球石灰岩層は、第 3 面以下に発達する。石灰岩層上部にはマージが堆積し、島尻層群と石灰岩層の境界一帯は、地質・地形の湾入・起伏が著しく、シマシガーやシリガーラなどの小河川によりブロックが分かれる。

### 第3節 歴史的環境

沖縄諸島に人類が住み着いたのは現在から約3万年前とされ、宜野湾市では大山洞穴から「大山洞人」と称される20歳前後の男性の下顎骨片が発見されている。このほかにも、普天満宮洞穴遺跡等においてリュウキュウムカシキヨンやムカシキヨン等の化石動物が発見されている。

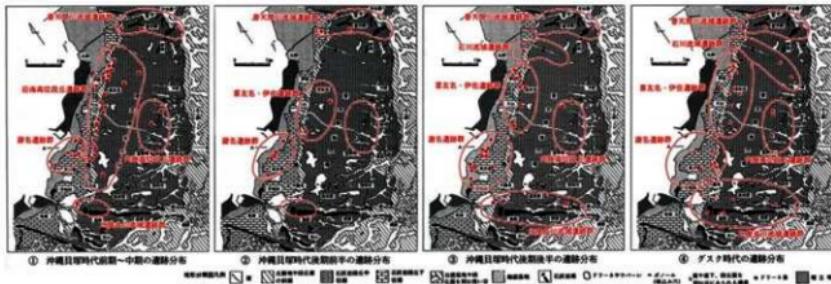
現在から6,000～7,000年前より、沖縄諸島に土器や石器などの技術を用いた生活文化が登場する。この文化は、沖縄固有の独自性が強いことから、九州や本州の縄文・弥生等の時代区分とは別に沖縄貝塚時代と称され、同時代は遺跡の立地・出土遺物等の違いから早期・前期・後期に大別されている。前期は、沖縄諸島域に当時の土器形式が広く分布することから、定着的な集団が各地域に形成される時期と考えられ、中期は、拠点的な大規模集落が平地帯に展開し、小規模遺跡が周縁に点在する。後期は、海岸低地の砂地にも居住域が拡散し、その規模も一律に大きくなっていくようである。

12～15世紀に及ぶグスク時代は、農耕を基礎とする社会が形成・発達した時期である。農耕の基盤である土地・その生産を支える道具の入手や製作・同時に展開された日本や中国・朝鮮・東アジア地域との交易などを通して各地域の集団は共同化し、その中から「按司」と称される在地支配者層が出現する。按司を中心とした各地域の集団は、互いの在地の権益を守り、且つ、それを拡大させるために相互に抗争を繰り返しながら淘汰していく、14世紀頃には中山・山北・山南の3つの勢力が拮抗するようになる。市域のグスク時代の遺跡は、迫地や河川流域の谷底低地を控える平地・丘陵斜面・段丘線の高所に立地しており、市域の伝統的集落である近世の“村”的形態がこの時期に端緒が求められる。

グスク時代以降は、第一尚氏、第二尚氏王統による中央集權的古代国家の確立、1609年の薩摩藩島津氏の侵攻等、幾通りかの過程を経て近世基盤型集落へと変化させ市域の伝統的村落や18世紀以降の屋取集落が形成されていく。

近代以降は、1872年に琉球藩、1879年には沖縄県の設置が強行され、1881年（明治14）6月には沖縄県庁の中部支所として中頭郡役所が普天間に移設された。併せて中頭郡教育事務所、中頭郡組合農事試験場などの官公署が設置され、市域は本島中部地域の政治・経済・教育の中心となる。1902年（明治35）には首里から普天間に至る普天間街道、1922年（大正11）には県営鉄道嘉手納線（軽便鉄道）が開通し、利便性は一層高まりをみせた。1908年（明治41）の「沖縄県及び島嶼町村制」の施行により間切は町・村に、村は字に改められ宜野湾村となる。また、屋取人口の社会的増加等もあり、新たな字が分離・新設された。

先の大戦により本市域も壊滅的な打撃を被り、戦後の軍用地接收と度重なる基地造成によって市域の景観は大きく変貌した。他地域に比べ、僅かに焼失を免れた野嵩地区が市域住民をはじめ以南の戦闘地域住民の収用所となつた。1946年9月以降、帰住が許可され、社会基盤の復活が果たされると米軍基地関連産業の活況により市域の人口も急増した。1962年7月1日には市に昇格し、1964年2月には対人的行政区の地域を明確にした20行政区に分割統合された。



第2図 宜野湾市遺跡変遷図

#### 第4節 嘉数地域の位置と環境

##### 嘉数地域の概況

嘉数地域は、方言で「カカジ」と称されており、近世の首里王府によって編纂された『おもろさうし』巻十五には、「かかずもりぐすく」と聖地ウィースヤマの歌謡が見られることでも知られている地域である。

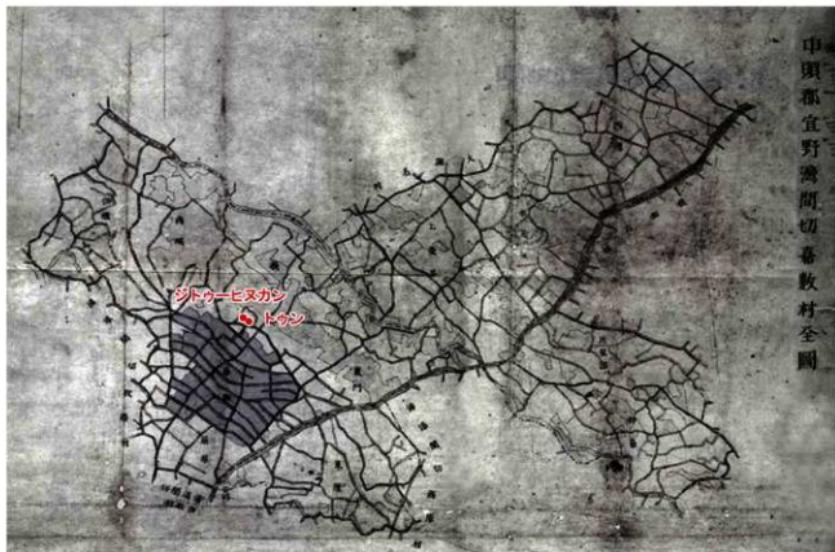
嘉数集落の北側には大謝名、北東側には真栄原・佐真下、西側から南東側にかけて浦添市に隣接しており、旧嘉数村の頃の小字には伊礼原・内城原・後原・嘉数原・前原・東原・東門原・仲嘉原・比屋田原・上栄茶原・水玉屋原・西原があったが、昭和14年の村行政区画設置に基づき、西原が佐真下に、仲嘉原・比屋田原・上栄茶原・水玉屋原が真栄原に分離されている。旧集落は嘉数原にあり、旧来の碁盤目型集落の面影を残した数少ない集落である。集落の後方にウィースヤマ（嘉数高台）があり、その北麓を比屋良川が流れ、東側のウシクス坂から浦添当山に至る道路は、旧並松街道であった。

嘉数地域に残る伝承によると、小字後原と同内城原に集落があり、その2つの集団が嘉数原に移動合併して旧嘉数村を形成したとされ、慶長検地時には既に「賀数」（浦添間切）は存在していたとされている。現在の嘉数集落の大半は伊礼原・内城原・嘉数原に集在しており、1979（昭和54）年には伊礼原を中心とした新興住宅地に嘉数ハイツ自治会が設置されている。

戦前までの嘉数は、ほとんどが純農業集落で家畜も盛んであった。畑作は甘藷が主で、ミーゾーキ（箕）等の竹細工も盛んで、嘉数ソーキとしても有名であった。



図版2 戦前の旧嘉数村（昭和20年米軍撮影）



第3図 宜野湾間切嘉数村全圖（明治36年）一部加筆

## 第5節 嘉数区の聖地と祭祀

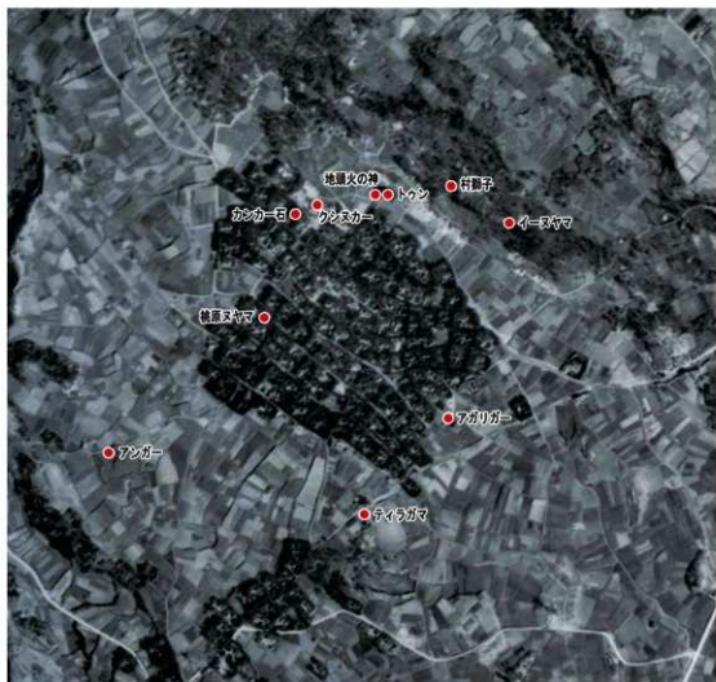
### 嘉数区の聖地

嘉数区には御嶽と呼ばれる4箇所の聖地が所在する。卯ヌ嶽とされるイーヌヤマ、酉ヌ御嶽とされる桃原ヌヤマ、午ヌ御嶽とされるティラガマ、子ヌ御嶽とされるトゥンの聖地である。嘉数区で最も重要視されているイーヌヤマは、集落東方にある現在の嘉数高台に所在する。集落北方にあるトゥンヤマにはトゥンの祠があり、そこには地頭火ヌ神の祠も隣接している。集落西方にある嘉数区の主な宗家の一つである桃原(屋号)の屋敷内には桃原ヌヤマがあり、集落南方の前原(小字)にティラガマが位置する。

共同湧泉としては、アガリガー、ミーガー、エーガー等があり、ミーガーと嘉数区の産泉であるアガリガーは拝所となっている。また、旧暦8月10日に行われる集落の厄払いと安全祈願を目的としたコースユエー(龜の祝い)の行事には、供物となる牛一頭を屠り、その肉をカンカー石に供えていた。その他に、現在イーヌヤマに所在する村獅子は、かつてはイーヌヤマとトゥンヤマの中間にあたるシーサーモーに鎮座していたようだ。

### 文献史料からみる嘉数区の聖地

嘉数区の聖地の中でも、イーヌヤマとトゥンの聖地が首里王府の編纂史料に登場する。イーヌヤマの呼称は史料によって異なり、『おもろさうし』(1623年)に「かゝずもりぐすく」、『琉球国由来記』(1713年)に「スマナリノ嶽」、『琉球国旧記』(1731年)に「鈴鳴嶽」と記されている。『おもろさうし』の中でイーヌヤマは以下のように語られており、イーヌヤマを聖地として讃えている。



第4図 嘉数区の聖地

かゝずもりぐすく	(嘉数杜ぐすく)
ねたてもりぐすく	(根立て杜ぐすく)
なよくら てづて あまやかせ	(神女 祈って 甘やかせ)
又 けおのよかるひに	(今日の吉き日に)
けおのきやがるひに	(今日の輝く日に)
又 あらがみは てづて	(新神を祈つて)
おりなぐは てづて	(降り女を手摩りて)

また、戦時中においてイーヌヤマは日本軍の陣地として、嘉数高地あるいは九一高地とも呼ばれた激戦地でもあった。現在では嘉数高台の中央にある祠をイーヌヤマと呼んでいるが、かつては嘉数高台の森全体を含めた呼称でもあった。

一方、イーヌヤマの西方に位置するトゥンヤマのトゥンの祠は、『琉球国由来記』に「嘉数之殿」と記されており、トゥンでの祭祀に関する記述を確認することができる。さらに『琉球国旧記』に記された神殿の「嘉数殿」はトゥンヤマのトゥンと同一であると思われる。



図版3 イーヌヤマの祠



図版4 トゥンヤマのトゥンの祠



図版5 トゥンに隣接する地頭火ヌ神の祠

#### 文献史料からみるトゥンの祭祀

『琉球国由来記』をもとに、トゥンでのかつての祭祀の様相を捉えてみる。宜野湾間切時代、女性神役である宜野湾ノロ、野嵩ノロ、謝名ノロの三者は管轄する村々の司祭者となり、宜野湾ノロは嘉数の祭祀を取り仕切っていた。

また、『琉球国由来記』には「麦稻四祭」の祭祀行事に関する記述がみられ、麦稻四祭にはトゥンヤマの嘉数之殿（トゥン）に花米、五水、神酒、穂の供物を供えて、宜野湾ノロが祭祀を司っていたようである。

## 第6節 嘉数トウンヤマ遺跡と周辺遺跡

嘉数地域にて確認されている遺跡には、テラガマ洞穴遺跡・前原遺跡・内城原遺跡・内城原第二遺跡・内城原洞穴遺跡・内城原遺物散布地・後原遺物散布地・ウイーグスク遺跡・トウンヤマ遺跡・ウチグスク遺跡・ミーガー遺跡・ジトウヒニカン祭祀遺跡・トーバルヌヤマ祭祀遺跡・比屋良川流域古墓群・後原古墓群・内城原古墓群・後原石疊道・シュイワタンジ古道・嘉数91高地戦跡の19遺跡が確認されており、これらの遺跡の時代や時期・立地・内容・現況・保存状況等の詳細については、第4図及び下記する一覧（第1表）を参照されたい。

周辺遺跡としては、昭和14年の村行政区画設置以前の旧嘉数村の小字であった上栄茶原（現真栄原）のアガリイサガマ洞穴遺跡・比屋川橋、水玉屋原（現真栄原）や比屋田原（現真栄原・我如古に分割）のナガサクガマ遺物散布地がある。周辺地域の遺跡としては、大謝名前原第一・第二遺物散布地のほか、大謝名黄金森グスク遺跡・大謝名カシジャガマ岩陰遺跡がある。

第1表 嘉数周辺地域の埋蔵文化財包蔵地一覧

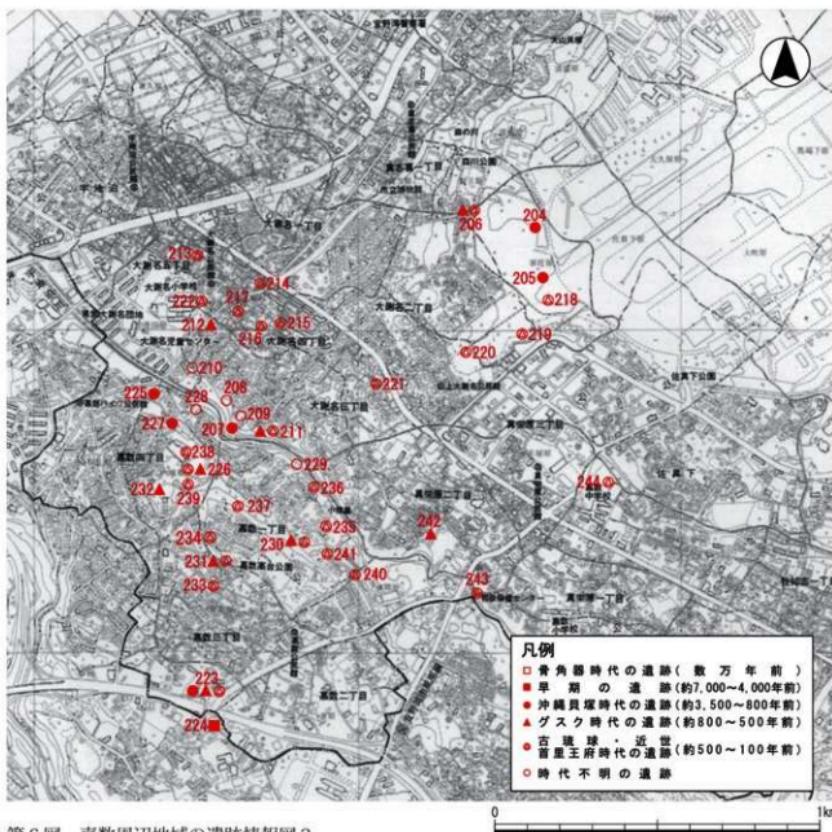
登録番号	遺跡名	所在場所	地質						発見年	発見方法	内 容	保存状況
			岩相	岩種	岩層	風化	地質	地質				
223	アガリイサガマ洞穴遺跡	「ちんがま」付近の山地	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群、陶片」 「土器製作跡」、「骨器遺跡」	井戸	良好
224	アガリイサガマ洞穴遺跡	「めいばら」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群、陶片」 「土器製作跡」、「骨器遺跡」	井戸	良好
225	内城原遺跡	「うらわざ」付近の山地	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
226	内城原第一遺跡	「うらわざ」付近の山地	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の手造地」	井戸	良好
227	内城原第六遺跡	「うらわざ」付近の山地	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群、陶片」 「土器製作跡」	井戸	良好
228	内城原遺物散布地	「うらわざ」付近の山地	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
229	新原遺物散布地	「じしはら」付近の山地	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
230	アガリイサガマ遺跡	「アガリイサガマ」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
231	トウンヤマ遺跡	「とうやま」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
232	ナガサクガマ遺跡	「ながさく」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
233	トーバルヌヤマ遺跡	「とばるぬやま」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
234	トーンヤマ遺跡	「とおやま」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
235	フローラルカ祭壇遺跡	「ふろーらーく」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
236	トーンヤマ祭壇遺跡	「とおやま」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
237	トーンヤマ古墳	「とおやま」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
238	内城原古墳	「うちわら」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
239	新原古墳	「ししはら」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
240	トーンヤマ古道	「とおやま」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好
241	新原古跡地帯	「ししはら」付近	テ	テ	テ	テ	テ	テ	1974	「中世後半至世紀の石器群」 「土器製作跡」	井戸	良好



第5図 嘉数周辺地域の遺跡情報図1

第2表 嘉数周辺地域の遺跡

大字	遺跡名	大字	遺跡名	大字	遺跡名	
204	東花原遺跡	218	東花原古墓群	231	トランシマ遺跡	
205	久永地区遺物散布地	219	久永地区第一古墓群	232	クチダスク遺跡	
206	東花原第二遺跡	220	久永地区第二古墓群	233	カーダー古墳群	
207	大謝名廻穴遺跡	221	東原古墓群	234	ジトゥーミスカン祭壇遺跡	
208	熊原第一遺物散布地	222	カシジヤーガマ岩陰遺跡	235	トーベルダヤマ祭壇遺跡	
209	熊原第二遺物散布地(日称比良川右い③地点)	223	テラガマ廻穴遺跡	236	比良良川城坂古墓群	
大謝名	210	南田原遺物散布地	224	前原遺跡	237	後原古墓群
	211	黄金森ノツク遺跡	225	内城原遺跡	238	内城原古墓群
	212	大謝名廻古瓦敷地	226	内城原第二遺跡	239	奥原石道
	213	ヤハトカグア古湯床	227	内城原廻穴遺跡	240	シュイタクジ吉道
	214	クシカニ古湯床	228	内城原廻物散布地(日称比良川左い②地点)	241	嘉数91高地軌跡
	215	ウイースマヤマ祭壇遺跡	229	後原遺物散布地(日称比良川左い③地点)	242	アガリタガマ廻穴遺跡(日称新町廻穴遺跡)
	216	ウカーチ紀原遺跡	230	ウイーグスク遺跡(日称嘉数遺跡)	243	比良川上橋
	217	ジトゥーミスカン祭壇遺跡			244	ナガサカガバ遺物散布地



第6図 嘉数周辺地域の遺跡情報図2

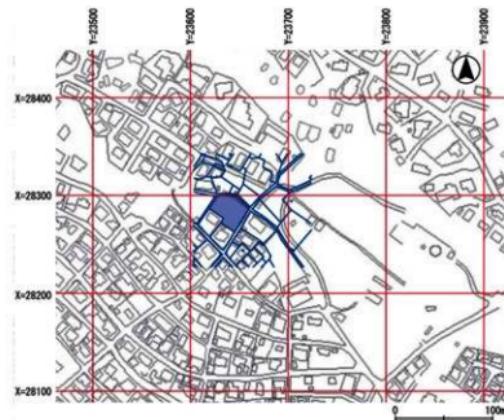
### 第Ⅲ章 発掘調査の成果

#### 第1節 調査区の設定と層序

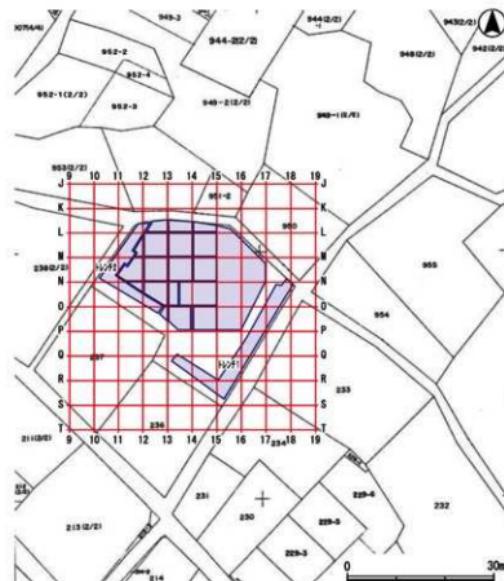
調査区の北側はウィーヌヤマ、通称、嘉数高台と称される丘陵であり、ふもとにてトウン（嘉数之殿）、ジトウヒニカシ（地頭火の神）と称される嘉数集落の拝所が設けられ、地域の方々に大切に繼承されており、その南側のなだらかに傾斜する一帯に嘉数集落は形成されている。調査区はトウンの南隣地にあり、嘉数集落の重要な区域である。

調査区の設定については、調査精度を維持するため平成16年度に実施した範囲確認調査の際に設定したグリッドを流用した。トウンと称される拝所から、南方方向の軸線を基軸としてアルファベット数字を、それに直交する形で東西に算用数字をともに5m毎に付して任意の作業軸を設定した後に、北東隅の交点に各グリッド番号をL-15・M-15のように指示している。さらに、地籍併合図や登記簿図面等をもとに境界測量を行い、隣接する住宅地や市道・里道等との境界を把握し、その損壊防止に努めたほか、GPS測量を導入して調査区内の基準点測量と水準点観測も併せて実施することで、国土座標系（旧座標第XV座標系）の座標値を確認し、調査範囲並びに位置を確定した。また、南側隣地との境界地付近についても、地権者より調査の実施についての許可を得たことから、トレンチ等を設定した後に調査を実施した。

前回の調査は範囲確認調査であったことから、基軸となる15ラインを中心とした4グリッドの調査を実施したが、今回は対象地すべてが開発されることとなるため、1筆すべてを本発掘調査として実施している。



第7図 発掘調査地区位置図 (S=1/5000)



第8図 グリッド設定図 (S=1/1000)

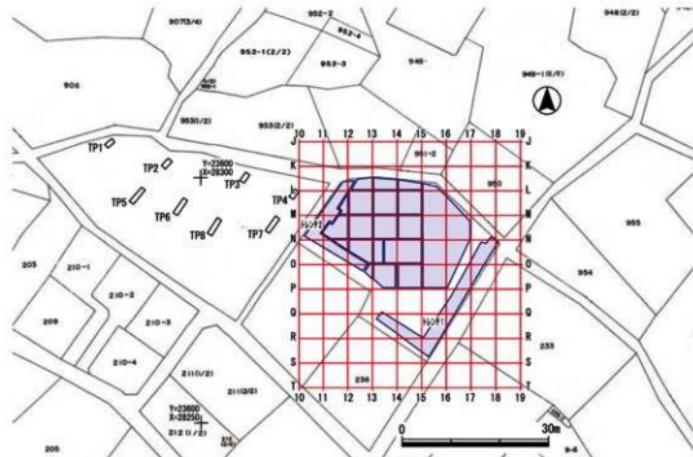
## 2. 基本的層序

嘉数トゥンヤマ遺跡は嘉数高台公園が所在する石灰岩堤の丘陵の南側に広がる緩傾斜地に立地している。今回の調査地区における土層堆積状況も丘陵地形を反映しており、基盤から堆積層に至るまで、丘陵の傾斜に沿った北東—南西軸の勾配を示す。しかし、調査地区は戦前からの耕作地であり、その後の重機などによる改変が著しく、自然地形や堆積状況を示す地点は確認されなかった。調査地区においては、表土層、擾乱層、旧耕作土層、地山赤土、石灰岩基盤が基本的な土層として把握される。遺構面は地山赤土面で確認されたものが多い。以下に基本的層序と遺構内の層序を記述する。

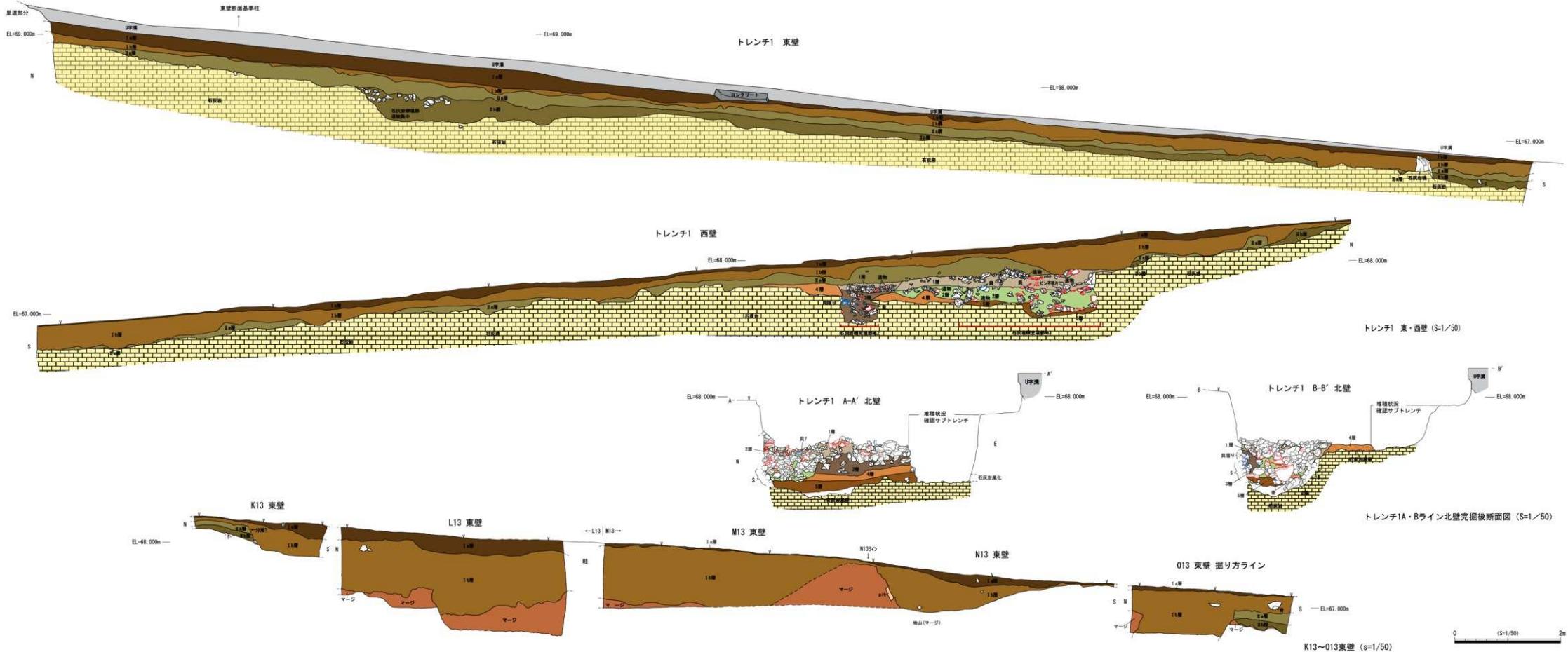
### 《基本的層序》

- I a 層 表土層。暗褐色混礫土層で、改変後の客土・擾乱層の上層が腐食土壤化した層。
- I b 層 客土・擾乱層。茶褐色混礫土層で、重機による掘削や、土壤の移動により擾乱されている。
- II a 層 旧耕作土層①。灰褐色土層で1cm程度の石灰岩礫のほか、焼土や炭化物も含んでいる。
- II b 層 旧耕作土層②。II a 層以前の耕作土。暗灰褐色混礫土層で、1cm程度の石灰岩礫のほか、粒形の小さい焼土を多量に含んでいる。
- III 層 暗褐色土層 土坑群内に堆積する。グスク時代の遺物を包含する。土地改変により土層が失われた可能性がある。
- IV 層 暗褐色土混赤土層（暗褐色土+島尻マージ） III層からV層への漸移層。
- V 層 地山赤土層（島尻マージ）

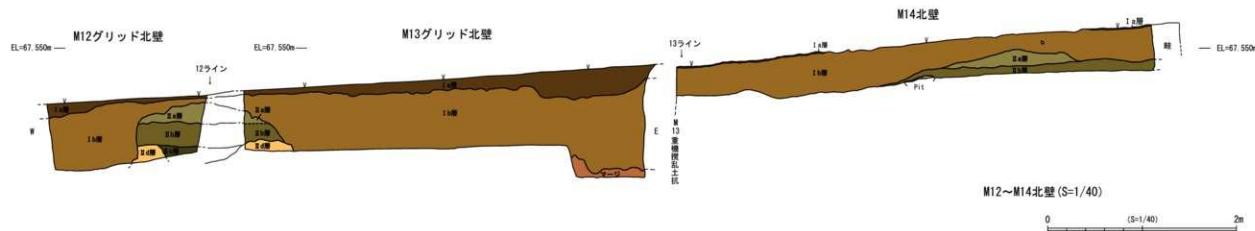
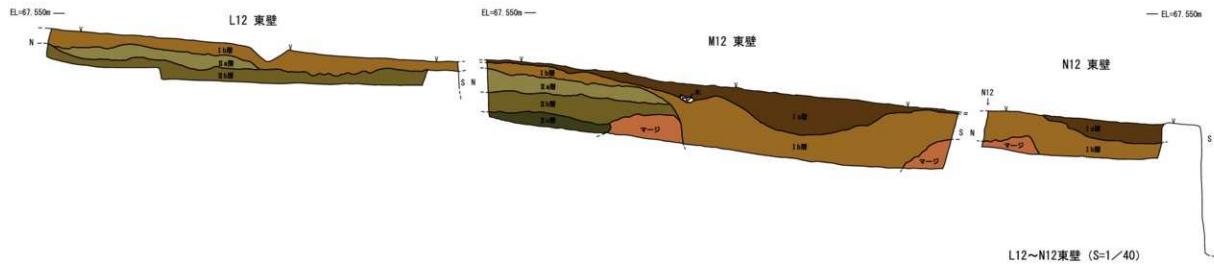
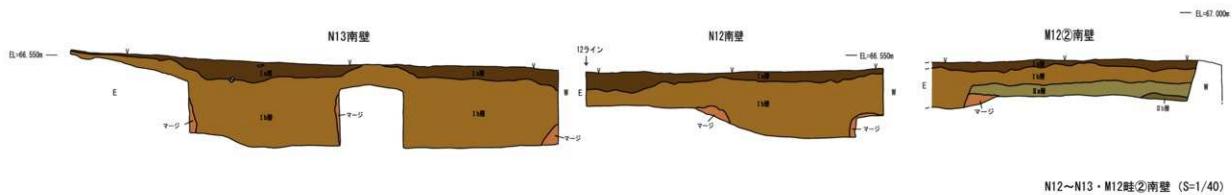
石灰岩岩盤



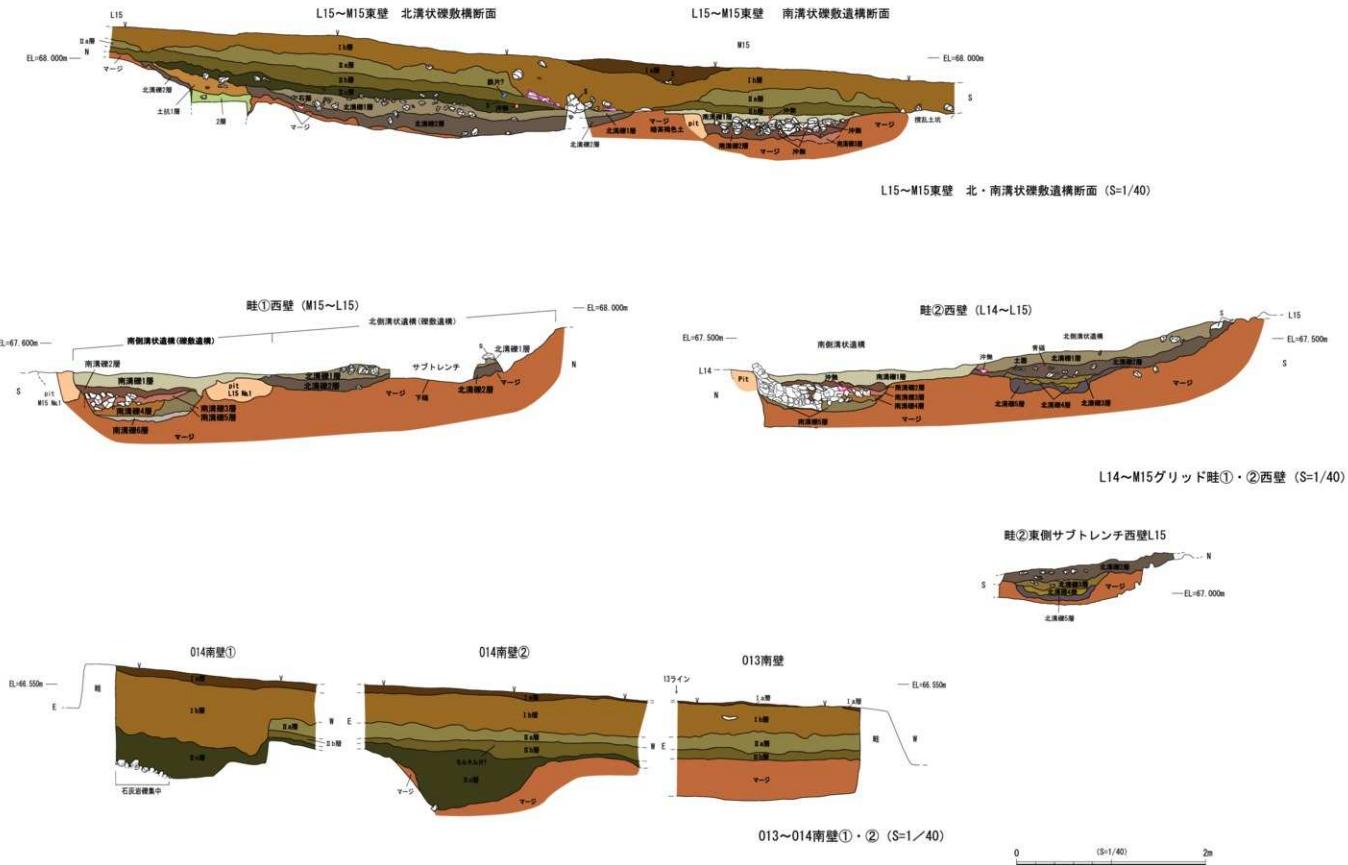
第9図 調査区設定状況 (S=1/1000)



第10図 断面図 1



第11図 断面図2



第12図 断面図3

## 遺構

嘉数トウンヤマ遺跡は嘉数高台公園が所在する石灰岩堤の丘陵下に広がる緩斜面に立地している。同地には嘉数区の御嶽である「嘉数ウーヌヤマ」や「嘉数トウン」、「地頭火の神」が所在しており、集落発祥の伝承が残されている。嘉数トウンヤマ遺跡の南面には、近世來の地割制集落である嘉数集落が位置しており、嘉数トウンヤマはいわゆる「クサティミイ」として典型的な近世集落の聖地である。今回の調査地区は嘉数トウンや地頭火の神の南側、旧道を隔てた緩斜面で、調査前は休耕地であった。同地の旧状は市指定有形文化財の「明治土地台帳付属地図」(明治36年)や昭和20年1月撮影米軍空中写真により確認することができる。今回の発掘調査により、溝状礫敷遺構、溝状遺構、土坑群などが確認されているが、今回は溝状礫敷遺構を中心に報告する。

溝状礫敷遺構は丘陵緩斜面の等高線にほぼ並行して造成されている2基の溝遺構で、北側のものを北溝状礫敷遺構、南側のものを南溝状礫敷遺構とする。また、2基の溝遺構にはそれぞれに土坑が付属しており、北溝状礫敷遺構の土坑をレキ充填土坑No.1、南溝状礫敷遺構の土坑をレキ充填土坑No.2とする。さらに、丘陵の傾斜に沿う溝があり、これを溝1、溝2、溝3とする。

### 北溝状礫敷遺構

本遺構はO 18グリットからK 13グリットを結ぶラインにおいて確認されている。検出された遺構面は幅約3.5m、長さ約30m、深度約50cmであるが、調査区端の断面層からさらに略東西に延長するものと考えられる。溝遺構の勾配は南東から北西に傾斜しており、凡そ地形に沿った勾配を示している。本遺構の構築にあたっては嘉数トウンなどが所在する丘陵の傾斜面を切り、露出した地山(マージ)を平坦に造成した上で、溝を構築している(巻頭図版4①)。本遺構の構造は検出面で確認された外輪溝とその内側の内輪溝の二重構造となっている。溝の南側については南溝状礫敷遺構の1層により切られている(第10図トレンチ1西壁)。遺構内の堆積層は丘陵から流入した土壤である北溝礫1層と、5cm内外の粒形の揃った礫や壺屋陶器などの遺物が混入する北溝礫2層、礫や遺物の少ない北溝礫3層~5層があり、1・2層が外輪溝に、3~5層が内輪溝に堆積する。O 18グリットからM 16グリットを結ぶラインまでは地山(マージ)を掘削して溝を造るが、N 17グリット以東は石灰岩盤が露出しており、岩盤を掘削して溝を構築している。本遺構の機能としては丘陵側からの雨水排水溝が考えられる。これは、後述の南溝状礫敷遺構と本遺構に付属して構築されているレキ充填土坑No.1の礫充填構造が共通していることを考慮した見解である。O 18グリットのレキ充填土坑No.1は石灰岩盤を掘削し、礫や陶器を充填した土坑で本遺構の排水溝と考えられる遺構である。同遺構については別項目で説明する。

### 南溝状礫敷遺構

本遺構はK 13グリットからO 17グリットを結ぶラインにおいて確認されており、これも調査区端の断面層からさらに略東西に延長するものと考えられる。検出された遺構面は幅約2.3m、長さ約33m、深度約50cmで、底部はなべ底状を呈する。その勾配は南東から北西に傾斜しており、ほぼ地形に沿った勾配を示している。本遺構は北溝状礫敷遺構と同じく外輪溝と内輪溝の二重構造で、検出面全体を通して遺構の輪郭は明瞭である。本遺構の構築にあたっては、北溝状礫敷遺構を構築する際に造成した平坦な地山(マージ)面を掘削して構築されている。よって、本遺構は北溝状礫敷遺構の南側に並列している。第12図畦②西壁L 14~L 15によれば、本遺構の外輪に当たる南溝礫1層が北溝状礫敷遺構の外輪(北溝礫1層)を切っていることが分かる。遺構内の堆積層は基本的に5~10cmの粒形の揃った石灰岩礫と壺屋陶器破片であり、その上を丘陵からの流入土壤である南溝礫1層が覆っている。M 15グリット一帯の礫層の希薄な部分では遺構構築後に丘陵から流入した土壤南溝礫1層~4層が堆

積している。5・6層及び礫層は遺構構築時に充填されたものと考えられる。本遺構の機能として丘陵側からの雨水排水溝が考えられる。これは本遺構が溝であること。礫や陶器の充填は丘陵からの土壌の流入により、溝が埋没しないための工夫であり、排水性を高める機能が考えられること。また、本遺構に付属する排水樹と考えられるレキ充填土坑No.2においても同様の堆積構造が見られること。さらに、丘陵の傾斜に沿った排水溝である溝3がK 12・13 グリットにおいて本遺構と連続していることから、雨水排水溝の可能性が高い。尚、No.2 土坑及び溝3については別項目で詳しく説明する。

#### レキ充填土坑No.1

本遺構はO 17・18 グリットの北溝状礫敷遺構の下層から確認された土坑である。石灰岩岩盤を2.5 m × 1.5 m、深度が60 cmほどの掘削で、石灰岩基盤を掘削した土坑中に、5～10 cm大の粒形の揃った礫と壺屋陶器等が充填されている。第10図トレンチ1西壁を見ると基盤の石灰岩を直に70 cm掘削し、1 m幅の平坦な床面を持つ土坑を造っている。土坑の西側の立ち上がりは20 cm程しかなく、層は土坑の範囲を超えて西側に拡大している。本遺構の1層は北溝状礫敷遺構からの延長部分に相当する礫層であるが、同断面層からは溝状の形態は確認されない。1層には多量の礫や陶器が充填され、隙間が多く出来ている。その隙間には多少の土壌が堆積するものの、目詰まりする程ではない。2層は北溝状礫敷遺構の延長である1層の下層に連続しており、1層に比較して礫の粒形や陶器破片が大きい。そのため隙間が大きくなるが土壌の流れ込みや目詰まりはない（巻頭図版4⑤）。本遺構の1層、2層の充填状況は時期差と言うよりも、遺構内の構造として捉えることができる。礫や陶器の充填は土壌を濾過し、排水機能を高めるための工夫で、1層と2層の粒形の異なりも濾過機能を高めるための構造と考えられる。よって、本遺構は北溝状礫敷遺構の排水樹としての機能が考えられる。

#### レキ充填土坑No.2

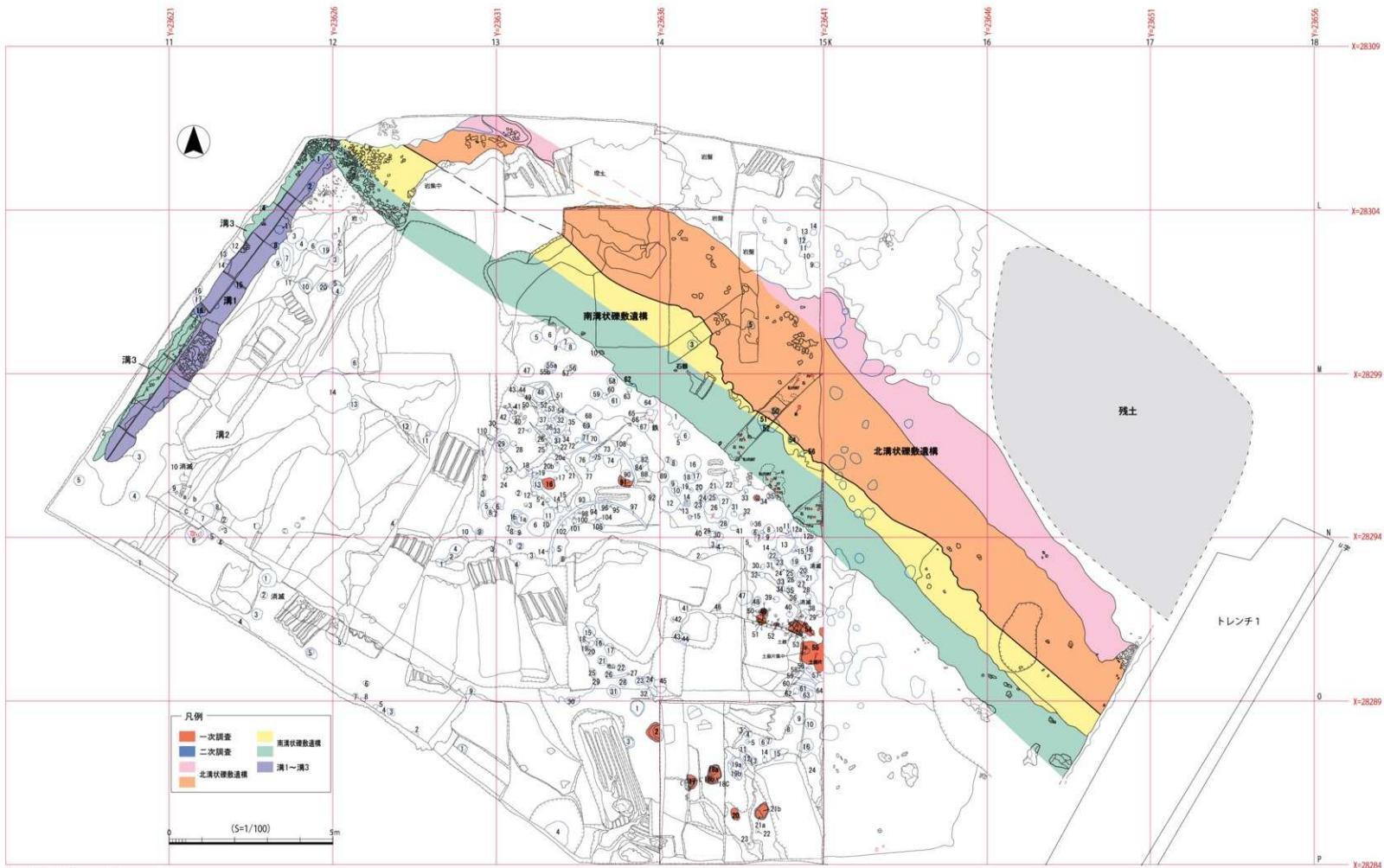
本遺構はO 17 グリッドの南溝の下層から確認された土坑である。4層及びレキ充填土坑No.1 1層から掘り込まれ、石灰岩岩盤を掘削している。検出面では1.1 m × 1 mの略方形を呈し、深度は60 mを測る。本遺構の1層は南溝状礫敷遺構の延長部分に相当する礫層で、溝状の断面形態が明瞭である。その下層に連続して3層がある。土坑内には5～10 cm大の粒形の揃った礫や壺屋陶器等を混ぜ充填している。上層の1層に小礫が多く、下層の2・3層は壺屋陶器が主体に充填されている（巻頭図版4⑥）。本遺構の礫充填状況もレキ充填土坑No.1と同じく、時期差と言うよりも遺構内の構造として捉えることができる。遺構内の堆積状況は排水機能を高めるための濾過構造で、本遺構は南溝状礫敷遺構の排水樹としての機能が考えられる。

### 溝3

本遺構はK 12 グリットからM 11 グリットを結ぶラインにかけて確認された旧道沿いの溝で、丘陵の傾斜に沿った排水溝である。溝2・3により大部分が破壊されているが、部分的に溝の輪郭線が残っており、旧形を想定することができる。検出面での法量は長さ約12 m、幅約50 cmを測る。本遺構の北端はK 12・13 グリッドにおいて南溝状礫敷遺構の西端と連結しており、同溝遺構の排水に関わる溝の可能性が高い。「明治土地台帳付属地図」（明治36年）には現在も残る旧道の脇に水路が記載されており、今回検出された溝もそれに関連する遺構の可能性がある。

### 溝1・溝2

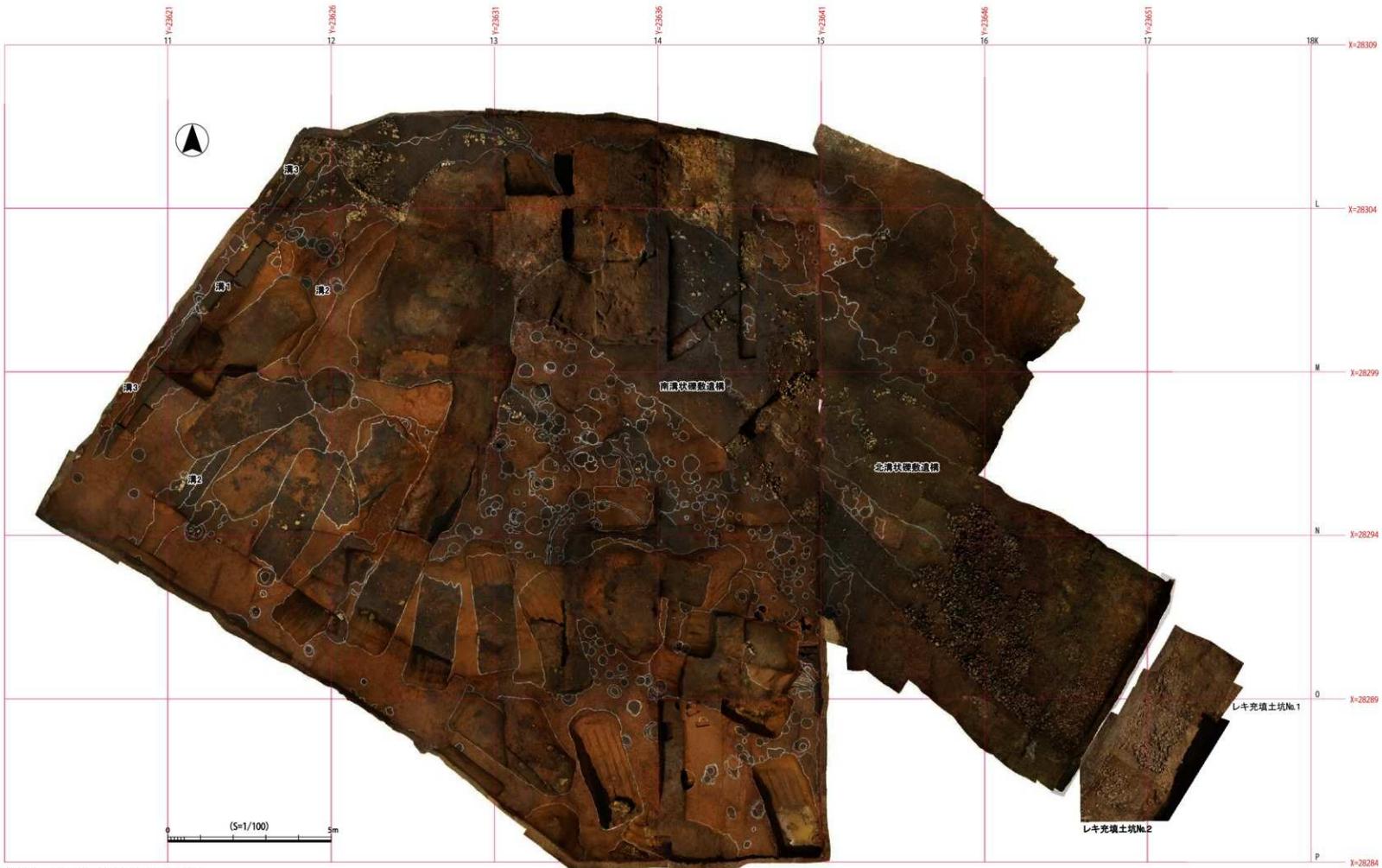
溝1・溝2はK 13 グリットからM 12 グリットを結ぶラインにおいて確認された排水溝である。検出面で約12 mを測り、丘陵の傾斜に沿う溝である。両溝遺構は近現代の溝ではあるが、同地が排水に適した場所であることを示す遺構である。



第13図 全体平面図1



第14図 全体平面図2



第15図 全体平面図1（オルソ画像）

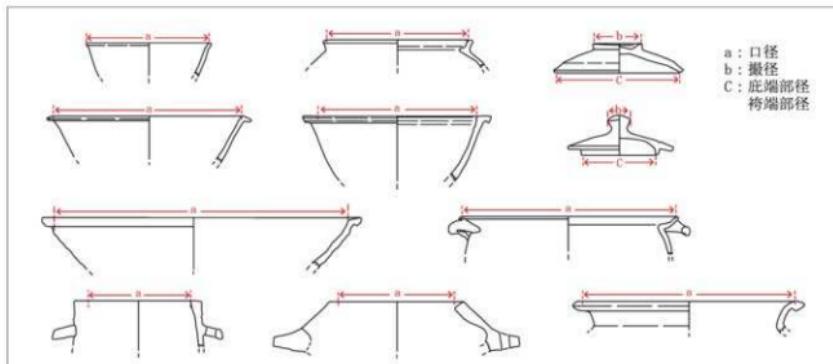


第16図 全体平面図2（オルソ画像）

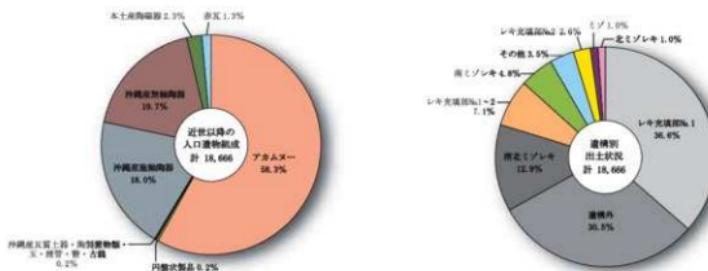
### 第3節 遺物

既に前節まで述べているように、本報告では嘉数トゥンヤマ遺跡における近世以降の様相を詳述している。本節においても近世以降の遺物の報告を行い、中世に比定される資料については次年度の報告を予定している。当該遺跡の2次調査で得られた近世以降の人工遺物は、総計18666点に上る。その内訳は、沖縄産施釉陶器3359点、沖縄産無釉陶器3682点、アカムヌー10887点、沖縄産瓦質土器5点、本土産陶磁器427点、赤瓦247点、円盤状製品33点などである。なお、本書で報告する瓦質土器は、後述するように沖縄産を想定した。一般に、瓦質土器は中世に比定されるが、沖縄産の瓦質土器は凡そ17世紀代に焼かれた可能性が指摘される（金城1995、新垣2000、瀬戸2004a）。そのため、得られた瓦質土器は本書で取り上げると共に、沖縄産の陶器やアカムヌーとの胎土分析による比較を試みた（第IV章参照）。

さて、以上に示した遺物組成からもわかるように、当該遺跡ではアカムヌーの出土量が最も多く、近世以降の人工遺物全体の約58%を占める（第18図）。また、遺構別の出土率を概観すると、レキ充填土坑No1（レキ充填部No1）からの出土量が最も多く、その割合は約37%である（第18図）。遺構外からの出土量を大きく上回る資料が当該遺構から出土しており、他の遺構からの出土量を圧倒する。以下に、主な遺物を報告する。観察表における口径は、第17図に示したような基準で実測図から計測した。なお、自然遺物については現在整理中であり、次年度の報告予定である。



第17図 口径計測位置



第18図 近世以降の人工遺物組成と遺構別の出土状況

第3表 近世以降の遺物集計表

種類 出土位置・層位	井戸底 施和陶器	井戸底 無釉陶器	アカムヌー	井戸底 瓦質土器	本土產 陶器	陶製 器物類	赤瓦	円盤状製品	玉	煙管	骨	古鏡	合計
表探	33	80	51		20		68						252
I	a	49	60	92		25		14	1		1		242
	b	267	287	443		83		68		2	1	1	1152
	a ~ b	601	365	1740		70		27	5		2		2810
I a ~ II a		8	4	13		4		2					31
I b ~ II a		2	7	3		1		2					15
I b ~ II b		18	22	20		5							65
II	a	75	93	273	1	29		9	1	1	1	1	484
	b	95	105	203		19		8			1		431
	a + b		1	1									2
	a ~ l	50	62	83		11		2	3				211
南溝状屢数	1層	37	65	163		8		2			1	1	277
	1~2層	12	17	15		1		3					48
	2層	26	40	57		7			1			2	133
	3層	22	121	105	1	1		3					253
	3~4層	10	38	39	1	2		5					95
	4層	9	47	5		2							63
	縫中		3	2									5
	遺構内	2	8	23		1							34
北溝状屢数	1層	11	12	12	1	1							37
	2層	20	51	16		4	2	2					95
	2~3層	1	3			1							5
	3層	1	8	6							1		16
	遺構内	10	24	4		2							40
南北溝状屢数	1層	3	11	10		6							30
	遺構内	436	708	1187		22	1	11	7				2372
	2層	9	8	4		2		1			1		25
溝	1層			2									2
	2層		1										1
	3層			6				3					19
	遺構内	6	4	6									8
3	1層	2	4	2									8
	2層	1	1	4		2							8
	3層	20	27	64			1	1					113
	遺構内	1		2									3
レキ充填部	1層	729	683	3722		41		6	7		1		5189
	1~2層	39	29	147		3		5	1				224
	2層	187	286	738		14			4				1229
	3層	3		7									10
	遺構内	12	50	111		4							177
	4層	14	14	162					1				191
	5層		2	2									4
	6層	8	27	7		2							44
No.2	7層	14	13	139		1		1					168
	8層			5									5
	9層	5	20	39			1						65
	遺構内		1	3									4
不明	No.1~2遺構内	234	138	936		12	1	3	2				1326
		24	6	70	1	4							105
接合資料		252	126	149		17		1					545
	No.37 3層										1	1	
M14	No.88 直上										1	1	
	L14 No.6 3層			1									1
合計		3359	3682	10887	5	427	6	247	33	1	9	4	18666

## 1. 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は3,359点出土しており、器種は碗・小碗・皿・鉢・鍋・壺・瓶・急須・酒器・香炉・火入・灯明皿・袋物が得られている。出土状況は調査区全域のI層(近現代層)で29%、II層(旧耕作土)で6.5%、遺構内出土遺物の内、南北礫溝とそれに関連するレキ充填部を併せると全体の55%に及び、出土状況の偏りが見られる。これは前回の範囲確認調査で指摘されたように、陶器が溝遺構の造成建材として再利用されたことを裏付けている。

沖縄施釉陶器の分類については、下記のとおり施釉技法によりI～III類に、釉薬の種類により(I)～(H)に大分類した。細分類については器種ごとに口縁形態や腰の張り具合などにより分類した。

### 施釉技法

#### I類 釉薬を単掛けするもの

器面に一種類の釉薬をそのまま施釉するもので、施釉範囲は器面の内外面或は外面のみに及ぶ。

#### II類 内外器面の釉薬を掛け分けるもの

外器面に(口)鉄釉や(H)黒釉などを施釉した後、内器面に灰釉を掛けるもので、①内器面に白化粧を施さないものと、②内器面に白化粧を施した後で灰釉を掛けるものがある。

#### III類 内外器面に白化粧し、透明釉を施すもの。

器面の内外に白化粧土を施し、さらにその上から透明釉(灰釉)を施すもの。

### 釉薬の種類

基本的な釉薬には(I)灰釉、(口)鉄釉、(H)黒釉がある。

(I)灰釉は透明・半透明で、微かに灰色、褐色、オリーブ褐色などを呈する。(口)鉄釉と(H)黒釉は鉄を基本とした釉薬であり調合や焼成等によっては判別が微妙となる。よって、今回は発色により褐色から暗褐色を鉄釉、黒色のものを黒釉とした。また、不透明・光沢のない褐色のものを銷釉とした。

### 碗

碗は2,124点得られており、口縁形態でA直口するもの、B外反するもの、C玉縁のものに分類され、さらに胴部の腰が張らないもの(a)と腰が張るもの(b)がある。また、施釉技法では(1)フィガキーするもの、(2)銷釉による同心円を施すもの、(3)蛇の目釉剥ぎを行うものに細分した。

#### 碗 I類 (第19図1～16)

I類(I)は高台径が大きく、胴部は直線的に開く形状で、口径も大きい(第19図1～4)。第19図5・6のようにやや腰の張る形状もある。いわゆる湧田灰釉碗と呼称されてきた碗である。口縁はA直口するもの(第19図1～4)とB外反するもの(第19図5・6)がある。施釉技法は(1)フィガキー(浸し掛け)により灰釉が施釉される。焼成は良く、還元焼成のためか素地は灰色系のものが目立つ。見込みや高台疊付には砂目が認められる。鉄絵が描かれるものもある。

I類(口)はI類(I)の形状を踏襲した碗で、口縁部の外反や胴部(腰)が張りだす傾向が見られる(第19図9～16)。施釉工程は先ず、内面の見込に(2)銷釉による同心円を施し、次ぎに内外面の口縁から胴部に鉄釉を施す。高台と見込みには施釉しない。内面の施釉範囲は基本的に同心円外を意識している。

## 碗Ⅱ類（第20図17・18）

II類の器形もI類（口）と同じく、口縁部の外反や腰が張りだす傾向が見られる。施釉は器面の外面に鉄釉を施し、内面には①直に灰釉を施すものと、②白化粧を施し、透明釉を施すものがある。②の場合、白化粧の範囲は内面から外面口縁まで及び、口縁部の白化粧は鉄釉によって覆われている。施釉の工程は内面から外面口縁まで白化粧を施した後、外面に（口）鉄釉か（ハ）黒釉を施す。高台まで施釉しないものと（第20図17）、施釉するもの（第20図18）がある。見込みは蛇の目釉剥ぎを行う。見込と疊付にはアルミナが確認される。

## 碗Ⅲ類（第20図19～25・第21図）

III類の器形もI類（口）と同じく、口縁部の外反や腰が張りだす傾向が見られる。施釉工程は器面全面に白化粧した後、灰釉（透明釉）を施し、見込みを蛇の目釉剥ぎとする。見込みと高台疊付にはアルミニウムが確認される。文様の施工技法は竹筒の先端を幾つかに割り、それぞれの先端に丸いスタンプをつけて押印すと第21図28・29のような点花文となる。また、線彫りにより白化粧土を剥ぎ、輪郭線を描き、淡いコバルトや緑釉薬、鉄釉で彩色するものがある（第21図31・34）。さらに、菊花文や家紋などを筆で手書きするものがある（第21図30・32・33）。

### 小碗

小碗は231点得られており、I～III類まである（第22図）。I類は小破片のため割愛した。

小碗II類の細分類は碗のII類に準じており、口縁形態のA直口するもの、B外反するもの、C玉縁のものがある。さらに施釉技法により①白化粧なし（第22図36）と②白化粧あり（第22図35）に分類される。

小碗III類の細分類も碗のIII類に準じ、口縁形態のA直口するものとB外反するものとし、それに加え、器面の①面取り無し（第22図37～39・41）と②面取りあり（第22図42～43）により分類した。

### 鉢

鉢は127点得られており（第22・23図）、器形は胴部から口縁にかけて立ち上がるものと（第23図44・46・第24図51）と播鉢のように開く形状がある。細分類は口縁形態によりA逆L字形のもの、B外反するもの、C波形のもの、D玉縁口縁の4つに分類される。

鉢I類は器形が立ち上がるもの（第23図44）が得られており、施釉技法は灰釉をフィガキーにより施釉する。また、内器面には錫釉による鉄絵を施す。

鉢II類には器形が立ち上がるもの（第23図46）と開くもの（第23図48・第24図49・50）があり、後者はワンブーと呼称される鉢である。口縁形態はA逆L字、B外反の二種が得られている。施釉技法は基本的に碗II類に準じている。第23図46は内器面にイッテンによる文様を施している。

鉢III類は器形が立ち上がるもので、口縁形態はすべてB外反している（第24図51）。施釉技法は基本的に碗III類に準じている。

### 皿

皿は13点得られており、I類からIII類に大分類される（第25図）。A直口するものと、B外反するものがある。

皿I類は（口）鉄釉のみ得られている。施釉技法は基本的に碗I類（口）に準じている（第25図53）。

皿II類は（口）鉄釉・①白化粧無しと（第25図54）②白化粧有りが得られている（小片）。施釉技

法は基本的に碗Ⅱ類(口)に準じている。

皿Ⅲ類は口縁形態と施釉技法による細分類は基本的に碗Ⅲ類に準じている。有文資料には線彫りにより輪郭線を描くもの(第25図58)、線彫りに淡いコバルト鉄釉で彩色するもの(第25図55)、筆で手書きするものがある(第25図57)。赤絵で点文花を基本に施文するもの(第25図59)もある。

#### 灯明皿

灯明皿はI類(ハ)黒釉が2点得られている。黒釉を内面から外面口縁まで施す。見込みは蛇の目釉剥される(第26図60)。

#### 急須

急須は轆轤引きによるもので、171点得られている(第26図62~65)。器形は球体に近い。I類とIII類が得られている。

急須I類は(イ)灰釉、(ロ)鉄釉、(ハ)黒釉を施釉する資料が得られている。第26図63は外面のみに黒釉を施している。

急須III類は白化粧を施した後、透明釉を内外面に施釉するものと、外面のみに施釉するものがある。いずれも外面底部は施釉しない。注ぎ口や耳は硬質な白土を使用しており、器体の黄白色系の胎土とは異なる。また、注ぎ口や耳は白土であるため、白化粧は必要とされず、透明釉のみが施される。有文のものは、線彫りの幾何学模様に薄いコバルトや鉄釉で彩色され、注ぎ口や耳の縦目は緑釉で彩色されている(第26図62・64)。

#### 瓶

瓶には多様な形状のものがあり、41点得られている(第26図66~69)。I類からIII類に分類される。瓶I類の第26図66は(ハ)鉄釉の口頸部で、外面のみの施釉である。第26図67は黒釉の胴部で、高台を除く外面に施釉している。胴部は球体に近い形状で、口頸部は欠損しているが、口縁部まで轆轤引きしたと考えられる。

瓶II類は(ロ)鉄釉の胴部で、胴上部は白化粧、胴下部は鉄釉を施している。内面は施釉されない(第26図68)。

瓶III類は円錐形の器体に袴状の高台を接合する瓶子で、外面のみの施釉である。器面には線彫りの格子文などを施し、薄い鉄釉と緑釉で彩色している(第26図69)。

#### 香炉

香炉はI類とIII類があり3点得られている。成形はすべて轆轤引きで、口縁は逆L字を呈し、頸部は直立、胴部で強く張る。底部は平坦で脚を3つ貼り付けている。釉薬は外面のみに施釉している。

I類は(ロ)鉄釉と(ハ)黒釉が得られている(第27図70・71)。施釉は口縁内側から外側胴部まで施し、底部と脚は無釉である。第27図71の脚は四つ指の龍が玉を握るデザインである。

III類は全面に白化粧し外面のみに透明釉を施す。口唇部に薄い緑釉を施している(第27図72)。

#### 花生

花生は筒状を呈するもので1点あり、III類のみが得られている。第27図73がそれで、全面に白化粧をし透明釉を施す。文様は1.5cm間隔で縦位の線彫りを施し、その上から薄い鉄釉とコバルトで彩色している。底部は緩やかに凹んでいる。

#### 火入

火入は36点得られている。火種入れで、煙草盆に入れ込んで使用する。火取とも言う。I類からIII

類に大分類され、口縁部形態により a 直口のものと b 内傾するものがある。

I 類は（口）鉄釉で外面のみの施釉である。第 27 図 74 は筒状を呈し a 直口すると考えられる。

II 類は（口）鉄釉と灰釉を掛け分けする。第 27 図 75 は外面のみの施釉である。b 口縁は内傾する。

III 類は筒状を呈し、口縁部が a 直口するものと b 内傾するものがある。第 27 図 76～78 は直口するもので、有文資料は線彫りで施文し、薄いコバルトで彩色している。

#### 酒器

酒器には I 類と III 類がある。27 点得られている。

I 類は抱瓶（ダチビン）と呼称される箱形、水筒状のもので、板状の粘土を組み合わせて成形している。外面には縁釉が施釉される（第 27 図 79）。

III 類はカラカラと呼称される注口形のもので（第 27 図 80a・80 b）、口頭部まで轆轤引き成形される。注ぎ口は急須同様、硬質な白土を使用している。やはり、白土のために白化粧は必要とされず、透明釉のみが施される。文様は放射線状の線彫りに濃いコバルトや鉄釉で彩色され、注ぎ口や耳の縦ぎ目には縁釉で彩色している。

#### 鍋

口縁部をくの字に屈曲させた円底の土鍋。66 点得られている。沖縄製無釉陶器のアカムヌーに分類されるサークー鍋と同様な器形を呈しているが、焼成は良く施釉されている。施釉範囲は口縁部から胴部で、外面底部は施釉されない。底部には円錐形の脚が付いている。胎土は耐火土を使用しているものと考えられる。施釉技法の他に胴部の張り具合で、a 張るものと b 張らないものに細分される。

I 類は内外面に（口）鉄釉を施すもので、外面は光沢があるが、内面は錆釉である。a 胴の張るものと（第 28 図 81）b 張らないものが得られている（第 28 図 82）。

II 類は内面胴部から外面口縁に白化粧し、透明釉を施して後に外面に（口）鉄釉を施す。口縁部は釉剥ぎされている（第 28 図 85）。第 28 図 83・84 は底部資料である。

#### 水注（按瓶）

水注は大型の急須で、アンビンと呼称されている。59 点得られている。成形は轆轤引きによるもので、器形は球体に近い。I 類には（ハ）黒釉のものがあり、器面の内外に施釉する。急須の III 類が注口や耳の部分と器体との胎土が異なるのに対し、水注は器体と同じ胎土を使用している（第 28 図・86・87）。第 26 図 61 はアンビンの蓋で、内面は施釉されていない。

#### 壺

壺は 91 点得られている。広口の壺で、アンダガーミと呼称される豚脂を保存する耳付きの壺である。I 類のみ得られており、（口）鉄釉、（ハ）黒釉を施す。胴部の張り具合で、a 張るものと b 張らないものに細分される。a の第 28 図 88・90 は直口する口頭部を有し、胴部に向けて球体に近い張り出しがある。b の第 28 図 89 は口縁部から明確な頸部を造らずに胴部に向けて徐々に径を増す器形である。



第4表 沖繩產施釉陶器集計表2

No.	品目名 (英)	品目名 (中)	数量		品目名 (英)	品目名 (中)	数量		品目名 (英)	品目名 (中)	数量	
			總	單			總	單			總	單
1	1	1	1	1								
2	2	2	2	2								
3	3	3	3	3								
4	4	4	4	4								
5	5	5	5	5								
6	6	6	6	6								
7	7	7	7	7								
8	8	8	8	8								
9	9	9	9	9								
10	10	10	10	10								
11	11	11	11	11								
12	12	12	12	12								
13	13	13	13	13								
14	14	14	14	14								
15	15	15	15	15								
16	16	16	16	16								
17	17	17	17	17								
18	18	18	18	18								
19	19	19	19	19								
20	20	20	20	20								
21	21	21	21	21								
22	22	22	22	22								
23	23	23	23	23								
24	24	24	24	24								
25	25	25	25	25								
26	26	26	26	26								
27	27	27	27	27								
28	28	28	28	28								
29	29	29	29	29								
30	30	30	30	30								
31	31	31	31	31								
32	32	32	32	32								
33	33	33	33	33								
34	34	34	34	34								
35	35	35	35	35								
36	36	36	36	36								
37	37	37	37	37								
38	38	38	38	38								
39	39	39	39	39								
40	40	40	40	40								
41	41	41	41	41								
42	42	42	42	42								
43	43	43	43	43								
44	44	44	44	44								
45	45	45	45	45								
46	46	46	46	46								
47	47	47	47	47								
48	48	48	48	48								
49	49	49	49	49								
50	50	50	50	50								
51	51	51	51	51								
52	52	52	52	52								
53	53	53	53	53								
54	54	54	54	54								
55	55	55	55	55								
56	56	56	56	56								
57	57	57	57	57								
58	58	58	58	58								
59	59	59	59	59								
60	60	60	60	60								
61	61	61	61	61								
62	62	62	62	62								
63	63	63	63	63								
64	64	64	64	64								
65	65	65	65	65								
66	66	66	66	66								
67	67	67	67	67								
68	68	68	68	68								
69	69	69	69	69								
70	70	70	70	70								
71	71	71	71	71								
72	72	72	72	72								
73	73	73	73	73								
74	74	74	74	74								
75	75	75	75	75								
76	76	76	76	76								
77	77	77	77	77								
78	78	78	78	78								
79	79	79	79	79								
80	80	80	80	80								
81	81	81	81	81								
82	82	82	82	82								
83	83	83	83	83								
84	84	84	84	84								
85	85	85	85	85								
86	86	86	86	86								
87	87	87	87	87								
88	88	88	88	88								
89	89	89	89	89								
90	90	90	90	90								
91	91	91	91	91								
92	92	92	92	92								
93	93	93	93	93								
94	94	94	94	94								
95	95	95	95	95								
96	96	96	96	96								
97	97	97	97	97								
98	98	98	98	98								
99	99	99	99	99								
100	100	100	100	100								

第4表 沖鰐塗施釉陶器集計表3

器種	出土地點	地點名	層位	形狀	大きさ	施釉	塗装	目録	備考	件数	
										総	新
新石器時代	1	1									
縄文時代	1	1									
古墳時代	1	1									
秦漢時代	1	1									
魏晉南北朝時代	1	1									
隋唐五代時代	1	1									
宋元時代	1	1									
明時代	1	1									
清時代	1	1									
近世	1	1									
江戸時代	1	1									
明治時代	1	1									
大正時代	1	1									
昭和時代	1	1									
平成時代	1	1									
計										100	100



第4表 沖縄奄美沖陶器集計表5

品目 （分類別）	規格 （寸法）	沖縄												奄美												合計 数		
		11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35		
1	1.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	2.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4	3.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5	3.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6	4.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7	4.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8	5.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9	5.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
10	6.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
11	6.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
12	7.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
13	7.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
14	8.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
15	8.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
16	9.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
17	9.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
18	10.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
19	10.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
20	11.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
21	11.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
22	12.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
23	12.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
24	13.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
25	13.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
26	14.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
27	14.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
28	15.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
29	15.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30	16.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
31	16.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
32	17.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
33	17.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
34	18.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
35	18.5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
36	19.0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

第5表 沖縄県施釉陶器観察一覧1

種類番号 図版番号	器種・分類	部位	口縁 構造	器形・成形・文様等の特徴	素 地・焼成	釉色・施釉状況・貢入等	出土地
1	(イ) Aa(1)	口～底	12.6 6.5 6.5	灰陶輪。口縁は張らず直線的。高台割引直角切削。高台と見込に砂目あり。製削部に重ね焼の付着あり。	白色の細粒子。焼成良い。素地に亜鉛や灰入。	手アフ灰色の透明釉。内外面の口縁から腹部に施釉。高台に指触。鏡・貢入なし。	レキ光焼窯N1 1層 レキ光焼窯N1 2層 レキ光焼窯N1 3層
2	(イ) Aa(1)	口～底	13.6	灰陶輪。口縁は張らず直線的。高台割引直角切削。高台に砂目あり。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の透明釉。内外面の口縁から腹部に施釉。鏡・貢入なし。	レキ光焼窯N1 1層 レキ光焼窯N1 2層
3	(イ) Aa(1)	口～底	13.4 6.5 6.5	灰陶輪。口縁は張らず直線的。高台割引直角切削。高台に砂目あり。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の透明釉。内外面の口縁から腹部に施釉。鏡・貢入なし。	南北ミゾレト遺構内 N1 1層 1a～2層
4	(イ) Aa(1)	口～底	13.2 6.5 6.5	灰陶輪。口縁は張らず直線的。高台割引直角切削。高台に砂目あり。	白色の細粒子。焼成やや良い。	手アフ灰色の灰釉。透明。内外面の口縁から側部に施釉。高台に指触。鏡・貢入なし。	レキ光焼窯N1 1層 レキ光焼窯N1 1層 レキ光焼窯N1 2層 レキ光焼窯N1 3層内 1a～3層
5	(イ) Bb(1)	口～底	13.2 6.5 6.5	灰陶輪。口縁は外反。腹が張り込みを帯びる。高台割引直角切削。高台に砂目あり。重ね焼により側部の口縁が付着。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。透明。内外面の口縁から側部に施釉。高台に指触。鏡・貢入なし。	レキ光焼窯N1 1層 レキ光焼窯N1 2層 南北ミゾレト遺構内 2道構内 1a～3層
6	(イ) Bb(1)	口～底	12.3 6.5 6.5	灰陶輪。口縁は外反。腹が張り込みを帯びる。高台割引直角切削。高台に砂目あり。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。透明。内外面の口縁から側部に施釉。高台に指触。鏡・貢入なし。	レキ光焼窯N1 2層
7	(イ) a(2)	胸～底	—	灰陶輪。腹は張らず直線的。高台割引直角切削。高台に砂目あり。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。透明。内外面の口縁から側部に施釉。高台に指触。鏡・貢入なし。	南北ミゾレト遺構内 内見込見に同じ。
8	(イ) b(2)	底部	—	灰陶輪。腹は張らず直線的。高台割引直角切削。見込は平坦である。高台に砂目あり。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。半透明。側部に指触。鏡・貢入なし。見込に灰陶輪の灰釉で同心円。	レキ光焼窯N1 2～3層内 1a～3層
9	(ロ) Bb(2)	口～底	13.2 5.5 5.5	直口する形。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台に2条の沈線。見込に丸みを帯びる。高台と見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。光沢ある。①内外面の口縁から側部に施釉。②見込にさび地で同心円。施釉輪郭なし。高台に指触。	レキ光焼窯N1 1層 レキ光焼窯N1 3層 1a～3層
10	(ロ) Bb(2)	口～底	13.4 6.5 6.5	口縁部に4mm程の縦の縫合線を施し外反させる。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。高台に砂目あり。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。光沢ある。①内外面の口縁から側部に施釉。②見込にさび地で同心円。その上から施釉の痕点があり。施釉輪郭なし。高台に指触。	南北ミゾレト遺構内 レキ光焼窯N1 2層
11	(ロ) Bb(2)	口～底	13.6 5.5 6.2	口縁部に4mm程の縦の縫合線を施し外反させる。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。高台に見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。光沢ある。①内外面の口縁から側部に施釉。②見込にさび地で同心円。施釉輪郭なし。高台に指触。	レキ光焼窯N1 1層
12	(ロ) Bb(2)	口～底	13.0 6.5 6.5	口縁は外反する。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。高台と見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。光沢ある。①内外面の口縁から側部に施釉。②見込にさび地で同心円。施釉輪郭なし。高台に指触。	レキ光焼窯N1 2～3層内 1a～3層
13	(ロ) Bb(2)	口～底	14.6 6.0 6.0	口縁は外反する。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。高台と見込により別個の口縁が付着。高台と見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。光沢ある。①内外面の口縁から側部に施釉。②見込にさび地で同心円。施釉輪郭なし。高台に指触。	レキ光焼窯N1 1層 レキ光焼窯N1 2層
14	(ロ) Bb(2)	口～底	12.4 6.5 6.5	口縁は外反する。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。光沢ある。内外面の口縁から側部に施釉。②見込にさび地で同心円。施釉輪郭なし。高台に指触。	レキ光焼窯N1 1層 レキ光焼窯N1 2層
15	(ロ) Ca	口縁部	—	口縁は外反する。玉ねぎに埋せる。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。光沢ある。内外面の口縁から側部に施釉。	南北ミゾレト遺構内
16	(ロ) C(2)	胸～底	—	腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。高台と見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。光沢ある。内外面の口縁から側部に施釉。②見込にさび地で同心円。施釉輪郭なし。	南北ミゾレト遺構内 1a～3層
17	(ロ) B(I)	口～底	14.0 6.5 6.5	口縁は外反する。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。見込は平ら。高台と見込にアルミナ焼成。	深褐色細粒子。焼成やや甘い。	手アフ灰色の灰釉。光沢ある。内外面の口縁から側部に施釉。見込にさび地で同心円。施釉輪郭なし。	レキ光焼窯N1 1層 レキ光焼窯N1 2層
18	(ロ) B(I)	口～底	13.4 6.5 5.5	口縁は外反する。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。見込は平ら。高台と見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成良い。	手アフ灰色の灰釉。光沢ある。内外面の口縁から側部に施釉。見込にさび地で同心円。施釉輪郭なし。	レキ光焼窯N1 1層
19	Ⅲ	口～底	14.0 6.5 6.2	口縁は外反する。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。見込は平ら。高台と見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成良い。	全面上白化粧をして。透明白釉の後、見込と側部の釉が剥げをう。高台内に化粧が取縮する。鏡・貢入なし。	レキ光焼窯N1 1層 1a～3層
20	Ⅲ	口～底	13.6 6.5 6.7	口縁は外反する。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。見込は平ら。高台と見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成良い。	全面上白化粧をして。透明白釉の後、見込と側部の釉が剥げをう。高台内に化粧が取縮する。鏡・貢入なし。	レキ光焼窯N1 1層 1a～3層
21	Ⅲ	口～底	14.2 6.5 6.2	口縁は外反する。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。見込は平ら。高台と見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成やや甘い。	全面上白化粧をして。透明白釉の後、見込と側部の釉が剥げをう。高台内に化粧が取縮する。鏡・貢入なし。	レキ光焼窯N1 1層 1a～3層
22	Ⅲ	口～底	14.0 6.5 6.2	口縁は外反する。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。見込は平ら。高台と見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成やや甘い。	全面上白化粧をして。透明白釉の後、見込と側部の釉が剥げをう。高台内に化粧が取縮する。鏡・貢入なし。	レキ光焼窯N1 2層 1a～3層
23	Ⅲ	口～底	13.4 6.5 5.5	口縁は外反する。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。見込は平ら。高台と見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成やや甘い。	全面上白化粧をして。透明白釉の後、見込と側部の釉が剥げをう。高台内に化粧が取縮する。鏡・貢入なし。	南北ミゾレト遺構内 1a～3層
24	Ⅲ	口～底	14.5 7.0 7.0	口縁は外反する。腹が張り丸みを帯び立ち上がる。高台割引直角切削。見込は平ら。高台と見込にアルミナ焼成。	白色の細粒子。焼成やや甘い。	全面上白化粧をして。透明白釉の後、見込と側部の釉が剥げをう。高台内に化粧が取縮する。鏡・貢入なし。	レキ光焼窯N1 1層 1a～3層

第5表 沖縄産施釉陶器観察一覽2

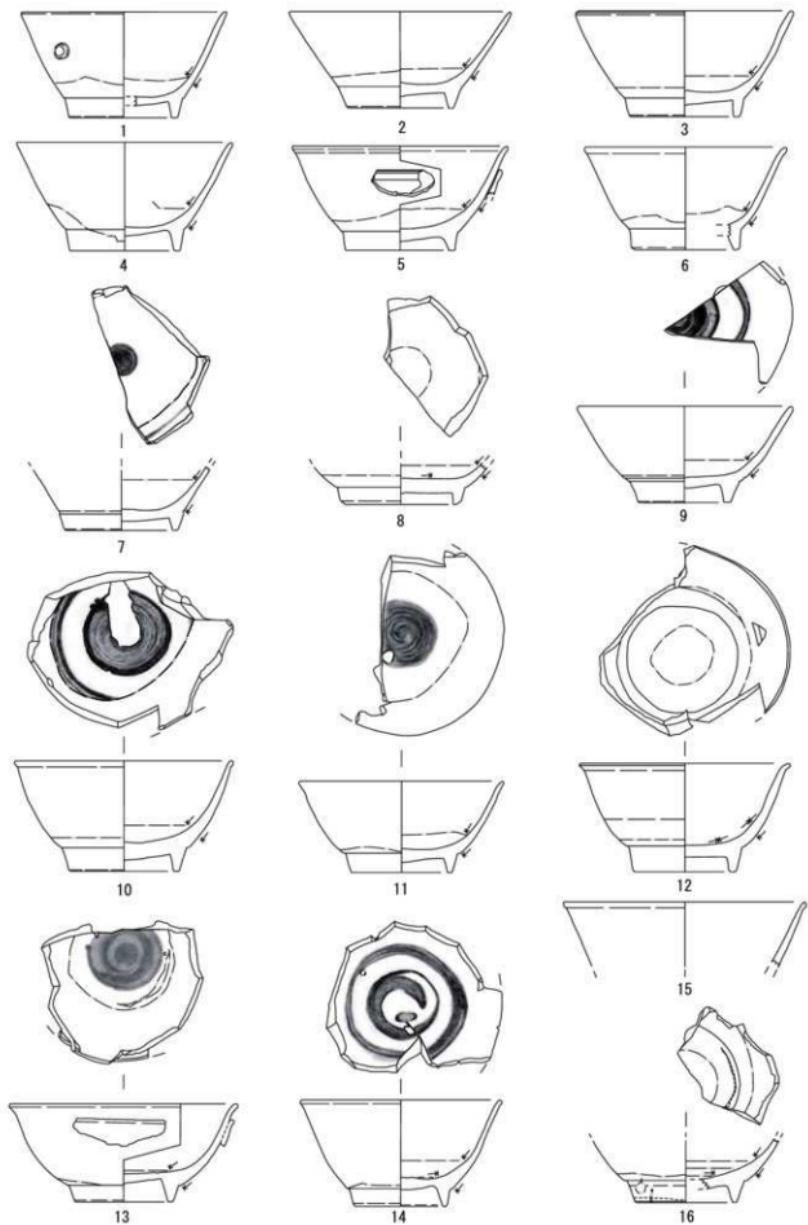
第2回 回数9	25		B	口～底	12.2 3.8 3.8	口唇は強く外反する。唇が張り、丸みを帯びる。舌が短く、高い位置で前不透明。高台と見込みにアルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成はやや良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎをを行う。高台に削除。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 レキガム糊#1 1層 レキガム糊#1 2層 レキガム糊#1~2遮蔽内
	26		B	口～底	14.0 3.8 3.8	口唇に2重の縁取り線。唇が張り丸みを帯びる。高台の削除が不透明。高台と見込みにアルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成はやや良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台に削除。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 レキガム糊#1 1層 レキガム糊#1 2層 レキガム糊#1~2遮蔽内
	27		B	口～底	12.4 3.8 3.8	口唇は強く外反する。口唇線上には歯根部・奥歯部に高い丸みを帯びる。高台と見込みにアルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成はやや良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台に削除。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 レキガム糊#1 1層 レキガム糊#1 2層 レキガム糊#1~2遮蔽内
	28		B	口～底	13.6 - -	口唇は強く外反する。点花文を施す。	白黄色の細粒子。焼成はやや良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台に削除。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 レキガム糊#1 1層 レキガム糊#1 2層 レキガム糊#1~2遮蔽内
	29		B	口～底	13.4 - -	口唇は外反する。点花文を施す。	白黄色の細粒子。焼成はやや良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台に削除。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 レキガム糊#1 1層 レキガム糊#1 2層 レキガム糊#1~2遮蔽内
第2回 回数9	30	III	B	口～底	13.1 3.8 3.8	口唇の縫合が時間で外反する。唇が張り丸みを帯びる。高台削除が筋不透明。コバルトで歯根部の輪郭を強調する。高台と見込みにアルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成はやや良い。	白化剤を施した後にコバルトと鉄酸化物を施す。表面にはコバルトの焼けぎが。細かい質。	レキガム糊#1 2層 la-b解
	31		B	胸～底	- -	唇が張り丸みを帯びる。高台と見込み。高台削除が筋不透明。コバルトで歯根部の輪郭を強調する。高台と見込みにアルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成はやや良い。	白化剤を施した後にコバルトと鉄酸化物を施す。表面にはコバルトの焼けぎが。細かい質。	レキガム糊#1~2遮蔽内
	32		B	口～底	14.2 3.8 3.8	口唇は外側にある。唇が張り丸みを帯びる。高台と見込み。高台削除が筋不透明。コバルトで歯根部の輪郭を強調する。高台と見込みにアルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成はやや良い。	白化剤を施した後にコバルトでバウ文を施す。透明剤を施す。内部には重ねるように色彩の重なりがある。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 レキガム糊#1~2遮蔽内
	33		B	口～底	14.7 3.8 3.8	口唇は外側にある。唇が張り丸みを帯びる。高台と見込み。高台削除が筋不透明。コバルトで歯根部の輪郭を強調する。高台と見込みにアルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成はやや良い。	白化剤を施した後にコバルトでバウ文を施す。透明剤を施す。内部には重ねによる色彩の重なりがある。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 レキガム糊#1~2遮蔽内
	34		B	口～底	13.9 12.8 3.8	口唇は外側にある。唇が張り丸みを帯びる。高台削除が筋不透明。輪郭は円形。円形に内の二字を描き。高台と見込みにアルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成はやや良い。	白化剤を施した後に輪郭し、隠しパタルと縁取りを施す。透明剤を施す。細かい質。	レキガム糊#1 1層 la-b解
	35	II	(ロ) B(1)	口～底	8.4 8.3 3.6	口唇は外側にある。唇が張り丸みを帯びる。高台と見込み。高台削除が筋不透明。見込みは平坦。高台と見込みにアルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	①表面色で凹状の深い凹窓を打ち高台と焼付の焼けぎをする。②内部は焼付を打ち、他の日焼けぎを行なう。細かい質。他の焼けぎ→③	南北ミゾレキ遮蔽内 la-b解
	36		(ロ) B(2)	口～底	8.4 8.3 3.6	口唇は外反する。唇が張り丸みを帯びる。高台と見込み上がる。高台削除が筋不透明。見込みは平坦。高台と見込みにアルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	①表面色で凹状の深い凹窓を打ち高台と焼付の焼けぎをする。②内部は焼付を打ち、他の日焼けぎを行なう。細かい質。他の焼けぎ→③	南北ミゾレキ遮蔽内 la-b解
	37		Aa	口～底	8.4 8.3 3.6	口唇は外側にある。唇が張り丸みを帯びる。高台削除が筋不透明。高台と見込み。アルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成はやや良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台内に白化剤が吸収される。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 la-b解
	38		Aa	口～底	8.4 8.3 3.6	口唇は外側にある。唇が張り丸みを帯びる。高台削除が筋不透明。高台と見込み。アルミナチャップあり。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台内に白化剤が吸収される。細かい質。	レキガム糊#1 1層 レキガム糊#1~2遮蔽内
	39	小顎	Ia	口～底	8.4 8.3 3.6	外反口縫。唇が張り丸みを帯びる。高台と見込みにアルミナチャップ。	灰白色の粒子。焼成は非常に良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台内に白化剤が吸収される。質入なし。	レキガム糊#1 2層 la-b解
	40		Ia	口～底	8.0 3.7 3.6	外反口縫。唇が張り丸みを帯びる。高台は低い。	灰白色の粒子。焼成は非常に良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台内に白化剤が吸収される。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 la-b解
	41		Ia	口～底	8.4 8.3 3.6	外反口縫。唇が張り丸みを帯びる。高台削除が筋不透明。見込みは平ら。高台と見込みにアルミナチャップ。側頭部は重ね焼付の付着があり。	灰白色の粒子。焼成は非常に良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台内に白化剤が吸収される。細かい質。	レキガム糊#1 1層 レキガム糊#1~2遮蔽内 レキガム糊#2 3層
	42		Ib	口～底	8.0 3.9 3.6	外反口縫。唇が張り丸みを帯びる。高台は低い。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台内に白化剤が吸収される。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 la-b解
	43		Ib	口～底	8.4 3.2 3.6	外反口縫。唇が張り丸みを帯びる。高台は低い。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台内に白化剤が吸収される。細かい質。	レキガム糊#1 1層 レキガム糊#1~2遮蔽内
第2回 回数10	44	I	(イ) (1)	口～頬	- -	上唇口縫の横跡。ドリーパーの様な剥離。剥離部下と剥離部は不透明しない。内部は白化剤がある。	灰白色の粒子。焼成は非常に良い。	全面に白化剤と透明剤を施し、見込みと焼付の焼けぎを行う。高台内に白化剤が吸収される。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 la-b解
	45		(オ) (2)	底部	- 10.8	大歯（ワンブー）の道端。見込みにさびに沿うるによる同心円を描す。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	明確な火炎感。死滅感。死滅感あり。①表面にイシケテと呼ばれる火炎感。②歯歯肉外側に火炎感がある。歯歯肉外側に火炎感がある。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 レキガム糊#1 1層 la-b解
	46		(ロ) B(1)	口～底	24.2 12.5 3.6	歯歯大輪（ワントー）。口縫部を外反させ、弓形に張り付ける。高台まで削除。見込みは白化剤。高台と見込みにアルミナチャップ。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	明確な火炎感。死滅感。死滅感あり。①表面にイシケテと呼ばれる火炎感。②歯歯肉外側に火炎感がある。歯歯肉外側に火炎感がある。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 レキガム糊#1 1層 la-b解
	47		(ロ) B(2)	口縫	- -	歯歯大輪II。口縫部の一部を引き出させて注ぎ口を形成。内部は白化剤。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	明確な火炎感。死滅感。死滅感あり。①表面にイシケテと呼ばれる火炎感。②歯歯肉外側に火炎感がある。歯歯肉外側に火炎感がある。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 la-b解
	48		(ロ) B(2)	口～底	30.0 18.0	歯歯大輪（ワントー）。口縫部を逆さに形成。高台と見込みにアルミナチャップ。内部は白化剤。見込みは白の日焼け。高台と見込みにアルミナチャップ。	灰白色の粒子。焼成は良い。	明確な火炎感。死滅感。死滅感あり。①表面にイシケテと呼ばれる火炎感。②歯歯肉外側に火炎感がある。歯歯肉外側に火炎感がある。細かい質。	レキガム糊#1 2層 レキガム糊#1~2遮蔽内
第2回 回数11	49		(ロ) B(2)	口～底	24.0 11.4 3.6	歯歯大輪（ワントー）。口縫部を逆さに形成。高台と見込みにアルミナチャップ。内部は白化剤。見込みは白の日焼け。高台と見込みにアルミナチャップ。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	明確な火炎感。死滅感。死滅感あり。①表面にイシケテと呼ばれる火炎感。②歯歯肉外側に火炎感がある。歯歯肉外側に火炎感がある。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 レキガム糊#1 1層 3.3 la-b解
第2回 回数12	50	II	(ロ) B(2)	口～底	27.8 13.1 3.6	歯歯大輪（ワントー）。口縫部を逆さに形成。高台と見込みにアルミナチャップ。内部は白化剤。見込みは白の日焼け。高台と見込みにアルミナチャップ。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	明確な火炎感。死滅感。死滅感あり。①表面にイシケテと呼ばれる火炎感。②歯歯肉外側に火炎感がある。歯歯肉外側に火炎感がある。細かい質。	南北ミゾレキ遮蔽内 レキガム糊#1 1層 レキガム糊#1~2遮蔽内 la-b解

第5表 沖縄県施釉陶器観察一覧3

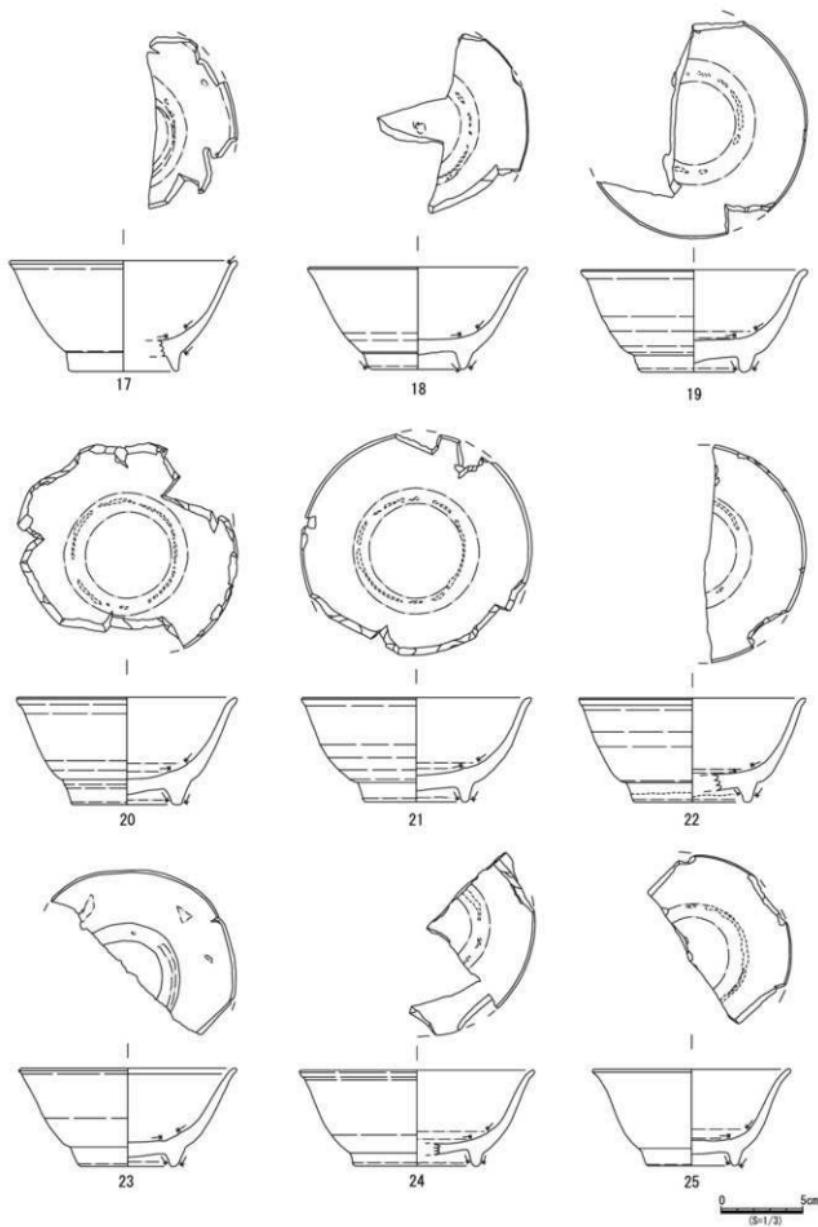
第24回 国版13	51	跡	Ⅲ	剥落	口～底 10.4 7.6	花弁形の跡。コテで口縁から約9mm範囲で部分的に引き出され、花弁形が形成。高台面明瞭。内外部は白化粧。高台と見込みにアルミナ。	淡黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込みと剥付の隙間を走る。高台面の内面化粧が収縮する。細かい貫入。見込みは蛇の目模様。高台に指紋。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 2層 レキ光景園No2 5層	
						- 不明 底部 - 7.6	施釉は確認されない。鉄軸大輪の底部と考えられる。見込みには鉄軸の点花文を施す。	無施釉の見込みに鉄軸で点花文を施す。	南北ミゾレキ遺構内	
53	52	-	-	-	-	鉄軸又は浅鉢。高台と見込みで鉄軸をする。見込みにはさび色による同心円を描く。高台と見込みにはアルミナ。高台削りは不明。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	①暗褐色の鉄軸。外表面は厚く、内面は薄い。②見込みにさび色による同心円を描く。施釉焼成。③。窓かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層	
						鉄軸。口縁を強く反対する。彫刻は丸みを帯びる。外表面は丸みから高台まで伸びる。口縁の施釉は施されていないが、口縁には鉄軸を残す。高台はアルミナ。石はゼラフィア。高台削りは不明。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	①正面は緑褐色の鉄軸。②内面は見込みでさび色の鉄軸。施釉焼成。③。窓かい貫入。	レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層	
55	54	Ⅲ	(ロ)中(2)	剥落	口～底 10.8	白化粧。口縁を強く外反する。彫刻は丸みを帯びる。外表面は丸みから高台まで伸びる。口縁の施釉は施されていないが、口縁には鉄軸を残す。高台はアルミナ。石はゼラフィア。高台削りは不明。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込みと剥付を施す。窓かい貫入。蛇の目模様。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層	
						白化粧。口縁を強く外反する。彫刻は丸みを帯びる。外表面は丸みから高台まで伸びる。口縁の施釉は施されていないが、口縁には鉄軸を残す。高台はアルミナ。石はゼラフィア。高台削りは不明。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込みと剥付を施す。窓かい貫入。蛇の目模様。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層	
56	57	Ⅲ	A中	剥落	口～底 8.6 8.8	白化粧。口縁は直する。口縁先端に縦取りが施され残る。白化粧が施されている。見込みは高台とアルミナ。高台削りは不明。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込みと剥付を施す。窓かい貫入。蛇の目模様。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層	
						染付け跡。口縁と立ち上がりにコイルで同心円を描き、その間に文様を施す。見込みにも同様に描く。見込みと高台にルミナ。市利手の威頭焼を意識している。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込みと剥付を施す。窓かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層	
58	59	Ⅲ	文B	剥落	口～底 7.0	白化粧。口縁は直する。口縁先端に縦取りが施され残る。白化粧が施されている。見込みには高台とアルミナ。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込みと剥付を施す。窓かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層	
						白化粧。口縁を強く外反する。彫刻は丸みを帯びる。外表面は丸みから高台まで伸びる。口縁の施釉は施されていないが、口縁には鉄軸を残す。高台はアルミナ。石はゼラフィア。高台削りは不明。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込みと剥付を施す。窓かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層	
60	61	打磨	I	(ハ)③	口～底 3.8	白化粧。見込みと花文(ア)～(ヒ)と鉄軸が施されている。見込みには高台とアルミナ。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込みと剥付を施す。鉄軸は施されている。窓かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層	
						花文(アンビ)の基。縞模様引き。外面と口縁は削り出で形状。内面は斜めに外側から削られていて、内面の基は荒く大きい。幾何学的模様が縞模様され、薄いコバルトと鉄軸で彩色されている。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、見込みと剥付を施す。窓かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層	
62	63	Ⅲ	文D	蓋	口～底 11.4	弧形の基。縞模様引き後、所々削出して方形、空気穴は直角後に外側から削られていて、内面の基は荒く大きい。幾何学的模様が縞模様され、薄いコバルトと鉄軸で彩色されている。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧と透明釉を施し、窓かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層	
						黒釉の急須。縞模様引き。全体に近い滑面。注口は耳と本體と同一。硬質の急須。	良色の細粒子。焼成は良い。	黒釉を外面に施す。底辺は施釉しない。	レキ光景園No1 1層	
64	65	急須	Ⅲ	文中	口～底 7.4 6.1	白化粧の脚付と急須。縞模様引き。球体に近い滑面。剥離内部の上面は縞模様が目立つ。高台面削り有り。高台に指紋。	白黄色の細粒子。白色の細粒子。(注口・耳)。焼成は良い。	本体内外面に白化粧し、注ぎ孔を穿つ。その後、注口と耳を接着する。底辺を除き透明釉を施す。窓かい貫入。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層 レキ光景園No1～2道構内	
						白化粧の脚付と急須。縞模様引き。口縁は外反している。剥離の一部が残る。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	白黄色の細粒子。白色の細粒子。(注口・耳)。焼成は良い。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 1層 レキ光景園No1 2層 レキ光景園No1～2道構内	
66	67	瓶	I	(ロ)	口剥離	口～底 2.4 -	小型の黒釉瓶。口縁は欠損。球体に近い滑面。剥離内部の上面は縞模様が目立つ。高台面削り有り。高台に指紋。	灰白色の細粒子。	瓶は外側から口縫部の内面に及ぶ。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光景園No1 2層 南ミゾレキ 3～2層
						鉄軸。白化粧剥離分の瓶子。高台に施された算盤玉のような部分に輪郭が付く。全くが縞模様引きと考えられる。	白黄色の細粒子。	瓶は外側の高台際までと、高台内に施す。窓かい貫入。	南北ミゾレキ 3～2層 レキ光景園No1 2層	
68	69	Ⅲ	(ロ) ②	剥落	口～底 7.0	瓶子。円錐形の容器に特徴的な高台を付く。文様は放射状剥離状の基に横に文様を縞模様分ける。瓶底は平らで幅広く張る。高台の中央には凸凹、瓶底には小さな縞模様がある。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	瓶の部に白化粧後に下側に鉄軸を施す。窓かい貫入。	南北ミゾレキ 1層 レキ光景園No1 2層 レキ光景園No1～2道構内 1a～b層	
						鉄軸の香り。縞模様引き。口縁は泥字で、瓶底は平らで幅広く張る。高台は平ら。瓶底の中央には凸凹、瓶底には縞模様がある。	白黄色の細粒子。焼成は非常に良い。	瓶の部に白化粧後に下側に鉄軸を施す。窓かい貫入。	南北ミゾレキ 1層 レキ光景園No1 2層 レキ光景園No1～2道構内 1a～b層	
70	71	香炉	I	(ロ)	口～底 10.6 9.1	鉄軸の香り。縞模様引き。口縁は泥字で、瓶底は平らで幅広く張る。高台は平ら。瓶底の中央には凸凹、瓶底には縞模様がある。	白黄色の細粒子。焼成は非常に良い。	#7.4褐色の鉄軸を口縁内側から外側削離まで押す。触流れ。瓶は無施釉。窓かい貫入。	南北ミゾレキ 1層 南北ミゾレキ 3層 溝3 3層	
						(ハ)	白黄色の細粒子。焼成非常に良い。	黒釉を口縁内側から外側削離まで施す。瓶は無施釉。窓かい貫入。	南北ミゾレキ 3層 溝3 3層	

第5表 沖縄県施釉陶器観察一覧4

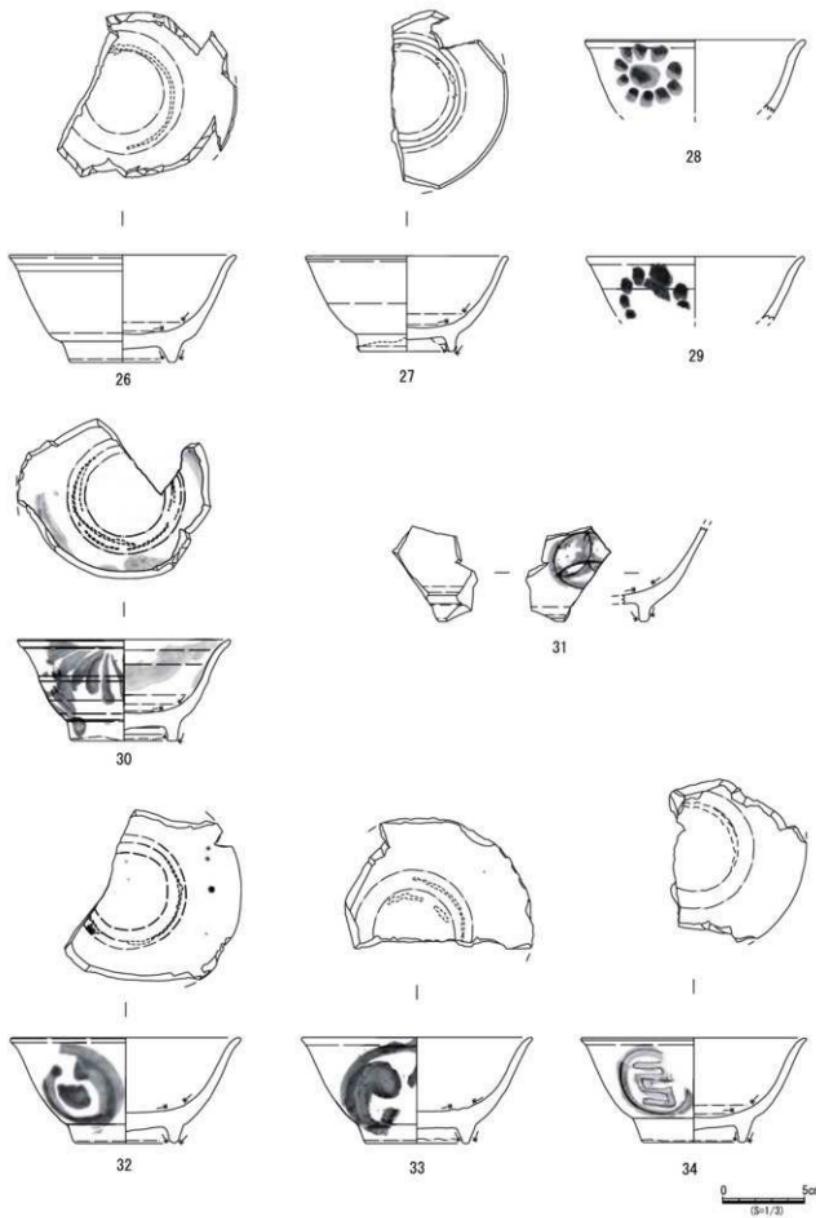
第27回 図版16	72	香炉	日	-	口～底 H.6 D.6.5	白化粧の香炉。輪縁引き。口縁は逆字で、 口唇には薄い透明釉を施す。腹部は直立し、 側部が強く張る。底部は平坦。腹部の中央には凸部、腹は1つ窪みがある。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧し輪縁引き、彩色した上で、透明釉を施す。荒い貫入。	南北ミゾレキ遺構内
	73	花盆	日	文	胴～底 H.2	白化粧の筒状の花盆。底部には内凹する。 1.5cm間隔で窓位の輪縁を施す。腹部は直立し、 側部が強く張る。底部は平坦。腹部の中央には凸部、腹は1つ窪みがある。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧し透明釉を口縁から側部まで施す。腹は無施釉。脚が無い貫入。	レキ光埴N1 2層
第27回 図版17	74	火入	I	(口) a	胴～底 H.2	鉢の火入（火鉢）。筒状の側部には輪縁 が施され、高台は低い。底部及び側部への 立ち上がりは歯状が用いたために輪縁状に なっている。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	鉢を側面に施す。高台と側部への 立ち上がりは無施釉。	レキ光埴N1 1層 レキ光埴N1 1～2層 レキ光埴N1 2層
	75		II	(イ・ロ)b	口～側 H.6 D.6.5	鉢底を輪縁仕分け、丸みのある火入（火鉢）。 破口で接合する。口縁には輪縁、口唇には輪縁、 側部には斜め骨子で輪縁。側部には2次窓位の 波状が開闊して2つあり、輪縁が強さ れる。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	口部、口縁に輪縁、側部に輪縁を施す。内面は無施釉。	レキ光埴N1 1層 レキ光埴N1 2層
第27回 図版17	76	火入	日	文	口～底 H.6 D.6.5 H.6	白化粧直火の火入。側部には上下2条+1対の 輪縁が筒形の円柱と斜め骨子で施す。斜め骨 子には厚いコバルトで彩色。高台は低 い。	白黄色の細粒子。焼成は良い。耐火土？	全面に白化粧し透明釉を施す。高台 立ち上がり部、骨付、口縁内と口縁 は輪縁が施される。荒い貫入。	南ミゾレキ 1層 南ミゾレキ 2層 南ミゾレキ 3層 IIa層
	77		日	a	胴～底 H.6	白化粧の火入。筒状の側部が高台低い。 表面の透明釉は簡素のもの。内面は白化 粧のみ。	白黄色の細粒子。焼成は良い。耐火土？	全面に白化粧し外表面のみ透明釉を施す。 貫入なし。	レキ光埴N1 1層 レキ光埴N1 2層
第28回 図版18	78	酒器	日	文	口～底 H.10 D.12	白化粧の火入。筒状の側部にコンバスで円 を基準にして横字を輪縁りし、薄いコ バルトで彩色する。高台は低い。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	全面に白化粧し外表面のみ透明釉を施す。 貫入なし。	レキ光埴N1 1層 レキ光埴N1 2層 IIa～b層
	79		I	(口)他	胴～底 H.6	酒器（惣瓶）。三日月形の底部に板状の栓 を差し込み立てて成形。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	輪縁と蓋灰釉か？	南北ミゾレキ遺構内
第28回 図版18	80a	酒器	日	文	口～側 H.6	酒器（カラカラ）。放射線に輪縁りされた 筒の開口部をカットして筒の内側にコルト と薄い鉢形の彩色。口口は角度の異なる白土 を使用し白化粧は不規。注口に接合部に薄い 輪縁。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	外表面に白化粧後、輪縁り、彩色し、 注口を接合して透明釉を施す。	南北ミゾレキ遺構内
	80b		日	文	口～底 H.12	酒器（カラカラ）。放射線に輪縁りされ た筒の開口部をカットして筒の内側で鉢形で 彩色。底部には高台はなく、1.5cm幅の凸部が 側部から窓位で施されている。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	外表面に白化粧後、輪縁り、彩色し、 底部を除いて透明釉を施す。	南北ミゾレキ遺構内 レキ光埴N1 2層
第28回 図版18	81	鍋	I	(口) a	口～側 H.7	鉢の土鍋。口縁は「く」の字に屈曲し、口 側の側面からヒモ状の取手を貼り付ける。 側部は丸く張り出る。	灰褐色の細粒子。焼成は良い。耐火土。	薄い褐色釉を口縁から側部にかけ て施す。内面の口部は無施釉。 側部は光沢の無い鉢形を施す。	不明
	82		I	(口) b	口～側 H.7	鉢の土鍋。口縁は「く」の字に屈曲し、内 側の側面からヒモ状の取手を貼り付ける。 側部は張らない。	褐褐色の細粒子。焼成は良い。耐火土。	鉢形が複数ある。外表面の口縁から側 部には無施釉。内面の口部は無施釉。 側部は光沢の無い鉢形を施す。	レキ光埴N1 1層 Ia～b層
	83	鍋	I	(口)	底部	鉢の土鍋底。圓錐形の脚を貼り付ける。	淡灰褐色の細粒子。焼成は良い。耐火土。	底部に側部からの鉢形の流れが見 られる。内面は薄い鉢形を施す。	南北ミゾレキ遺構内
	84		I	(口)	底部	鉢の土鍋底。圓錐形の脚を貼り付ける。 内底面に輪縁が施す。	淡灰褐色の細粒子。焼成は良い。耐火土。	内面に光沢の無い鉢形を薄く施す。	レキ光埴N1 1層
	85	水注	II	(口) a②	口～側 H.17	鉢の土鍋。口縁は「く」の字に屈曲し、内 側の側面にヒモ状の取手を貼り付ける。 側部は丸く張り出る。	白黄色の細粒子。焼成は良い。耐火土。	I.1層褐色の鉢形の鉢を口縁から側部に施す。 脚は無施釉。II.1層から側部には無施釉。 底部は光沢の無い鉢形を施す。 III.1層から側部には無施釉。底部は光沢の 無い鉢形を施す。	Ia～b層
	86		I	(ハ) 大	注口	黒釉大口（アンビン）の注口。圓錐形に 輪縁引出した後に、注口を接着部と斜 めに切り成形。	白黄色の細粒子。焼成は良い。	黒釉を外表面と注口内の先端に施 す。施釉は器と接続。	レキ光埴N1 1層 レキ光埴N1 2層
	87	水注	I	(ハ) 大	胴～底 H.10	黒釉大口（アンビン）の底部。輪縁引出 した後に、底部は口口し、側部から強く張 り出す。高台はなく、1.5cm幅の凸部が窓位で 施されている。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	黒釉を外表面は側部と高台内に施し、 高台と立ち上がり部、骨付は施釉しな い。内面は施釉後後に5cm程度で黒 釉剥落し、アルミナ苗がみられる。	レキ光埴N1 2層
	88		I	(口) 大a	口～側 H.12	鉢油漬（アンダガーキ）。口縁は逆字で、 側部は直立で、腹部は側面から側部へ張りだ す。脚上部に比較的柔らかく、耳を付ける。 内面に指紋あり。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	鉢形を外表面口縁から側部に施す。 口縫部は施釉を行う。内面は骨付を施 す。側部に脚+鉢形を施す。	レキ光埴N1 2層
第28回 図版18	89	壺	I	(口) 大b	口～側 H.9.8	鉢油漬（アンダガーキ）。小型で、側部 を作り出す側面から側部に徐々に張り出す。 口縫部と脚上部に施釉を廻らし、耳を付ける。 内面に指紋あり。	灰白色の細粒子。焼成はやや不良。	鉢形を内面まで施し、口縫部は施 釉を行。内面の施釉はやや薄い。	レキ光埴N1 1層 レキ光埴N1 1～2層
	90		I	(口) 大c	側部	鉢油漬（アンダガーキ）。脚部が強く張 りだす。脚上部に施釉を2条廻らし、耳を付 ける。内面の施釉が薄い。	灰白色の細粒子。焼成は良い。	光沢の無い鉢形を外表面に施す。内面 は光沢の無い薄い鉢形を施す。	南北ミゾレキ 3～4層 溝3 3層 Ib層 IIa層



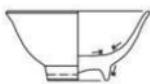
第19図 沖縄産施釉陶器 1 碗



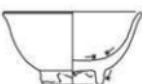
第20図 沖縄産施釉陶器2 碗



第21図 沖縄産施釉陶器3 碗



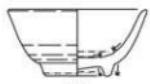
35



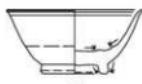
36



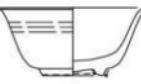
37



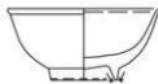
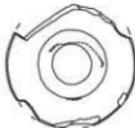
38



39



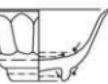
40



41



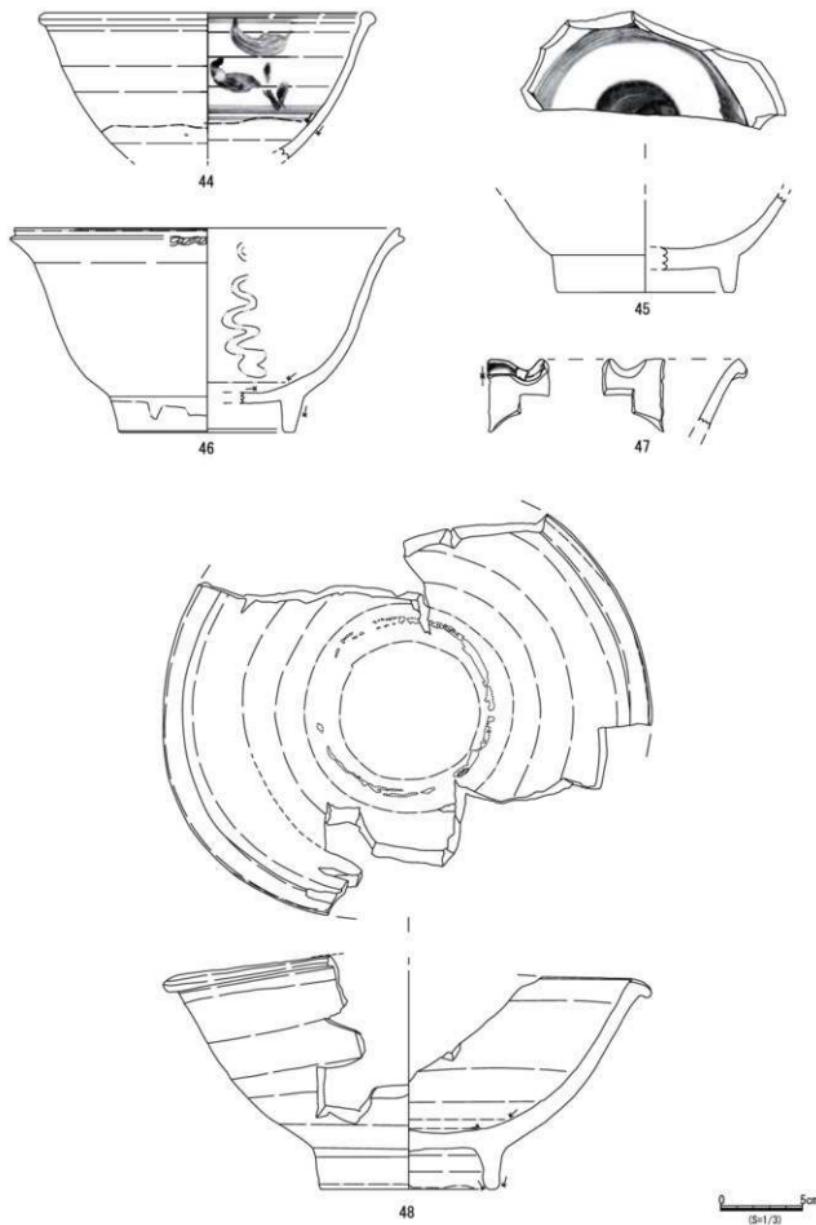
42



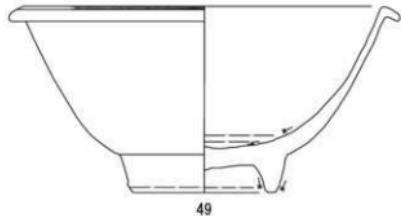
43

0 5cm  
(S=1/3)

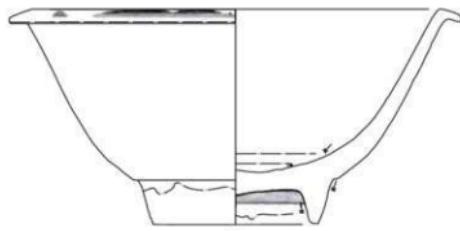
第22図 沖縄産施釉陶器4 小碗



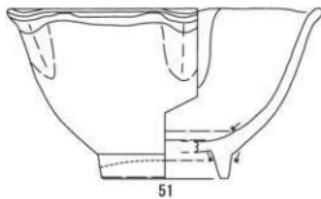
第23図 沖縄産施釉陶器5 鉢



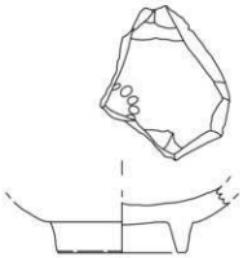
49



50



51



52

0  
(S=1/3) 5cm

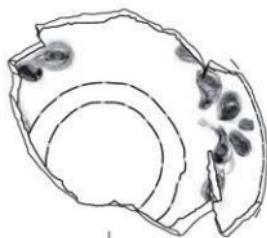
第24図 沖縄産施釉陶器6 鉢



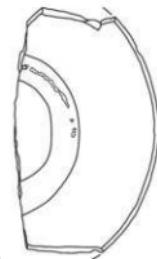
53



54



55



56



57



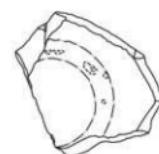
59



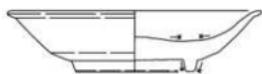
60



61



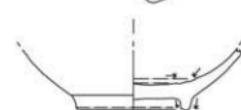
62



63



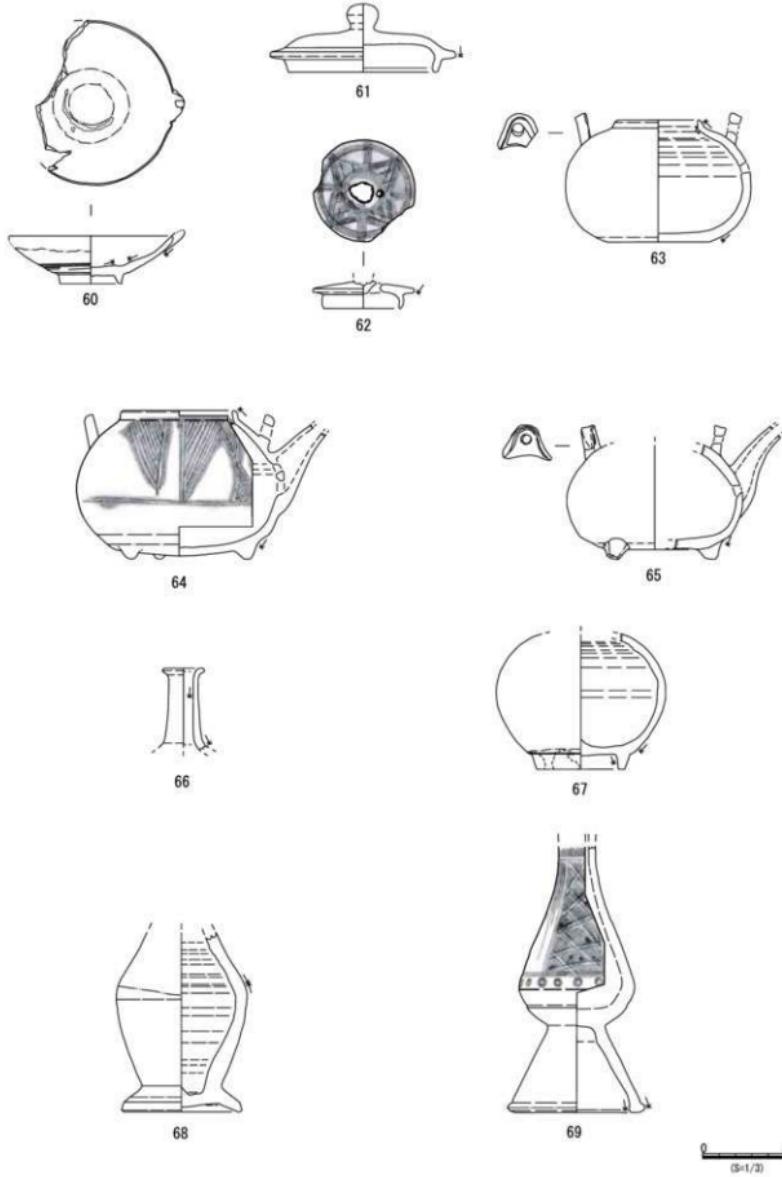
64



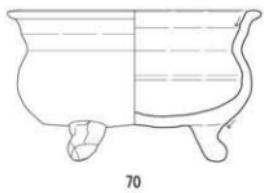
65

  
0  
(3=1/3)  
5cm

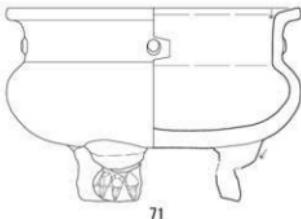
第25図 沖縄産施釉陶器 7 III



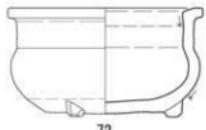
第26図 沖縄産施釉陶器8 灯明皿(60)、急須蓋(61～62)、急須(63～65)、瓶(66～67)、瓶子(68～69)



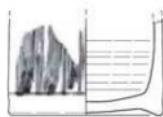
70



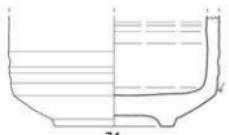
71



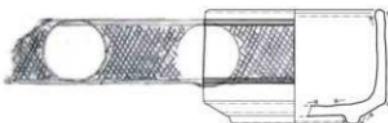
72



73



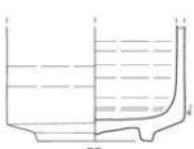
74



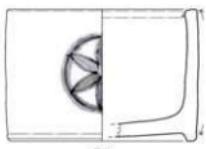
76



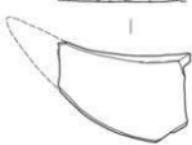
75



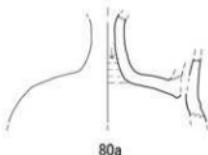
77



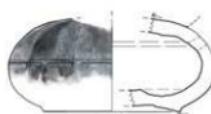
78



79



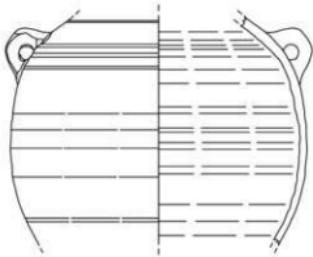
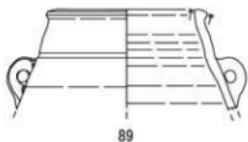
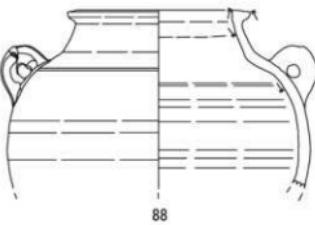
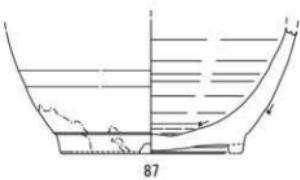
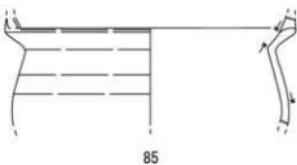
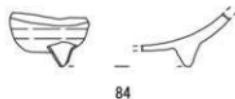
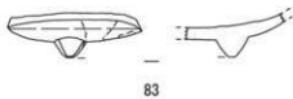
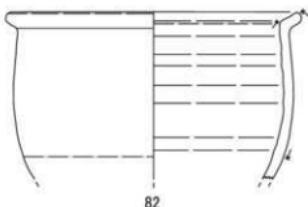
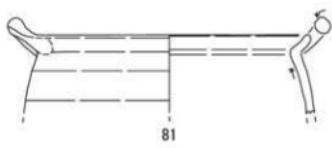
80a



80b

0  
(5=1/3) 5cm

第27図 沖縄産施釉陶器9 香炉（70～72）、花生け（73）、火入れ（74～78）、酒器（79～80）



0 5cm  
(S=1/3)

第28図 沖縄産施釉陶器 10 鍋 (81～85)、安瓶 (86～87)、壺 (88～90)

## 2. 沖縄産無釉陶器

方言では「アラヤチ（荒焼）」と呼称されるもので、無釉ないし泥釉やマンガンを掛けた焼締め陶器の総称である（宮城 1983）。戦前は沖縄産陶器の主流で、大型の甕類を中心として小型の日用雑器なども作られた。

当該遺跡では3682点が出土した。その主な組成は、壺・甕・擂鉢・鉢・火炉で、壺・甕が最も多く、沖縄産無釉陶器全体の約77%を占める（第30図）。出土地別に概観すると、沖縄産無釉陶器の約30%が表探を含む遺構外から出土した。次いでレキ充填土坑No.1（レキ充填部No.1）からの出土量が多く、沖縄産無釉陶器の約29%を占める。南北の溝状礫敷遺構（南北ミゾレキ）全体からの出土割合は約31%である。両者を比較すると、南北溝状礫敷遺構からの出土量が多く、北溝状礫敷遺構の約3倍の資料が出土した。

### 壺（第31図）

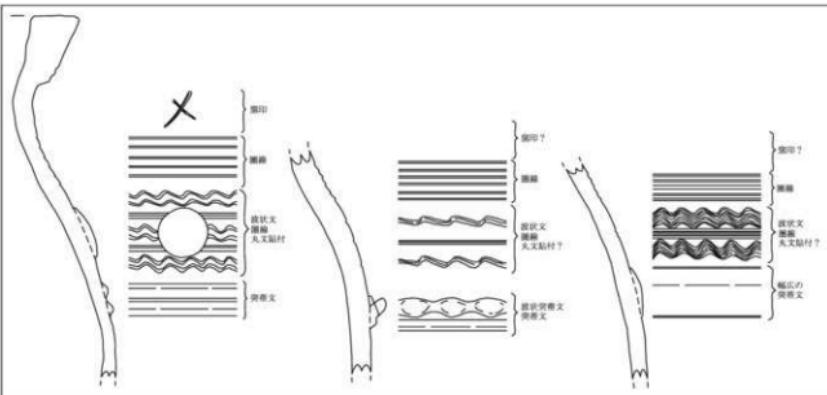
甕と区別のつかない胴・底部片を除いて、183点が出土した。これらは、大きく4類に分けられる（第6表）。I類が最も多く、当該器種の約16%を占める（第30図）。なお、II類全体の出土割合は約25%であり、II類各分類の出土量は概ね同様である。出土量が極めて少ないIII類を除いて、各分類を口径の大きさで細分した（第6表）。これによって、I類は大型のものから比較的小型のものまで幅広い種類が確認できた。また、II類は、a<sub>1</sub>類→a<sub>2</sub>類→b類の順に従って概ね小型になる傾向が窺える。加えて、IV類は口径を小さく作ることを特徴として挙げることができるために、液体を入れる容器としての機能を考えられる。

第31図2は、口縁断面が逆L字状に屈曲しないが、頸部が直状に立ち上がって長頸となるため、便宜上I類に含めた。また、同6はボタン状の浮文が貼付される資料で甕に多い文様であるが、長谷部言人の正方形九等分法を参考にすると、頸径が最大胴径の約56%となるため当該器種に分類した。

### 甕（第32図～第33図）

甕と区別のつかない胴・底部片を除いて、150点が出土した。1次調査の成果に倣って大きく3類に分類した（第6表）。ただし、I類は出土せずII類の出土量は1点のみである。III類は、出土した口縁部片から口径の大きさを細分した（第6表）。III類は小型の資料でも、当該遺跡出土の大型の壺に並ぶ程の大きさになる。

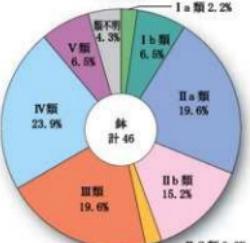
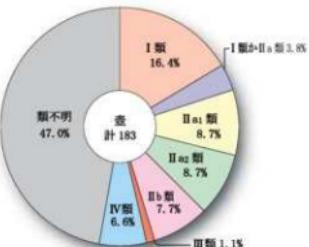
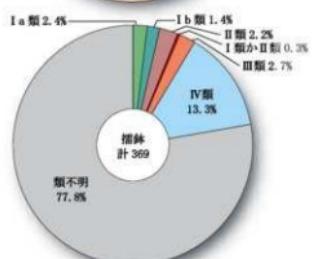
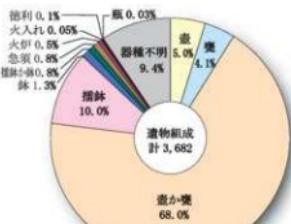
第32図11（II類）とIII類の文様構成は同様である。当該遺跡における甕の文様は、第29図に示すような構図が確認できる。図に示したように文様構成は大きく変わらず、肩から胴上部にかけて波状文や圓線、突帯文が貼付される。これは、類例資料から当該器種に多く見られるものである。



第29図 嘉数トゥンヤマ遺跡における甕の文様

第6表 沖縄産無釉陶器分類一覧

器種	分類		参考
	記号	基準	
甕	I類	口縁断面が逆L字状を呈す長頸のもの。	大：口径20cm前後 中：口径12cm前後 小：口径6cm前後
II類	a	有縫で口縁断面玉縁状を呈し、底状に立ち上がるるもの。	大：口径21cm前後 小：口径15cm前後
	2	有縫で口縁断面玉縁状を呈し、外反するもの。	大：口径17cm前後 小：口径13cm前後
	b	無縫で口縁断面玉縁状を呈するもの。	大：口径16cm前後 小：口径12cm前後
皿類	III類	口縁断面が逆L字状を呈する短腹あるいは無腹のもの。	出土数2点のみ。
IV類	IV類	口縁が幅に肥厚し（あるいは無肥厚）、外反するもの。口径は概ね10cm以内。	大：口径7cm前後 小：口径4cm前後
	I類	口縁が底に直角に張り立つもの。	得られていない。
	II類	口縁断面が逆L字状で、口縁上面の幅が広いもの。	出土点数1点のみ。
盤	III類	口縁断面が方形状に肥厚するものの。	大：口径32～35cm 中：口径26～30cm 小：口径21～25cm
桶鉢	I類	a 口縁断面が「く」の字状で、口縁直下に梗が施されるもののうち、口縁がやや底状の角度を呈して立ち上がるるもの。 b 口縁断面が「く」の字状で、口縁直下に梗が施されるもののうち、口縁が外傾するもの。	
	II類	I類に比して、口縁断面が穂やかに「く」の字状をなすもの。	
	III類	口縁断面が逆L字状で口縁の幅が狭いもの。縁の上端ラインが一様で整然と施される。	
	IV類	口縁断面が逆L字状で口縁の幅が広いもの。口縁部に無縫が選ぶ。	『基教トランヤマ遺跡』Iの桶鉢Ⅴ類。
鉢	I類	a 口縁部が内傾し、外縁に無縫の波状縫を描くもの。 b 口縁部が内傾するので、無文のもの。	ミジクブザー（水鉢）。
	II類	a 口縁部が内傾し、断面形が口縁部を呈するもので有文のもの。 b 口縁部が内傾し、断面形が口縁部を呈するもので無文のもの。	ミジクブザー（水鉢）。
	III類	口縁断面が逆L字状を呈するものの。	ミジクブザー（水鉢）。
	IV類	口唇は平坦に形成し、口縁両端が張り出すもの。	『基教トランヤマ遺跡』Iの甕IV類。
	V類	水鉢同様に、口縁が底部から開いて立ち上がるが、口縁は内傾しないもの。大型の浅鉢。	



第30図 沖縄産無釉陶器の組成と各分類の出土状況



肺					胸膜		肺?		急須		火鉢		火入		銃利		瓶?		医師不明		合計		
口絆部					胸膜		胸膜		口~喉		喉部		底部		口絆		胸部		底部				
I類	a	b	a	b	不明	Ⅲ類	IV類	V類	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部		
a	b	a	b	不明	Ⅲ類	IV類	V類	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部	底部		
1					1																	80	
	1	1			1																	60	
	2	3	1		1	1	8		1	5	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	287	
																						365	
																						712	
																						4	
																						7	
																						6	
																						22	
	1		1																			18	
		1																				10	
			1																			58	
				1																		287	
					1																	44	
						1																1	
							1															4	
								1														7	
									1													6	
										1												2	
											1											30	
												1										93	
													1									25	
														1								105	
															1							1	
																1						62	
																	11					261	
																		8				55	
																			1			17	
																			1			40	
																			11			121	
																			1			38	
																			4			47	
																			3			8	
																						339	
																						12	
																						51	
																						3	
																						1	
																						8	
																						24	
																						98	
	1	2		2	5	1		5		7	1		1	1	2		1	16	1	708	719	8	
			1																1			12	
																			4			4	
																			1			27	
																			1			28	
																	3	40	1	693	1		
																	4		4		29		
																	5	268				268	
																	1		50		1048		
																						1	
																						2	
																						27	
																						3	
																						1	
																						20	
																						1	
																						77	
																						138	
																						1	
																						1	
																						1	
																						7	
																						6	
																						1	
																						3	
																						1	
																						2	
																						3	
																						1	
																						4	
																						1	
																						5	
																						1	
																						10	
																						1	
																						15	
																						2	
																						3	
																						1	
																						6	
	1	3	9	7	1	9	11	3	2	46	1	28	1	1	3	24	1	10	5	4	1	6	336
																						346	
																						3682	

### 擂鉢（第34図～第35図）

369点が出土しており、安里進による分類を参考に、大きく4類に分類した（安里ほか 1987）。本報告では、安里Ⅱ式をI類及びII類に、安里Ⅲ式をIII類に、安里Ⅳ式をIV類に当てはめたが、安里Ⅰ式が本報告 I a類に相当するか明確ではない。いずれにしても、当該5類は器形から、その変遷が窺える。つまり、I a類のように直状に成形された口縁は、徐々に外傾してI b類に至り、II類に遷ると稜線が不明瞭となる。III類では稜線は完全に無くなり、口縁は徐々に起きてIV類に至る。なお、II類とIII類、III類とIV類のそれぞれ中間的な特徴を持つものも認められた（第34図20、第35図23）。

### 鉢（第36図28～35）

46点が出土した。大きく5類に分けられる（第6表）。I・II類がいわゆるミジケブサー（水鉢）で、それぞれ文様（波状文）の有無で2類に細分した。これらは、鉢の中で最も多く出土しており、約46%を占める。中でもII類が多く、その出土割合は約37%である。また、III類やIV類も多く散見することができる。

IV類は、1次調査では小片のみが得られた程度であったため、類例資料を参考にして彙として報告した。しかし、御茶屋御殿跡で全形が復元された資料が報告されているため（知念・新垣 2003）、これを参考にして当該器種に含めた。御茶屋御殿跡で出土した資料は、茶亭跡の基壇外側に設けられた区画内に埋設されており、手洗い用の水漬的な役割が推測されている。口径は46.0cmと報告されるが、この種の資料は概して大型であり、口径が60cmを超すものも報告されている。V類は大型の浅鉢である。首里城跡の繼世門周辺地区や城郭南側下地区などに類例資料を見ることができる（新垣 2002・2004）。いずれも、口縁は外傾して水鉢のようなベタ底になる。第36図34の口縁は、これら程外傾しないが、同様の器形を呈すと思われる。

### その他（第36図36～39）

以上に挙げた他に、急須、火炉、蓋、徳利などが得られた。徳利は、胴長を呈すものを壺や瓶と区別して整理した。ただし、口縁部は壺IV類に含まれると考えられる。他にも、瓶と思われる底部片も得られているが、小片であるため図化しなかった。

第36図36は、急須である。アカムヌーの急須と同様の器形を呈し器壁も薄いため、他の沖縄産無釉陶器とは様相が異なる。しかし、アカムヌーに比べると高温焼成であることや、アカムヌーに認められる赤色粒子の混入が見られないことから本項で扱った<sup>\*</sup>。アカムヌーと沖縄産無釉陶器の陶土は、ジャーガルと島尻マージを混ぜることで共通するため、胎土分析の結果も両者に大きな差は認められない（第IV章参照）。このことから、両者を明確に区別するものは焼成の仕方であると考えられる。アカムヌーの焼成温度は約600℃（曾根 1983）、沖縄産無釉陶器の焼成温度は約900～1100℃（大城 1983）とされる。当該資料は、色調が灰色系を呈すため、還元焼成が起きた可能性があることから、焼成温度は900℃を超えると思われる。なお、把手は上手で、ススの付着も観察できることから、土瓶としての利用が推測できる。また、横手になると思われる急須の把手も出土した。北溝状碟敷遺構2層からの出土で、同36と同様に焼成良好で器面は灰褐色を呈し、素地は明茶褐色を呈す。器壁は約0.6cmで、把手の長さは約4.0cmである。

第36図37・38は火炉である。アカムヌーの火炉Ⅱ a類と同様の器形を呈す。土瓶などを置くための五徳の代わりになるような受け部は類例資料からも見受けられない。このタイプは、アカムヌーではベタ底になるものが殆どであるが、陶器では同38のように三足となるものが多い。

第36図39は蓋で、対応する蓋物の器種は不明である。庇端部の径は13.8cmを測るために、大型の器種に対応することが推測される。

<sup>\*</sup> ただし、赤色粒子は鉛物ではないため、焼成温度によって認められ難くなる可能性も考えられる。

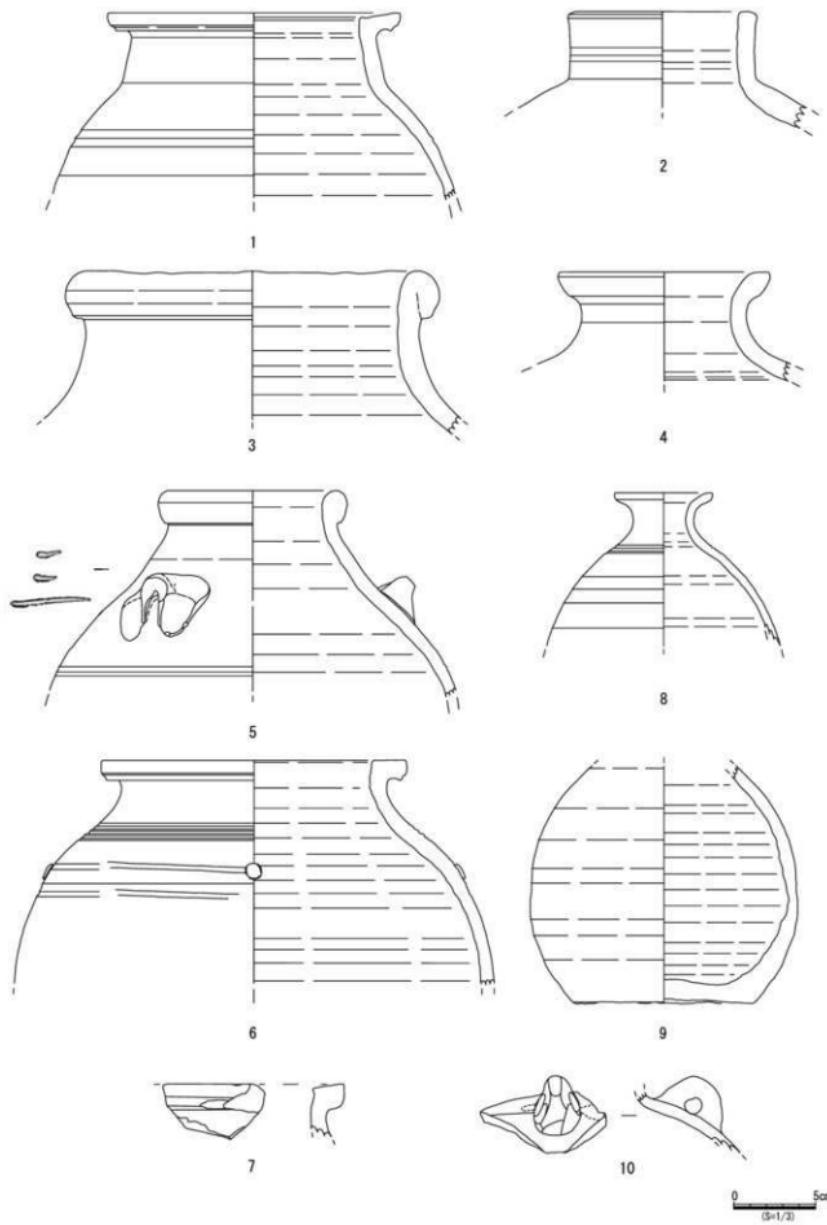
第7表 沖縄無釉陶器観察一覧

単位: cm. ( ) : 僅元、( ) : 僅元、( ) : 僅元、( ) : 僅元

採取番号 回収番号	器種・分類	部位	口径 深径 底径	器色	素地	観察事項	出土地
1	I類	口縁部	(13.0) — —	外面 明茶褐色 内面 明茶褐色	明茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒、 雲母。	ナデ調査。口縁部はやや内傾し、内部をやや内側にし。 口縁下部は表面が突出する。内部はややかで、ナデ調査をして 底部に沿る。肩部分には条の痕跡がある。いわゆる「輪」 の中には中型のタイルに属する。 用途は、砂糖や塩などを 入れるものであつたらしく。	レキ充填部 No.1 2層 レキ充填部 No.1~2 南北ミゾレキ
			(9.6) — —	内外 赤茶褐色	赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒。	輪郭線印彫。ナデ調査。口縁部状に立ち上がり、口縁を平 面上に成形する。典型的な「輪」ではないが、底部を長く 上部からなることより「輪」に似た。 用途は丸味を帯びる。 IIa <sub>1</sub> 類の中部では中型のタイルに属する。	レキ充填部 No.1~2層 南北ミゾレキ
3	IIa <sub>1</sub> 類	口縁部	(20.0) — —	外面 白薙した灰褐色 内面 にぼい灰褐色	博士対象分析資料。 明茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒	ナデ調査。口縁は直立に立ち上がる。また、底座は明確で 玉締めを呈す。口縁は丸味を帯びる。 IIa <sub>1</sub> 類の中部では 大型のタイルに属する。	南北ミゾレキ
			(11.4) — —	外面 白薙した灰褐色 内面 灰褐色	暗茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒、 雲母。	ナデ調査。口縁は斜面を作りて斜対称する。また、底座は 斜面で後継を作る。口縁は平底。これらの特徴から、 トトタッカと呼ばれるものと思われる。用途は、 内側に模様として利用されたようである。 IIa <sub>2</sub> 類の中では 小型のタイルに属する。	レキ充填部 No.2 2層 南北ミゾレキ
5	Ⅲ類	口縁部	10.4 — —	外面 白薙した明茶褐色 内面 明茶褐色	明茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒。	ナデ調査。内面には手の握り面に対して指の押圧痕が 凹面所存。筒状から把手を作らせて底座に至る。口縁 下部ははっきりと輪郭線を呈する。肩部分には、把手に 把手下部に各の輪郭線を「輪郭線印彫」と記す。	レキ充填部 No.2 1・2・3層
			(14.8) — —	外面 白薙した明茶褐色 内面 明茶褐色	博士対象分析資料。 明茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒。	ナデ調査。口縁は直立に立ち上がる。底座は比較的 狭く、底面は周囲から口縁へ移行する。口縁 下部ははっきりと輪郭線を呈する。肩部分には、把手に 把手下部の差の輪郭線を「輪郭線印彫」と記す。	レキ充填部 No.2 1層 南北ミゾレキ
7	Ⅲ類	口縁部	— — —	外面 灰褐色 内面 赤茶褐色	暗赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒、 雲母。	ナデ調査。口縁は直立に立ち上がる。底座は比較的 狭く、底面は周囲から口縁へ移行する。口縁 下部ははっきりと輪郭線を呈する。肩部分には、把手に 把手下部の差の輪郭線を「輪郭線印彫」と記す。	II 1 a~b 層
			IV類	6.0 — —	外面 白薙した暗茶褐色 内面 明茶褐色	暗赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒、 雲母。	ナデ調査。口縁は直立に立ち上がる。底座は比較的 狭く、底面は周囲から口縁へ移行する。口縁 下部ははっきりと輪郭線を呈する。肩部分には、把手に 把手下部の差の輪郭線を「輪郭線印彫」と記す。
9	IV類	肩~底部	— 10.8	外面 白薙した明茶褐色 内面 灰褐色	博士対象分析資料。 明茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒、 雲母。	ナデ調査。口縁は直立に立ち上がる。底座は比較的 狭く、底面は周囲から口縁へ移行する。口縁 下部ははっきりと輪郭線を呈する。肩部分には、把手に 把手下部の差の輪郭線を「輪郭線印彫」と記す。	レキ充填部 No.1 2層 レキ充填部 No.2 1層
			—	外面 白薙した灰褐色 内面 赤茶褐色	暗赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒。	ナデ調査。把手は手離しに付かれており、アングラー等に 似たが、取り扱うと点でこれと異なる。 本作の可能性あり。	南北ミゾレキ
11	Ⅲ類	口縁部	(30.0) — —	外面 にぼい茶褐色 内面 暗茶褐色	暗赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒、 雲母。	ナデ調査。口縁は逆字形に屈曲し、口縁を広くる。 口縁下部は状態が変化する。口縁の屈曲を撮影して、 筒から直ちに筒から移行する。肩部分には6の輪郭線が 現れ、その下部には把手を有する。そこで、把手工具に 筒の切り離しに把手を用いた工具が用いられており、 把手が離れる。器形が大きさなどから「ハンドル」 呼ばれる資源であると思われる。水を溜めるため用い られたものであつたらしく。文様構造は直點と同様だが、 口縁部分も文様が散在される。	レキ充填部 No.1 1・2層
			(26.2) — —	外面 にぼい明茶褐色 内面 明茶褐色	暗赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒、 雲母。	ナデ調査。口縁は逆字形に屈曲し、その下位に 2つの輪郭線が現る。肩部分には条の痕跡が現る。その下位に は条の輪郭線が2つ交差する。この下位には は日の輪郭線と条の輪郭線が交叉する。この部分には 矢張りの輪郭線でできない。口縁の中部は中型のタイルに 属する。	レキ充填部 No.1 1・2層 南北ミゾレキ
13	Ⅲ類	口縁~ 胴部中央	(32.6) — —	外面 にぼい明茶褐色 内面 明茶褐色	暗赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒、 雲母。	ナデ調査。口縁は逆字形に屈曲し、その下位に 2つの輪郭線が現る。肩部分には条の痕跡が現る。その下位に は条の輪郭線と条の輪郭線が交叉する。この部分には 矢張りの輪郭線でできない。口縁の中部は中型のタイルに 属する。	レキ充填部 No.1 2層 南北ミゾレキ
			(35.0) — —	外面 白薙した明茶褐色 内面 にぼい灰褐色	博士対象分析資料。 暗赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒。	ナデ調査。口縁は逆字形に屈曲し、その下位に 2つの輪郭線が現る。肩部分には条の痕跡が現る。その下位に は条の輪郭線と条の輪郭線が交叉する。この部分には 矢張りの輪郭線でできない。口縁の中部は中型のタイルに 属する。	南北ミゾレキ 3・4層 南北ミゾレキ
15	I a類	口縁部	— — —	外面 暗赤褐色 内面 赤褐色	暗赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒。	ナデ調査。柄は約60°を呈し、口縁は直立に立ち上がる。 口縁やその輪郭部はやや丸味を帯び、口縁へ丸味を作り て置く。この下位にはヨココロによろい輪郭線が現れる。 筒の底部との間に突起状の輪郭線が明確に形成されるため、 突起部が貼付される。III類の中では大型のタイルに属する。	レキ充填部 No.2 2層
			(25.5) — —	外面 灰褐色 内面 白薙した暗赤褐色	暗赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒、 雲母。	ナデ調査。柄は約60°を呈し、口縁は直立に立ち上がる。 口縁やその輪郭部はやや丸味を帯び、口縁へ丸味を作り て置く。この下位にはヨココロによろい輪郭線が現れる。 筒の底部との間に突起状の輪郭線が明確に形成されるため、 突起部が貼付される。内面には口縁内側約2.5cm下から幅約1.5cm で11の輪郭線が施される。	レキ充填部 No.1~2層
17	I a類	口縁部	(31.2) — —	外面 灰褐色 内面 暗赤褐色	暗赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒、 雲母。	ナデ調査。柄は約60°を呈し、口縁は直立に立ち上がる。 口縁やその輪郭部はやや丸味を帯び、口縁へ丸味を作り て置く。この下位にはヨココロによろい輪郭線が現れる。 筒の底部との間に突起状の輪郭線が明確に形成されるため、 突起部が貼付される。内面には口縁内側約2.5cm下から幅約1.5cm で11の輪郭線が施される。	レキ充填部 No.1 2層
			(30.2) — —	外面 灰褐色 内面 暗赤褐色	暗赤茶褐色。 黑色砂粒、白色砂粒。	ナデ調査。柄は約60°を呈し、口縁は直立に立ち上がる。 口縁やその輪郭部はやや丸味を帯び、口縁へ丸味を作り て置く。この下位にはヨココロによろい輪郭線が現れる。 筒の底部との間に突起状の輪郭線が明確に形成されるため、 突起部が貼付される。内面には口縁内側約2.5cm下から幅約1.5cm で11の輪郭線が施される。	レキ充填部 No.1 2層 南北ミゾレキ

第7表 沖縄県無釉陶器観察一覧2

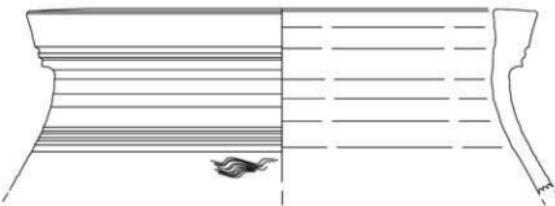
備考番号 出版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器色	素地	観察事項	出土地	
第34回 国版23	19	II類	(32.2) — —	外面 明赤褐色 — —	明茶褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。	ナデ調査。外腹成形前段、傾きは約85°を呈して外傾する。口唇部平坦。口縁下端はやや下方に張り出して、口縁外部部は若干広くなる。口縁は丸抜を作って断面とする。この下位にヨコナリは施されていない。突窓状の種類は形成されない。内面には、口唇内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	レキ充填庫 No.1層 南北ミゾレキ	
	20	III類	(31.4) — —	外面 に赤い灰褐色 — —	暗赤褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 赤色粒子。	ナデ調査。傾きは約45°を呈し、口縁は極めて外傾する。口唇部平坦。15~19時間、口縁の屈曲部をヨコナリによって調査するが、口縁前面は1~2mmほど左側に「く」の字形の凹部がある。内面には、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	南北ミゾレキ	
	21	III類	(29.0) — —	内外 に赤い灰褐色	暗赤褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	ナデ調査。口唇は平坦。口縁は下端にやや肥厚する。内面は、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	南北ミゾレキ	
	22	IV類	— — —	内外 に赤い灰褐色	暗赤褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	ナデ調査。口唇は平坦。口縁は下端にやや肥厚する。内面は、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	南北ミゾレキ	
	23	IV類	(22.6) — —	内外 明赤褐色	明茶褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	ナデ調査。ヨコナリは施されていない。口縁下端はやや尖る。内面は、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	レキ充填庫 No.12層	
	24	IV類	(21.6) 11.5 9.0	外面 赤褐色 — —	暗赤褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。	胎土対象分析資料。 口縁~底部付近	ナデ調査。傾きは約70°を呈し、口縁はやや尖る。口縁下端は丸い上端がなく、口縫部に1条の痕線がある。内面は、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	レキ充填庫 No.1~2層 レキ充填庫 No.1~2層
	25	IV類	(25.0) — —	内外 明茶褐色	明茶褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	ナデ調査。傾きは約70°を呈し、口縁はやや尖る。口縁下端は丸い上端がなく、口縫部に1条の痕線がある。内面は、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	レキ充填庫 No.1~2層 レキ充填庫 No.1~2層	
	26	Ia類 または II類	— —	外面 灰褐色 — (10.0)	暗赤褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	内面工具によって削ぐ。底面調整せず。底面は丸く尖る。立上がりの角度は約45°を呈り、傾斜で外削するため、口縁か口縫部の底面を削定した。	1トレ 1a~b層	
	27	II類?	— —	外面 褐いた灰褐色 — (12.0)	暗赤褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	底面成形前。ナデ調査。やや底面で凹面的な様子を施す。底面に伏せようやかな高さを作る底部分。高さ部は、断面アーチ形の神戸式貝貝に沿って1.0~1.5cm程のVを外縁から立ち上げたり削ぐり度合は約45°を呈する。立ち上がりや底面などが、直角的の底削りが定められる。	南北ミゾレキ	
	28	Ia類	(20.6) — —	内外 明茶褐色	胎土対象分析資料。 明茶褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	ナデ調査。口縁やや内側にして口縁は丸味を帯びる。胸上部には、2条の横縫線と口縁部の腰状の擦痕がある。彼次文が施されている。内面は、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	南北ミゾレキ	
	29	IIa類	(24.0) — —	内外 赤茶褐色	暗赤褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	ナデ調査。口縁下端はやや尖る。内面は、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	レキ充填庫 No.12層	
	30	IIb類	(14.0) — —	外面 に赤い明褐色 — —	暗赤褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	ナデ調査。胸上部には、2条の波状とボタン状の擦痕がある。これを区別するようにして上の上に横縫線。下に横縫線がある。内面は、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	L14 No.3層 (次年度報告予定)	
	31	III類	(36.6) — —	外面 灰褐色 — —	胎土対象分析資料。 明茶褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。赤色粒子。	ナデ調査。胸上部には、断面アーチ形の工具削定部が押圧したと思われる跡が施される。底面は約1.3cmを削り、大型に歪む形態が現れる。	表裏	
	32	IV類	(37.6) — —	内外 に赤い灰褐色	暗赤褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。	ナデ調査。口縁は外に笠押しし上縁前面ラッパ状を呈す。口縁部には、1条の波状とボタン状の浮きが施される。これを区別するようにして上の上に横縫線。下に横縫線がある。内面は、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	32a 南北ミゾレキ 2層 32b レキ充填庫 No.11層 南北ミゾレキ 3層	
第36回 国版 25~26	33	IV類	— — —	外面 に赤い灰褐色 — —	暗赤褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 右反対砂粒(貝殻含む)。	ナデ調査。口縁は外に笠押しし上縁前面ラッパ状を呈す。口縁部には、1条の波状とボタン状の浮きが施される。これを区別するようにして上の上に横縫線。下に横縫線がある。内面は、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	南北ミゾレキ	
	34	V類	(26.8) — —	外面 褭った暗茶褐色 — —	暗赤褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。	ナデ調査。口唇平坦。口唇外縁部はヨコナリによって削定される。内面は、口縁内縁部2.0cm下のラインから右下方向の埋入が施される。	レキ充填庫 No.11層 レキ充填庫 No.1~2層	
	35	跡?	— —	— (7.0)	— —	ナデ調査。内面機械的削定。立上がりを極めてやや間に隙間がある場合もあるが、復元した底様の値から削定を決定した。	南北ミゾレキ 2層	
	36	急須	(6.2) — —	— —	胎土対象分析資料。 明茶褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	ナデ調査。内面機械的削定。立上がりを極めてやや間に隙間がある場合もあるが、復元した底様の値から削定を決定した。	レキ充填庫 No.1~2層 南北ミゾレキ	
	37	火炉	(11.8) — —	— —	胎土対象分析資料。 明茶褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	ナデ調査。内面機械的削定。立上がりを極めてやや間に隙間がある場合もあるが、復元した底様の値から削定を決定した。	南北ミゾレキ 3層	
	38	—	(12.8) — —	— —	明茶褐色。 黑色砂粒。白色砂粒。 青母。	ナデ調査。内面底面は丸く削定される。三星の底面で、脚部内縁部を削り立てる。同様の底面を呈すと思われる。	南北ミゾレキ	
	39	蓋	— —	甲~底 (13.8)	— —	ナデ調査。表面凹凸削定。外縁には丸彫りの付帯は認められない。	L14 1b層	
	40	火入れ	— —	— (10.8)	— —	ナデ調査。表面凹凸削定で高台を作る。外縁には丸彫りの付帯は認められない。	南北ミゾレキ	
	41	—	— —	— (12.2)	— —	ナデ調査。表面凹凸削定で高台を作る。外縁には丸彫りの付帯は認められない。	南北ミゾレキ	



第31図 沖縄産無釉陶器 1壺



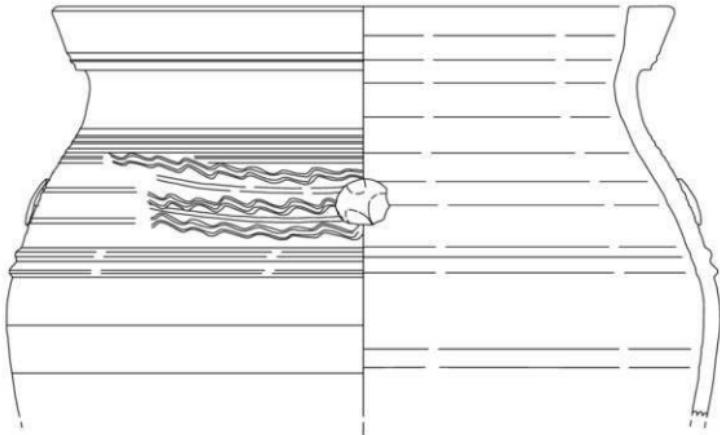
11



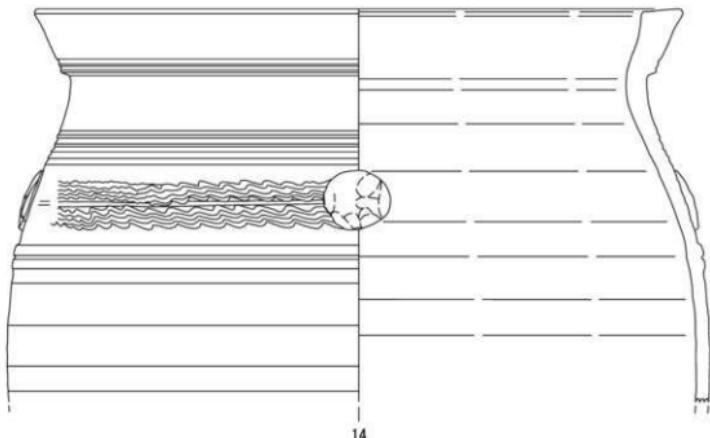
12

0 5cm  
(5=1/3)

第32図 沖縄産無釉陶器2 瓢



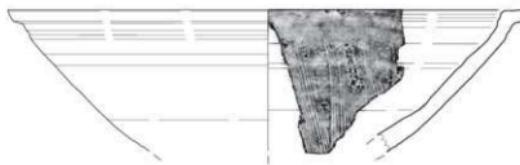
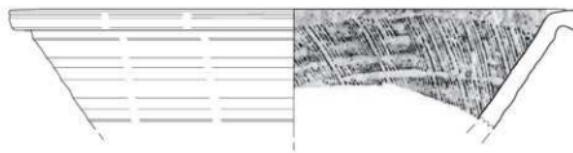
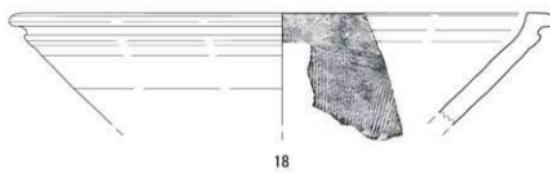
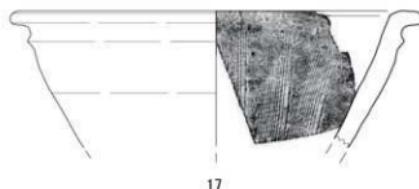
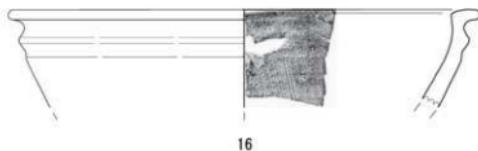
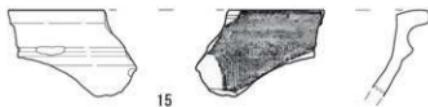
13



14

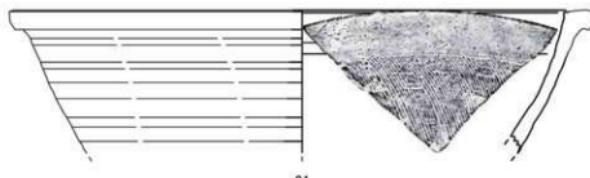
0  
5cm  
(S=1/3)

第33図 沖縄産無釉陶器3 瓢



0 5cm  
(5-1/3)

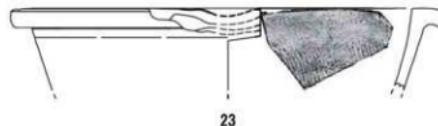
第34図 沖縄産無釉陶器4 握鉢



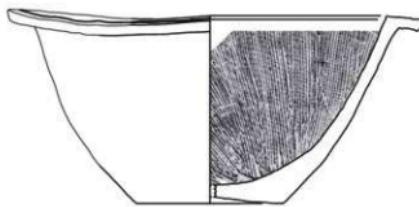
21



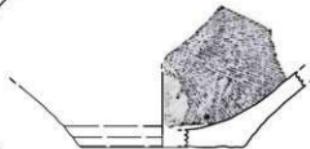
22



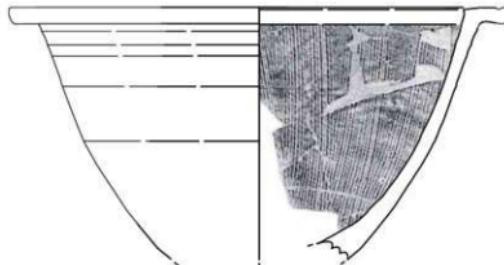
23



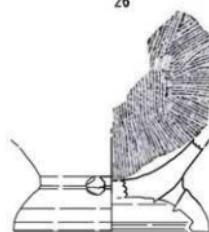
24



26



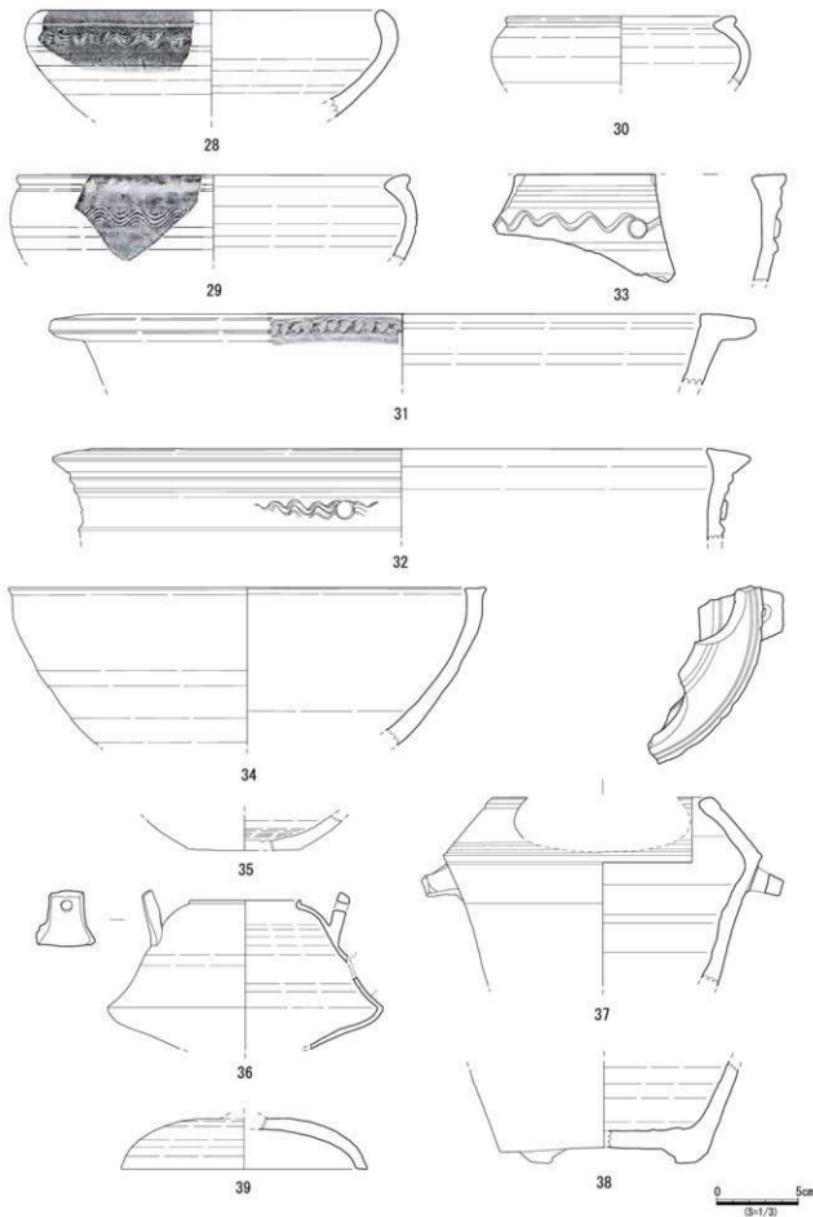
25



27

0  
(3=1/3) 5cm

第35図 沖縄産無釉陶器5 描鉢



第36図 沖縄産無釉陶器6 鉢(28~35)、急須(36)、火鉢(37~38)、蓋(39)

### 3. アカムヌー

従来、陶質土器として整理されるものである。小型の登り窯で焼かれるため（曾根 1983）、典型的なものは焼成不良で軟質となる。ただし、焼成温度の影響によって、硬質になるものもある。硬質のものは、赤瓦に似た様相を呈すものもあり、瓦質土器の範疇に収まるものもある。しかし、本土産のいわゆる「瓦質土器」とは異なるため、硬質を呈すものも全て本項に含めて扱った。なお、中には焼成不良の沖縄産無釉陶器の可能性が考えられるものもあるが（第 42 図 26・27・32）、「焼成不良」という点で、これらも全て本項に含めた。詳しくは、順を追って報告する。

アカムヌーは、当該遺跡では 10887 点が出土しており、近世以降に比定される遺物全体の約 58% を占めており、最も出土量が多い。その主な組成は、鍋・鉢・急須・火炉で、鍋・急須が最も多く、アカムヌー全体の約 79% を占める（第 38 図）。遺構別の出土割合では、アカムヌーの約 43% にあたる 4724 点が礫充填土坑 No.1（レキ充填部 No.1）で出土しており最も多い。一方で、レキ充填土坑 No.2 での出土率は僅か 3% に留まっており、アカムヌーが主に土坑 No.1 に廃棄されたことが窺える<sup>\*</sup>。また、南溝状礫敷遺構（南ミゾレキ）でのアカムヌーの出土率は約 12% に対して、北溝状礫敷遺構（北ミゾレキ）での出土率は 0.3% に過ぎない。

\*前節でも述べられているように、アカムヌーの大量廃棄は礫充填土坑 No.1 の排水機能を高めるための工夫と思われる。

#### 鍋（第 39 図～第 40 図）

身は、口縁部片だけでも 996 点が得られており、様々な特徴が認められた。特に、口径を復元できるものが比較的多く得られたため、第 9 表のように大きさで細分している。当該遺跡では、口径 19 cm のものと 25 cm のものが極めて少なかったため、この前後で大きく大・中・小に分けた。大きさが分かるものの中では中型が最も多く、鍋全体の約 23% を占める。ただし、中型は大きさの幅が広いため、さらに大～小に細分した。また、蓋の大きさについても加味して、どの大きさの身にどの大きさの蓋が対応するかを勘案した。蓋は、鍋身の蓋受けより大きくなく、頸部内径より小さくないものを選ぶ必要があり、蓋受け端部の中央付近に収まることを理想とした。つまり、第 37 図のように、蓋受け部の大きさ（a）と頸部括れの程度（b）に応じて蓋の位置が蓋受け部の中央付近に収まるように蓋の大きさを設定し、当該遺跡における統計値から対応する蓋の大きさを推算した（第 9 表）。なお、当該遺跡では底端部の直径が 23 cm を超えるものは出土していないため、鍋蓋は小型と中型の身に対応するものに限られた。

蓋受け部端部に作られる滑り止めの有無の細分も行った（第 9 表）。第 38 図に示すように、小型のものは I・II 類の別に大きく左右されないが、大型は I 類では殆ど見られず、II 類に多いことがわかる。また、胴部の張りや把手の向きについても第 37 図のように整理した。

#### 羽釜（第 41 図 16・17）

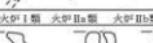
4 点が出土した。いずれも小片で、器形が窺える資料は得られていない。

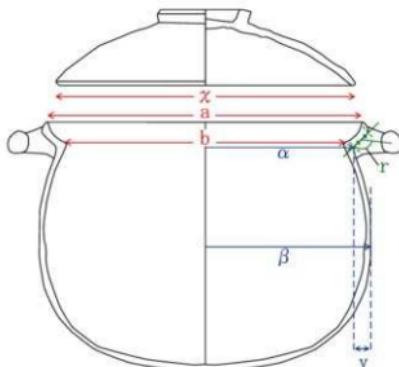
#### 鉢（第 41 図 18～第 42 図 25）

203 点が出土した。大きく 3 類に分けられるが、この内 I・II 類は水鉢で、鉢全体の約 98% を占める（第 38 図）。なお、1 次調査における鉢 II 類は、玉縁口縁を呈す水鉢であるが、これについては認められなかった。代わりに、1 次調査では得られていない平口縁の水鉢を II 類とした。明確に II 類に分けられる資料は僅か 1 点のみの出土であるため、今次調査における鉢は実質 I 類に占められる。

I 類は文様（波状文）の有無によって細分している。概して、有文の資料は無文の資料より大型になる傾向にあるが、第 41 図 22 のように、無文でも大型になるものも若干認められる。出土量については、有文の資料が多い。

第9表 アカムヌ一分類一覧

器械	分類			備考
	属性	記号	基準	
鍋	蓋受け 受け	I型	滑り止めがないもの。	
		II型	a 蓋受け部をヨコナギによって押せることで、滑り止めを作るもの。 b 蓋受け端部を形成することによって、ツメ(滑り止め)を作り出すもの。	 鍋I型
鉢	大きさ	大	口径26cm以上のもの。	縦径約9cm以上。または底端部縦約23cm以上の鍋蓋が概ね対応。
		大	口径24~25cmのもの。	縦径約8cm~9cm。または底端部径約21~23cmの鍋蓋が概ね対応。
		中	口径21~23cmのもの。	縦径約7cm~8cm。または底端部径約19~21cmの鍋蓋が概ね対応。
		小	口径19~20cmのもの。	縦径約6cm~7cm。または底端部径約18~19cmの鍋蓋が概ね対応。
		小	口径18cm以下のもの。	縦径約6cm以下。または底端部縦約18cm以下の鍋蓋が概ね対応。
口縁部	口縁部	I型	a 口縁部が内凹し、外面に握きの波状筋を描くもの。 b 口縁部が内凹するもので、無文のもの。	ミクタブサ(水鉢)。 ミクタブサ(水鉢)。
		II型	内縫は縁で、口唇が平組のもの。	ミクタブサ(水鉢)。『鳥取トランヤマ直綱』でII型として報告されている口縁断面五種状のものは本調査では得られていない。
		III型	口縁断面が逆し字状を呈するもの。	
急須	肩部	I型	無瘤のもの。	 肩I型
		II型	有瘤のもの。	 肩II型
	口縁	a型	蓋受けを作らないものの。	 急須Ia型
		b型	蓋受けをつくるものの。	 急須Ib型
火鉢	器形	I型	器形球状で、脚部中央から口縁へ大きく内傾するもの。	
		a	脚部から「く」の字状に折れて口縁が内傾するもの。	
		b	脚部から「く」の字状に折れて口縁が内傾するもので、口縁に突舟が附るもの。	
		c	脚部上端で「く」の字状に折れて縁が直状に立上るもの。	
		III型	円筒状の器形を呈するもの。	 火鉢III型
	IV型	IV型	浅鉢状になるもの。	 火鉢IV型
		V型	上面觀が馬蹄形を呈し、大型のもの。	 火鉢V型



・ xは鍋身に対応する蓋の大きさ

$$x = \frac{a+b}{2} \text{ cm}$$

・ yは頸部に対して胴部が張る割合

$$y = \left( \frac{\beta}{\alpha} - 1 \right) \times 100\%$$

・ rは蓋受けに対する把手の角度

$r \leq 95^\circ$  : 把手は下方を向く。

$100^\circ \leq r \leq 115^\circ$  : 把手はやや下方を向く。

$r \geq 120^\circ$  : 把手は起きる。

第37図 鍋身の器形と鍋蓋との対応関係

### 擂鉢（第42図26・27）

48点が得られた。器形は、沖縄産無釉陶器の擂鉢IV類に属すものに限られる。その多くが硬質で、焼成不良の沖縄産無釉陶器とも思えるものである。しかしながら、胎土分析の結果からも、アカムヌーと沖縄産無釉陶器の区別は困難であると言えることから、本報告では焼成温度が低いと思われる資料はアカムヌーの範疇で整理した。ただし、具体的な焼成温度を推測することができないため、明確にアカムヌーに区別できるとは言えない。このような資料の整理については今後の課題である。

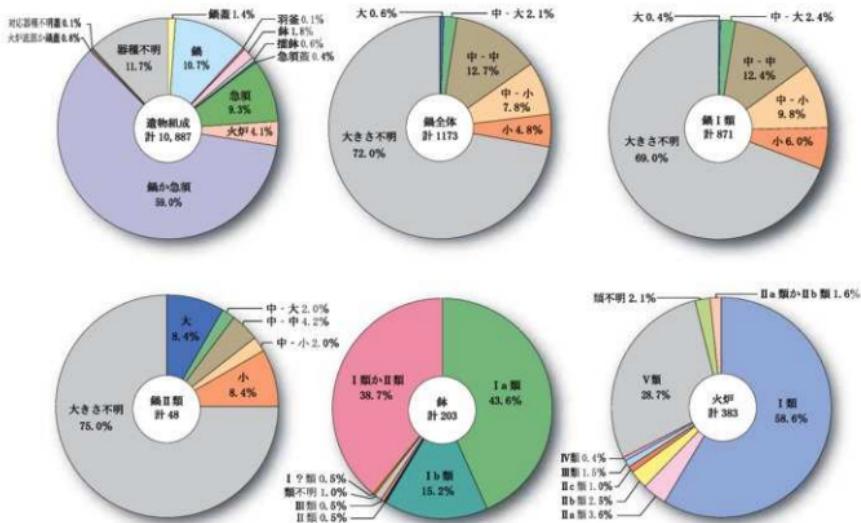
### 急須（第42図28～35）

身は、鍋との区別がつかない胴・底部片を除いて1022点が出土した。頭部の有無と蓋受けの有無で大きく分類したが（第9表）、全て上手の土瓶である。加えて、器形も若干の違いはあるものの、概ね同様である。また、蓋受けが作られるものは1点のみで、大半を1類が占める。

### 火炉（第43図～第46図53）

383点が出土した。器形から大きく5類に分けられる（第9表）。I類が最も多く、火炉全体の約59%を占める。次いでV類が多く、その割合は約29%である。

I類・III類・V類は土瓶などを置くための受け部が貼付されるものであるのに対して、II類・IV類はこれを貼付しない。ただし、II類はI類と同様の火窓が設けられる他、器形は角張るか丸味を帯びるかの違いはあるものの、口縁が内側に傾くことで共通する。なお、IV類については本項の中でもやや異質に思えるが、ススの付着や器形から火鉢などの用途が想定できる。



第38図 アカムヌーの組成と各分類の出土状況

第10表 アカムヌー集計表1

種類	調査															測定					測定							
	面		口縁部					口縫部					口縫部					口縫部					測定					
	縦	横	大	中	小	不規	大	中	小	不規	大	中	小	不規	大	中	小	不規	大	中	小	不規	大	中	小	不規		
出土位置・層位	中	中	中	中	小	不規	大	大	中	小	不規	大	中	小	不規	大	中	小	不規	大	中	小	不規	大	中	小	不規	
表面																												
I	a																											
	b																											
	a+b																											
I-a~II-a																												
I-b~II-b																												
II	a																											
	b																											
	a+b																											
	a+b+c																											
南邊状態数 (度合マージン)	1																											
1~2級																												
2級																												
3級																												
4~4級																												
5級																												
過渡																												
過渡内																												
立溝状態数 (度合マージン)	1																											
2級																												
3級																												
過渡外																												
南北溝状態数 (度合マージン)	1																											
過渡内	1	7	1	1	13	8	25	21	17	90	1	1	12	2	8	16	1	8	3	6	9	1	1	1	1	1		
1	1級																											
	2級																											
2	過渡内																											
3	1級																											
	2級																											
4	過渡内																											
5	1級																											
	2級																											
6	過渡内																											
7	1級																											
	2級																											
8	過渡内																											
9	1級																											
	2級																											
10	過渡内																											
11	1級																											
	2級																											
12	過渡内																											
13	1級																											
	2級																											
14	過渡内																											
15	1級																											
	2級																											
16	過渡内																											
17	1級																											
	2級																											
18	過渡内																											
19	1級																											
	2級																											
20	過渡内																											
21	1級																											
	2級																											
22	過渡内																											
23	1級																											
	2級																											
24	過渡内																											
25	1級																											
	2級																											
26	過渡内																											
合計	14	22	17	3	87	21	108	89	52	903	1	1	1	0	3	29	0	4	20	177	1	21	772	294	11	16	311	1145

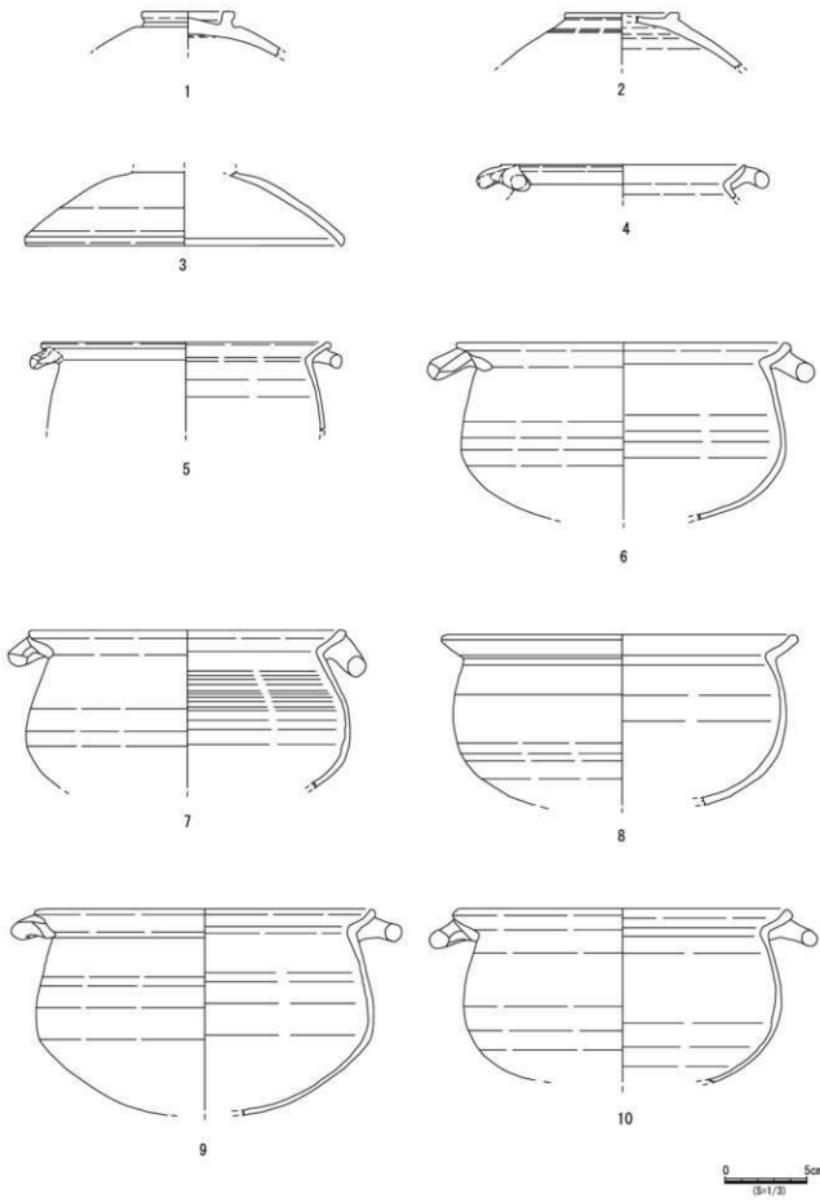


第11表 アカムヌー観察一覧

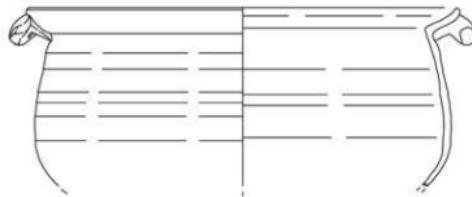
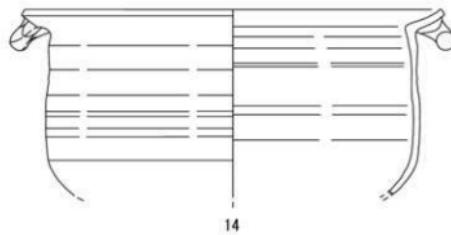
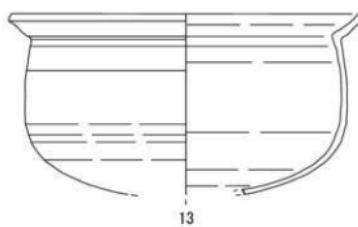
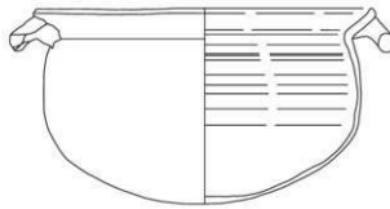
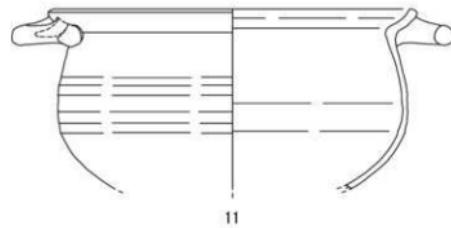
半径 2 cm. (C) 1 倍元壁、壁の法線は上から壁に平行。最高・近傍密度（あるいは所縦密度）

第11表 アカムヌー観察一覽2

調査番号 採取場所 採取年月 日付	種類・分類	部位	口唇 鼻腔 口腔	膚色	東地	観察事項	半径(m) ( ) : 植木(木立)の位置は上から順に: 頂点 - 前端部(あるいは側面部)。	
							山地	
28	急 斜面	-	ほぼ完形	3.2 3.2 3.2	外側 暗褐色 黒褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。種子は外側に形成された状態を示す。被毛部の直後から、比較的小さな凹凸部が出現すると思われる。性状は良好。	レキ充填部 No.1 1層
29	急 斜面	-	固み～肉	3.0 (6.5)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	ナシ調節。種子はややゆるぎ調節。他の福部は被脱皮。小型の急頭に對応するものと思われる。	1トレ 1a～b側
30	Ia型	口縁部	(7.0)	内外 明褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は柔軟部。1.5mを徑の時に前で曲げるものの、口唇は丸味を帯びる。両側は丸味を帯びる。把手は上手で、平滑。正面部を守る。注1次風。	レキ充填部 No.1 2層	
31	IIa型	口縁部	(7.0)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。口縁は直角に向いて立ち上がる。比較的堅固。口縁は丸味を帯びる。また、口縁上部は平らに成長する。スズメは正面部を守る。	南北ミゾレキ通鋪内	
32	IIb型	口縁部	-	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	ナシ調節。歯受けを作る「彌留」。1.5mは頭部から若干の輪状気泡に立ち上がる。比較的堅固。口唇はやや平坦。體受けの被脱皮は厚く、頭部は丸味を帯びる。頭部がぐるぐる良好で、30~31~33~35cmまで比較相続する。	レキ充填部 No.1 1層	
33	IIa型	ほぼ完形 (丸底)	8.3 (11.0)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	頭部がよく丸く膨らむものの、ほぼ直角に成長する。頭部は丸味を帯びる。脚部下部で被脱皮を作り、丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。スズメは頭部中心部に付着する。把手は直角に付着する。	レキ充填部 No.1 1層	
34	IIa型	口縁～底部 (底部)	7.6	明褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。口縁は直角に向いて立ち上がる。頭部は丸味を帯びる。頭部がぐるぐる良好で、30~31~33~35cmまで比較相続する。	レキ充填部 No.2 3層	
35	IIa型	ほぼ完形 (丸底)	7.4 11.2	外側 内面 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	頭部へへ成長しナシ調節。口縁は直角に向いて立ち上がる。頭部は30~32cmで頭部から若干の輪状気泡に立ち上がる。スズメは頭部中心部に付着する。把手は丸味を帯びる。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.2 3層	
36	I型	口縁～側部	(15.0)	内外 明褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。口縁は直角に向いて立ち上がる。頭部は丸味を帯びる。頭部から丸味が形成されると同時に被脱皮を作り、丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。スズメは頭部中心部に付着する。	レキ充填部 No.2 3層	
37	I型	口縁部	(14.0)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部はやや丸味を帯びる。頭部を丸味として付着する。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.2 2層	
38	I型	頂上部～底部	-	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	レキ充填部 No.2 2層	
39	I型	底部	-	外側 内面 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.2 2層	
40	I型	底部	(12.0)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	レキ充填部 No.2 2層	
41	IIa型	口縁部	(12.8)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	レキ充填部 No.1 1層	
42	IIa型	口縁部	(10.8)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	北ミゾレキ 2層	
43	IIa型	口縁部	(11.0)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	K1 IIa層	
44	IIb型	口縁部	(14.2)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	レキ充填部 No.1 1層	
45	IIb型	口縁部	(12.6)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	レキ充填部 No.2 1層	
46	IIb型	口縁部	(12.6)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	レキ充填部 No.1 2層	
47	IIc型	口縁部	(13.6)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	北ミゾレキ 2層	
48	III型	口縁部	(16.4)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	南北ミゾレキ	
49	IV型	口縁部	(21.2)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	山地へへ成長しナシ調節。内面は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びて屈曲し、底部を守る。	1トレ 1a～b側	
50	V型	口縁部	(18.0)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	五感の代わりとなる頭部(口縁部)へへ成長し、角度を変えて内側へと、頭部の内部角度を引き寄せし、46°に比べて直進して作り出される。頭部の内部角度は約1.5cmと口縁部1.5cmに比べて極端に大きい。そのため、そのうちの4/5は口縫に沿って走り、ほぼ直進となる。この構造が成るから、それだけレキ充填部 No.1 2層とレキ充填部 No.1 1層に付着する。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.1～2層	
51	V型	口縁部	(24.8)	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	五感の代わりとなる頭部(口縁部)へへ成長し、角度を変えて内側へと、頭部の内部角度を引き寄せし、46°に比べて直進して作り出される。頭部の内部角度は約1.5cmと口縁部1.5cmに比べて極端に大きい。そのため、そのうちの4/5は口縫に沿って走り、ほぼ直進となる。この構造が成るから、それだけレキ充填部 No.1 1層とレキ充填部 No.1 2層に付着する。	レキ充填部 No.1 2層	
52	V型	口縁～底部	6.6	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	五感の代わりとなる頭部(口縁部)へへ成長し、角度を変えて内側へと、頭部の内部角度を引き寄せし、46°に比べて直進して作り出される。頭部の内部角度は約1.5cmと口縁部1.5cmに比べて極端に大きい。そのため、そのうちの4/5は口縫に沿って走り、ほぼ直進となる。この構造が成るから、それだけレキ充填部 No.1 1層とレキ充填部 No.1 2層に付着する。	レキ充填部 No.1 1層 レキ充填部 No.1～2層	
53	V型	口縁～底部	5.7	内外 暗褐色	健やか。頭部褐色。 黒褐色粉。白色砂粒。黙葉。 赤色粒子。	五感の代わりとなる頭部(口縁部)へへ成長し、角度を変えて内側へと、頭部の内部角度を引き寄せし、46°に比べて直進して作り出される。頭部の内部角度は約1.5cmと口縁部1.5cmに比べて極端に大きい。そのため、そのうちの4/5は口縫に沿って走り、ほぼ直進となる。この構造が成るから、それだけレキ充填部 No.1 1層とレキ充填部 No.1 2層に付着する。	レキ充填部 No.1 2層	
54	不明	-	把手	-	表面 深褐色	頭部が不規則な形状。頭部は丸味を帯びる。把手は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びる。把手は丸味を帯びる。	頭部が不規則な形状。頭部は丸味を帯びる。把手は丸味を帯びる。頭部は丸味を帯びる。把手は丸味を帯びる。	レキ充填部 No.1
第43回 42～43 回収								
第44回 43～44 回収								
第45回 ~66回 回収								

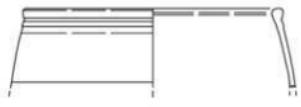


第39図 アカムヌー1 鍋蓋（1～3）、鍋（4～10）

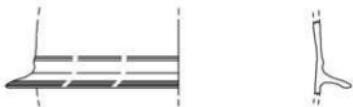


0 5cm  
(S=1/3)

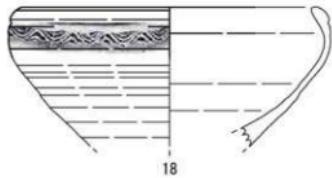
第40図 アカムヌー2 鍋



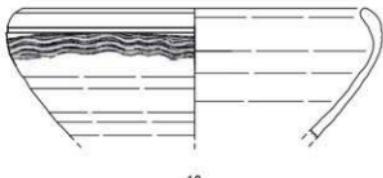
16



17



18



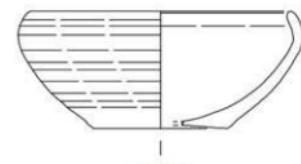
19



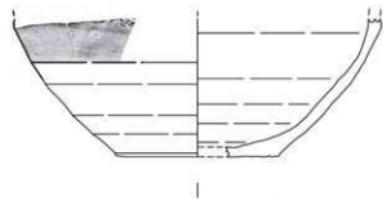
20



21



22

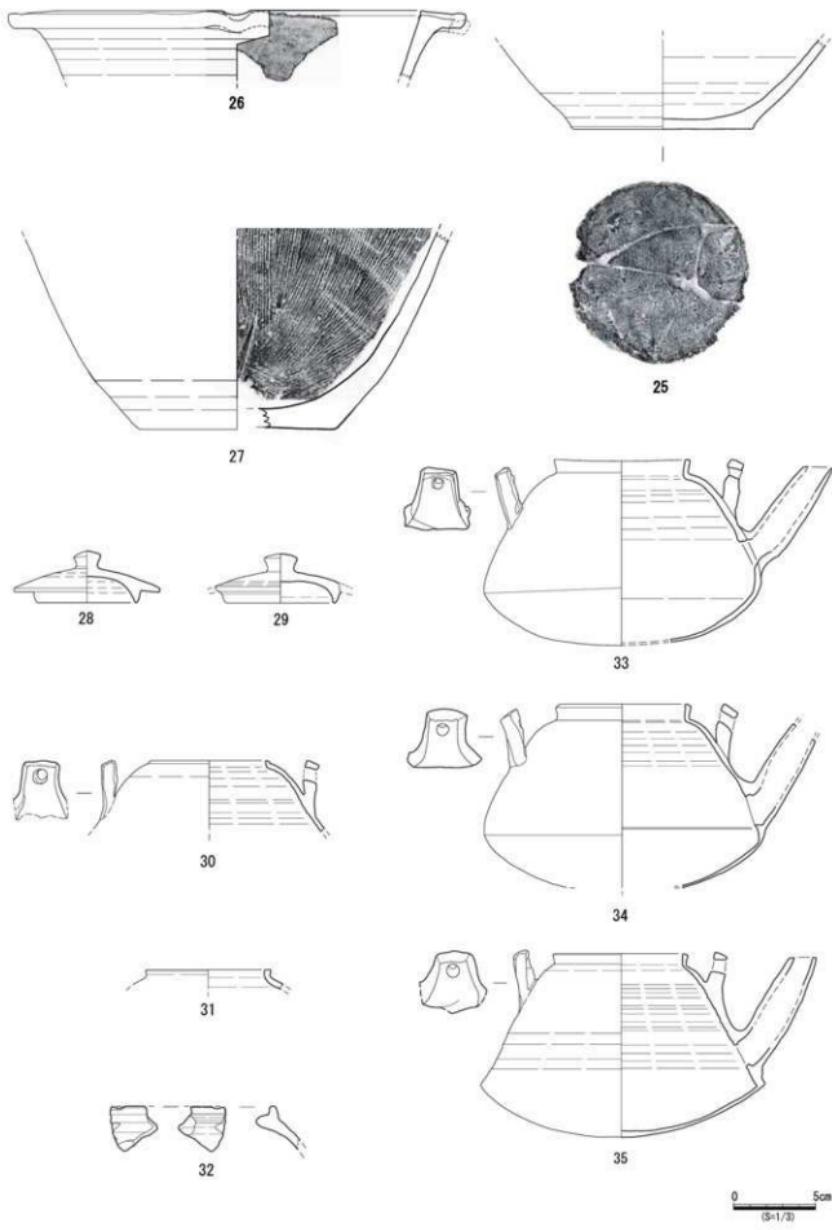


23



0  
(5=1/3) 5cm

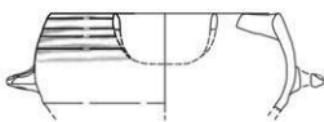
第41図 アカムヌー3 羽釜（16～17）、鉢（18～24）



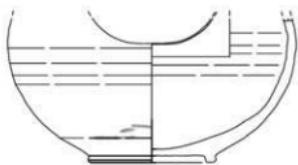
第42図 アカムヌー4 鉢(25)、擂鉢(26・27)、急須蓋(28・29)、急須(30～35)



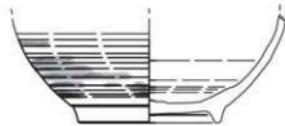
36



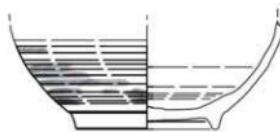
37



38



39



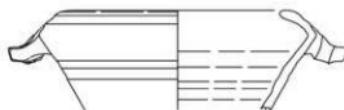
40

0 5cm  
(3=1/3)

第43図 アカムヌー5 火炉



|



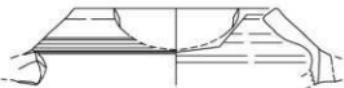
41



|



44



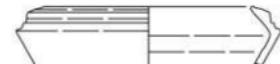
42



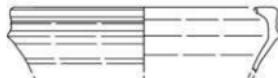
45



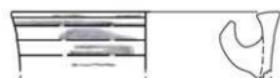
43



46



47



48



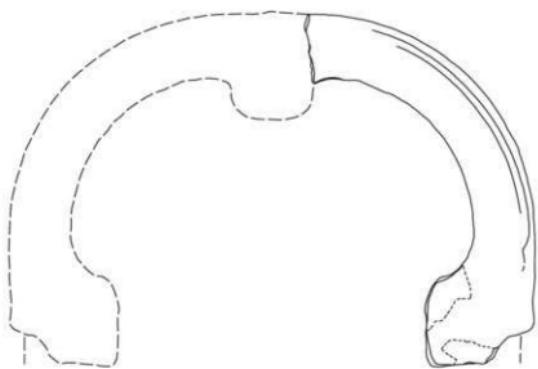
49

0  
(S=1/3) 5cm

第44図 アカムヌー6 火炉

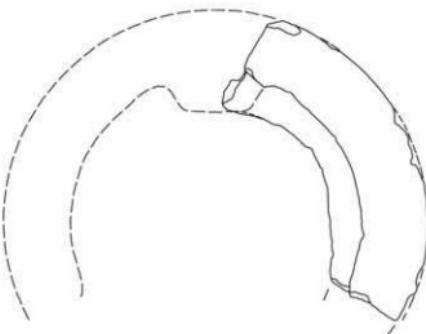
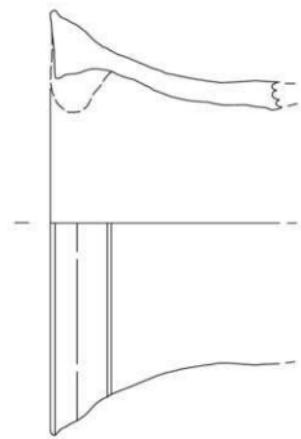
5cm  
0 (5:1/3)

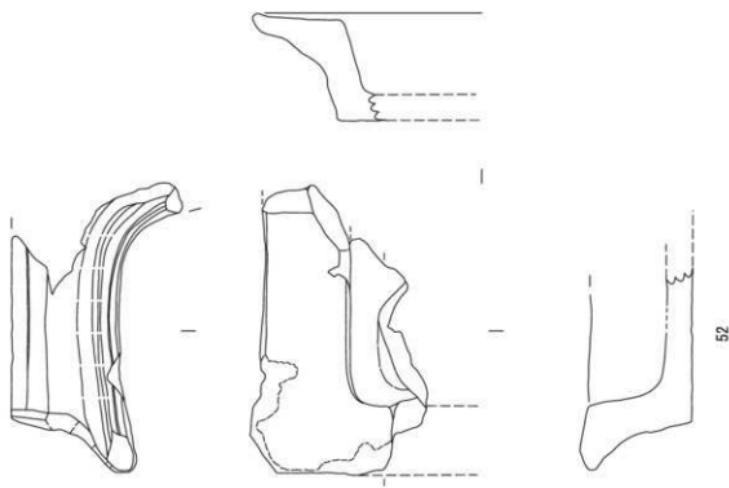
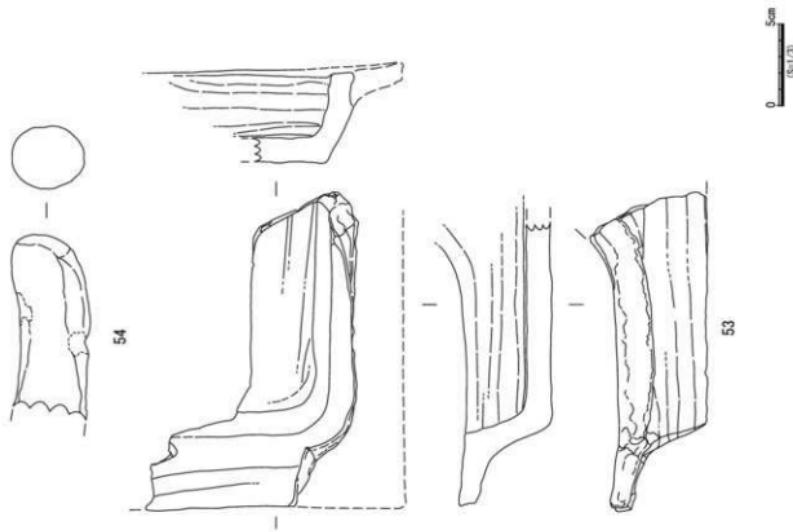
51



第45図 アカラヌ—7 火打

50





第46図 アカムヌー8 火炉戸(52・53)、不明(54)

#### 4. 沖縄産瓦質土器

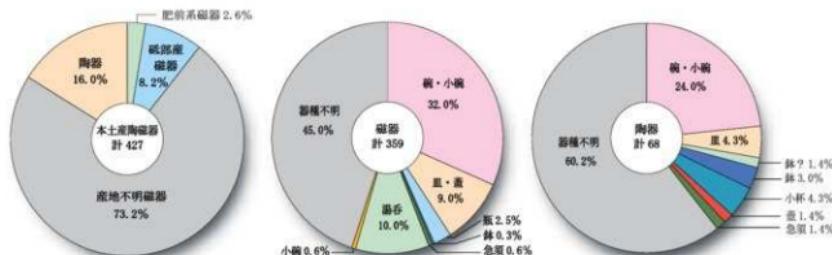
本土産の瓦質土器とは異なるものの、器形や混入物からアカムヌーにも属さないものを扱った。出土数は5点である。第48図1は、菊花文が施される本土系の瓦質土器であり、北部九州地域に影響を受けている可能性が考えられる（瀬戸2004a・b）。ただし、首里城跡御内原西地区における胎土分析の成果から（山本・上田・矢作・石岡2008）、本土産の瓦質土器ではないことを想定してここで扱った。分析の結果、沖縄南部の土が使用された可能性が考えられる（第IV章参照）。同2は、県内でしばしば出土する植木鉢の類と思われる。同3は蓋の撮みである。沖縄産無釉陶器の可能性もあるが、器形や色調などを勘案して本項で扱った。分析の結果、沖縄産無釉陶器やアカムヌーと同様の土が使用されている可能性が考えられる（第IV章参照）。

#### 5. 本土産陶磁器

磁器359点・陶器68点、合計427点が出土した。近代以降の遺物が主体で、器種は碗及び小碗が多い（第47図）。産地の特定できないものが殆どであるが、磁器は砥部産が多く、産地不明のものを含めて印判染付が多く出土した。表採を含めて約63%が遺構外からの出土である（第12表）。

第12表 本土産陶磁器集計表

分類	件数	遺構												合計
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
本土産	359	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	359
海外産	68	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	68
その他	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計	427	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	427



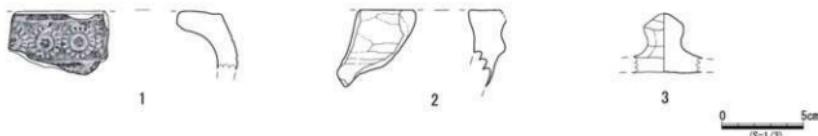
第47図 本土産陶磁器の出土割合

第13表 沖縄産瓦質土器観察一覧

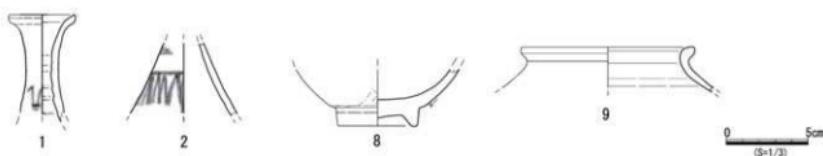
標本番号 国版番号	器種	部位	法量	器色	素地	観察事項	出土地
第47回 国版47	火鉢	口縁部	—	内外 淡褐色	胎土分析対象資料。 褐色灰土・淡褐色。 黒色砂粒・白色砂粒・青母・赤色砂子。	ナゲ調整。口縁は直口気泡に起き上がる。口唇平坦。口縁外側を肥厚させ、内面もやや肥厚させる。口縁外面の肥厚部分の下位には凹面の肥厚部分がある。この2つを別に起きたものか4枚の粘土帯を貼付した後にコナゲによって2枚の肥厚部分を表させたものか明確ではない。	南ミンレキ3~4層
	鉢	口縁部	—	内外 淡褐色	褐色灰土。 黒色砂粒・白色砂粒・青母。	ナゲ調整。口縁は直口気泡に起き上がる。口唇平坦。口縁外側を肥厚させ、内面もやや肥厚させる。口縁外面の肥厚部分の下位には凹面の肥厚部分がある。この2つを別に起きたものか4枚の粘土帯を貼付した後にコナゲによって2枚の肥厚部分を表させたものか明確ではない。	L14~15 1b 南ミンレキ1層
	蓋	縁み	縦径 2.4	内外 淡灰色	胎土分析対象資料。 褐色灰土。 黒色砂粒・白色砂粒・青母。	ナゲ調整。笠形の縁み部分。胎土分析の結果、沖縄産無鉛陶器やアカムタード同様の土が使用された可能性が示唆されている(第五章参照)。このことから、井関産無鉛陶器の可能性も考えられる。	不明

第14表 本土産陶磁器観察一覧

標本番号 国版番号	器種	分類	部位	口径 直径	輪	素地	產地	観察事項	出土地
第49回 国版48	瓶	染付	口縁部	3.9 —	青白色 密度は細かい。	肥前	内面成形痕明顯。瓶底下位に網目文と2条の横模様を施す。17cm。	南北ミンレキ	
	瓶	染付	肩部	—	青白色 密度は細かい。	肥前	口縁外側に1条の横模様。その下位に網目文を施す。肩部上位にも2条の横模様と僅かに網目文が施される。17cm。	K13 1b層	
	碗	印判手	口～底部	11.7 4.8	青白色 密度は細かい。	磁州	口縁直口。厚底覆り。外表面は馬蹄形の地文に鶴文や草花文、高台盤に通和文を施す。	レキ光埴部No.1 1層	
	碗	印判手	口～腰部	7.2 —	青白色 密度は細かい。	磁州	口縁外側。腰部は丸足を帯びる。厚底覆り。外表面は菊花文や通和文を施す。内面は施用するやうな模様が施す。	北ミンレキ2層	
	豆	印判手	口～底部	16.0 8.3	青白色 密度は細かい。	磁州	口縁直口。高台低い。厚底覆り。外表面は鶴文や施す。器高8.3cm。	南北ミンレキ	
	盖香?	印判手	口縁部	4.7 —	青白色 密度は細かい。	磁州	口縁直口。口外(内面口唇下位1.8cmまで輪模様)、脚輪軸。草花文など施す。	レキ光埴部No.1 1層	
	碗	印判手	口～腰部	7.8 —	青白色 密度は細かい。	不明	口縁直口。ゴム利。外表面は草花文や輪模様を施す。	未採	
	碗	—	底部	— 4.9	銅線繪 淡黃色。	肥前	腰付断面は台形状を呈し、外底面中央はやや突起する。底成不規で斜紋。	レキ光埴部No.1 2層	
	豆	—	口縁部	10.0 —	褐色系 赤色砂粒多く含み粗い。	備摩系	内面底から輪模様残る。口先、口縁外側や丸柱を寄せて肥厚する。口唇吉状。器高10.3~4.4cm。	南北ミンレキ3~4層	
	鉢?	—	(底付付 合)	—	較机輪 淡褐色。	備摩系	同個体は底付付合出士。	南北ミンレキ	



第48図 沖縄産瓦質土器



第49図 本土産陶磁器

## 6. その他の近世～現代遺物

ここでは、これまでに報告したもの以外の資料を一括して扱う。主な遺物は、円盤状製品・煙管・簪・古銭である。なお、瓦は247点得られており、表採を含めて約81%が遺構外からの出土である(第15表)。残りの良いものはないため、図や写真は割愛した。高麗瓦は次年度の報告を予定している。

### 陶製置物の類(図版49)

置物や装飾品の類をここに整理した。出土点数は6点で、全形の窺える資料はないが、無軸陶器の獅子像や、焼成不良の典型的なアカムヌーなどが得られている。

### 円盤状製品(第50図)

33点が出土した。沖縄産の施釉陶器や無釉陶器、瓦などを転用したものが得られており、擂鉢を含めた無釉陶器で作られたものが全体の約82%を占めて最も多い。

### ピース(第51図14)

ガラス製の資料が1点得られている。M12グリッドIIa層からの出土で、直径0.8cm、孔径0.3cm、厚さ0.5cmで、重量0.4gを測る。

### 煙管(第51図15～22)

9点の出土で、残りの良い8点を図化した。陶器製や真鍮製のものが主に得られているが、中には石製や木製と思われる資料も出土した。

### 簪(第51図23～25)

4点の出土で、比較的残りの良い3点を図化したが、完形資料は得られていない。

### 古銭(第51図26～31)

6点出土した。概ね全形を残す資料であるが、全て状態が悪く、有文・無文の判別もできなかった。

第15表 赤瓦集計表

出土位置・層位	種類	丸瓦				不明	合計
		玉縁片	五縁 欠縁片	両部	両部		
表採	a	1	2	5	21	5	34
I	b	1	2	6	4	14	41
	a-b	1	1	1	1	8	42
a～IIa	a	1	1	1	1	2	109
b～IIa	a	1	1	1	1	2	109
II	a					1	2
	b					1	2
	a～I			1		1	19
南浦状織紋	1縫			1		1	2
	2縫			1		1	2
	3縫			1		1	3
	3～4縫			1		1	3
南北横状織紋	1縫	1	1	6	1	3	11
南北横状織紋	2縫	1	1	6	1	3	11
溝	1	1	1	1	1	1	4
	2	1	1	1	1	1	3
レキ	No1	1縫	1	4	1	6	11
充填部	No2	2縫	1	2	1	5	11
瓦	No1～2～織紋内			1		1	3
合計		3	6	14	57	24	143
			23		81	143	247

第16表 円盤状製品集計表

出土位置・層位	種類	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器		瓦	合計
			擂鉢	その他		
I	a			1	1	6
	a～b	2		3	5	
II	a		1		1	4
	a～I	1	2		3	3
南浦状織紋	2縫		1		1	1
南北横状織紋	織紋内	1	6	1	7	7
	1縫	1	5	1	7	
充填部	No1	1～2縫	1	1	1	12
	2縫		4		4	
	No2	1縫	1	1	1	3
瓦	No1～2～活	1	1	1	2	
合計		5	2	25	1	33

第17表 陶製置物の類観察一覧

辨団番号 図版番号	種類	部位	器色	素地	観察事項	出土地
図版 4 9	1 不明	不明	明褐色	軟質。淡褐色。 赤色粒子・白色砂粒・ 雲母・石灰質砂粒。	ナデ調整。器壁約1.0cmの器面に装飾を貼付したもの。天地不明。 アカムヌーに萬字資料があるが、便宜上ここで扱った。	レキ充填部No.1~2
	2 獅子像	頭部	橙褐色	硬質。橙褐色。 白色砂粒・雲母。	ナデ調整。埴土は細かく、3~5mmと別個体。内面は指の押正による成形痕が著しい。白化粧土を貼付する。素地の密度などからアカムヌーに似るが、流入物が異なる。	ミゾ3~3層
	3~5 獅子像	頭部	橙褐色	硬質。橙褐色。 黒色砂粒・白色砂粒。	同一個体。石灰質砂粒を多量に含み、粗い。獅子像の頭部と思われるが、出土資料が少ないので具体的な部位は判然としない。やや大型になるとと思われる。無釉陶器。	南北ミゾレキ 北ミゾレキ2層 レキ充填部No.2.5層

第18表 円盤状製品観察一覧

辨団番号 図版番号	分類		器色／輪調	素地	法量			観察事項	出土地
	種類	器種			長径	短径	厚さ		
第50回 図版 50	6 神無	垂か慶?	外面 灰褐色 内面 明茶褐色	暗赤褐色。 黑色・白色砂粒。	2.7	2.4	0.9	9.4	袋物の破片を内側から打ち欠いて成形。作りはやや難。
	7 神無	垂か慶?	外面 灰褐色 内面 墓赤褐色	暗赤褐色。黑色・ 白色砂粒・雲母。	3.6	3.1	1.2	19.7	袋物の破片を内側から打ち欠いて成形。作りはやや難。
	8 神無	垂か慶?	外面 圖々茶褐色 内面 明茶褐色	明茶褐色。 黑色・白色砂粒。	4.5	4.3	0.9	24.6	袋物の破片を内側から打ち欠いて成形。外側は均整だが内側から打ち欠かれるが、外側は歪となる。
	9 神無	墻鉢	内外 灰褐色	暗赤褐色。 黑色・白色砂粒・ 赤色粒子。	6.8	6.0	1.2 ~1.6	81.2	鉢身(1 or II類?)の底部付近を転用したもの。内側から打ち欠いて成形。作りは難。
	10 瓦	—	内外 明褐色	明褐色。 黑色・白色砂粒・ 赤色粒子・雲母。	4.2	4.0	1.2	22.4	赤瓦を転用したものの、作りは難。内面の一部と外面が大きく割れて歪となる。
	11 神施	碗か皿	内外 灰白色 (光沢あり)	浅黃褐色。 黑色・白色砂粒。	7.0	7.0	2.0	81.8	白化粧を施す寸幅(神施皿類)の高台を転用したものの、垂付は輪削ぎされる。貰入あり。内側からやや難に打ち欠いて成形。
	12 神施	小瓶	外面 黒褐色 内面 (光沢あり)	明褐色。 黑色・白色砂粒。	4.9	4.6	1.6	35.7	黒褐色の輪と白化粧を掛け分けた小瓶(神施II類)の高台を転用したものの、垂付は輪削ぎされる。内底面円錐状。内側から難に打ち欠いて成形。
	13 神施	小瓶	内外 灰白色 (光沢あり)	明褐色。 黑色・白色砂粒。	3.9	4.1	1.4	21.8	白化粧を施す寸幅(神施皿類)で、見込みに花文を施す高台を転用したものの、垂付は輪削ぎされる。貰入あり。内側からやや難に打ち欠いて成形。

第19表 煙管観察一覧

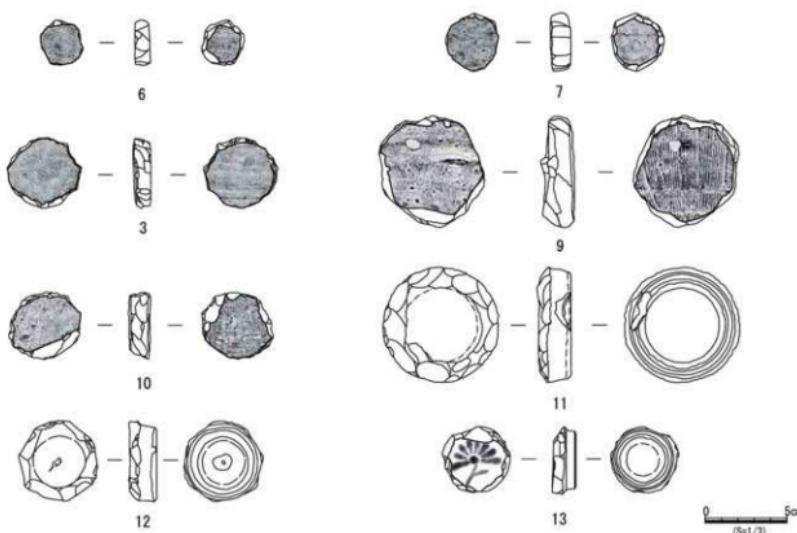
辨団番号 図版番号	部位	材質	法量				観察事項	出土地	
			全民	火直外径 火直内径	小口外径 小口内径	口付外径 口付内径			
第51回 図版 50	15 離首	石製?	—	1.9x?	(1.0x1.0) 1.1x?	—	2.0	大半を欠損する。的確なないし筒状を呈す離首。大體にはスヌガ付着する。	ミゾ1層
	16 離首	陶製	2.7	1.4x1.3 1.1x1.0	(1.2x1.2) (0.9x0.9)	—	3.2	火皿上の圓形方形状。肩は丸味を帯びる。全体に透明釉を施すが、小口は磨削する。	O15 I a層
	17 離首	陶製	—	(1.2x1.2)	—	—	3.9	火皿の大部分が破損し、小口が欠損する。首部は約0.1cm間隔で壊落される。	K12 I a~b層
	18 吸口	木製?	2.6	—	1.3x1.3 1.0x0.9 0.9x0.9	0.5x0.5 0.2x0.2	2.3	完形。口付がやや肥厚して吸口は形成される。また、肩は丸味を帯びる。緑色系の彩色を施す。	南ミゾレキ1層
	19 吸口	陶製	—	(1.4x1.4) (1.1x1.1)	—	—	1.3	大半が欠損し、口付の形状は不明。全体に透明釉を施すが、小口は磨削する。	L12~13 II a層
	20 離首	真鍮製	3.9	0.9x0.9 0.8x0.8	1.1x0.9 1.0x0.8	—	4.0	完形。小口から纏ぎ目が若干干渉する。上面はやや慣れ、断面は捨円状となる。	O14 I b層
	21 離首	真鍮製	—	—	1.1x1.1 1.0x0.9	—	11.3	崩反して破損し、火直欠損。小口に纏ぎ目でやや裂ける。上面は中央でやや慣れれる。	I1レ I a~b層
	22 離首	真鍮製	—	—	1.0x1.0 0.8x0.8	—	3.3	崩反して破損し、火直欠損。首部は比較的の粗い、断面円形状。	O14 I b層

第20表 簪觀察一覧

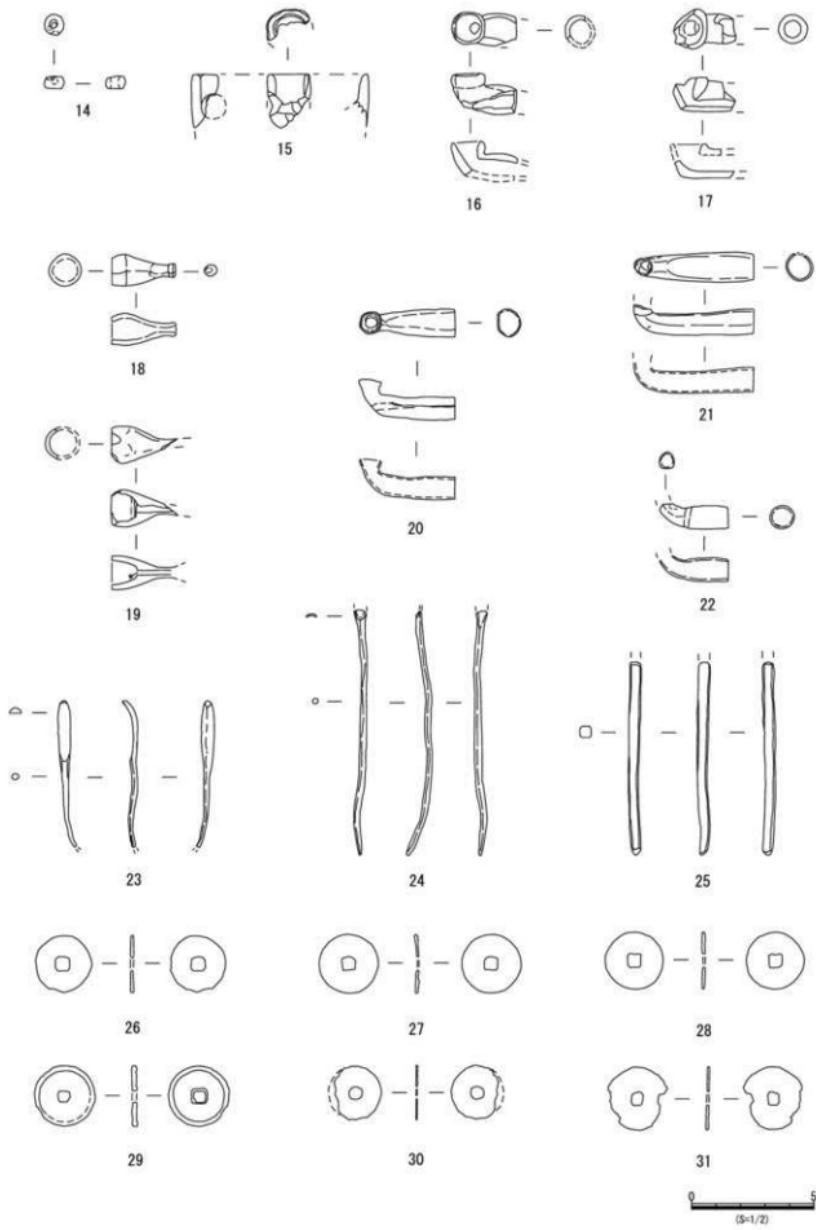
辨別番号 図版番号	種類	部位	カブ形状	断面形		法量			観察事項	出土地
				カブ	竿	カブ大きさ	カブ厚さ	竿厚さ		
第5 圖 版 5 9	23	副簪	カブ 耳搖き状	半月状	円形状	2.5×0.5	0.2	0.1~0.2	2.3	壺に蛇行する。 L13 II b層
	24	副簪	カブ下端~竿	—	—	2.5×0.5	—	0.2~0.3	4.8	竿は先細りとなる。壺に蛇行する。 レキ充填部 No.1 1層
	25	本簪	竿	—	—	方形状	—	—	0.4~0.5	8.0 竿は若干先太りとなる。 南ミノレキ 1層

第21表 古銭觀察一覧

辨別番号 図版番号	法量				観察事項	出土地
	銭径	孔径	銭厚	重量		
第5 圖 版 5 9	27	2.3×2.3	0.6×0.6	0.1	2.5 サビ等によって有文・無文の別不明。	N16 II a層
	28	2.4×2.4	0.5×0.5	0.1	2.6 サビ等によって有文・無文の別不明。	南ミノレキ 2層
	29	2.4×2.3	0.5×0.5	0.1	3.3 サビ等によって有文。判読不可。	N15 I b層
	30	2.5×2.5	0.5×0.5	0.2	3.1 サビ等によって有文か。判読不可。	M14 No.88 直上 (次年度報告予定)
	31	2.2×2.1	0.5×0.5	0.1	0.8 サビ等によって有文・無文の別不明。状態悪い。表面剥離。	南ミノレキ 2層
	26	2.6×?	0.5×0.5	0.1	1.5 サビ等によって有文・無文の別不明。状態悪い。	M14 No.37 3層 (次年度報告予定)



第50図 その他の遺物1 円盤状製品



第51図 その他の遺物2 ピース(14)、煙管(15～22)、簪(23～25)、古銭(26～31)

## 第IV章 自然科学分析調査の成果

### はじめに

宜野湾市に所在する嘉数トゥンヤマ遺跡では、これまでの発掘調査により、近世とされる焼物が出土している。これらは、素焼きのアカムヌーと無釉陶器および施釉陶器などに分類され、いずれも沖縄本島において生産されたものと考えられており、特に陶器は、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器と称されている。本報告では、嘉数トゥンヤマ遺跡から出土したアカムヌー、沖縄産と想定された瓦質土器、沖縄産無釉陶器および沖縄産施釉陶器の各焼物を対象とし、その材質（胎土）について、自然科学の手法を応用した分析を行い、その特性を把握する。ここでは、その特性として、胎土中に認められた鉱物片や岩石片の組成を用い、それらの由来する地質学的背景を推定し、周辺地域や沖縄本島の地質との比較を行うことにより、特に製作地域に関わる検討をする。

### 1. 試料

試料は、嘉数トゥンヤマ遺跡から出土した近世の焼物の破片 31 点である。内訳は、アカムヌーが 8 点と沖縄産と思われる瓦質土器 2 点、沖縄産無釉陶器 10 点と、沖縄産施釉陶器が 11 点である。各試料の器種や発掘調査所見による分類等は、一覧にして第 22 表に示す。

### 2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光 X 線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料の中でもアカムヌーや沖縄産無釉陶器のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる焼物の分析では、鉱物組成や岩片組成を求める方法の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。その方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類などを捉えることが可能であり、得られる情報が多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか (1999) の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、製作技法の違いを見出すことができるため、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での製作事情の解析も可能である。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

### 3. 結果

薄片観察により計数した鉱物片および岩石片の粒径別の割合を第52図～第54図に示す。試料全体に共通して、胎土中の砂粒の主体は細砂径以下の石英である。また、石英に次いで多い砂粒として、斜長石の鉱物片を含む試料が多く、さらに試料によってはカリ長石を比較的多く含む胎土も認められる。これら3つの鉱物片以外の鉱物片や岩石片は、いずれの試料においても少量～微量である。しかし、胎土の由来となる地質を推定する場合には、少量～微量の鉱物片や岩石片の種類が指標となる。今回の試料では、鉱物片および岩石片の種類構成から、以下の胎土分類が設定できる。

第22表 胎土分析試料一覧および胎土分類

種類	器種	分類	図番号	胎土分類							
				I				II	III	IV	
				a	b	c	d			a	b
アカムヌー	鍋	II b類	12						■		
	火炉	I 類	36						■		
	火炉	II a類	41	■							
	火炉	V 類	50		■						
	急須	II 類	33	■							
	鉢	I b類	20	■							
	擂鉢	—	27	■							
	その他	筒状把手	54			■					
瓦質土器	火鉢	—	1						■		
	蓋	—	3	■						■	
沖縄産無釉陶器	壺	II a類	3		■						
	壺	IV 類	9						■		
	壺	III 類	6					■			
	甕	III 類	14					■			
	鉢	I a類	28	■							
	鉢	III 類	31					■			
	擂鉢	I a類	16					■			
	擂鉢	IV 類	24	■							
	火炉	—	37			■					
	急須	—	36	■							
	急須	—	36								
	急須	—	36								
沖縄産施釉陶器	碗	I 類灰釉	4							■	
	碗	I 類鉄釉	12							■	
	碗	I 類黒釉	16							■	
	碗	III類白化粧	19							■	
	碗	III類白化粧	26							■	
	鉢	I 類	51								■
	鉢	II 類	49								■
	急須	I 類	63								
	香炉	I 類鉄釉	70							■	
	鍋	I 類鉄釉	81							■	
	鍋	II 類白化粧	85								

I類: チャートや頁岩および砂岩の堆積岩類が比較的多く、これに千枚岩あるいは粘板岩といった変成岩類を伴う組成。石英および長石類以外の鉱物片では、角閃石や黒雲母を含むものが多い。なお、I類の試料によっては、他に伴う鉱物片や岩石片の種類あるいは割合が異なるため、以下のように細分した。

I a類: I類の典型的な組成とする。

I b類: 流紋岩・ディサイトの岩石片を少量含む。

I c類: 凝灰岩および花崗岩類の岩石片を少量含む。また、カリ長石の鉱物片が多く、斜長石の鉱物片が微量であることも本類の特徴である。

I d類: 岩石片の種類構成はI a類と同様であるが、石英・カリ長石・斜長石の3鉱物片の量比が近似する特徴により分類した。

II類: 岩石片はチャートや頁岩など堆積岩類のみであり、他に多結晶石英を伴う。また、鉱物片ではカリ長石がほとんど含まれない。

III類: 岩石片はチャートと凝灰岩および多結晶石英から構成され、変成岩類は含まれない。なお鉱物片は石英が突出して多く、微量のカリ長石と斜長石を含む。

IV類: 岩石片はチャートおよび多結晶石英のみしか含まれない。鉱物片は石英が多いことと微量の黒雲母を伴うことは共通するが、斜長石を微量～少量伴う試料と斜長石を含まない試料とに細分される。ここでは前者をIV a類、後者をIV b類とする。また、IV類の特徴として、黒雲母が非晶質化していることとムライトの晶出が顕微鏡下で認められることがあげられる。これらの特徴は、焼成温度が1000°Cを超える高温であったことを示している。

各試料の胎土分類は、試料一覧の第22表に併記する。アカムヌー試料8点のうち、4点がI a類に分類され、2点がII類に分類された。他にI b類とI c類が各1点ずつあった。沖縄産無釉陶器でもI a類が4点と最も多く、次いでI d類が3点あり、他にII類が2点とI c類が1点であった。沖縄産施釉陶器は全点ともにIV類である。そのうちIV a類が8点と多く、IV b類は3点であった。上述したようにIV類は1000°Cを超える高温焼成を示す胎土であり、沖縄産施釉陶器が、アカムヌーや沖縄産無釉陶器とは焼成条件が異なっていたことを示唆している。

#### 4. 考察

今回の試料では、大きく4種類の胎土が分類された。分類の基準とした岩石片の種類構成は、焼物の原材料である砂や粘土の採取地の地質学的背景を示している。したがって、今回の試料からは、地質学的背景の異なる4つの地域の原材料採取地が想定される。

I類については、千枚岩および粘板岩の変成岩類が、その由来する地質の有効な指標となる。千枚岩および粘板岩は、沖縄本島を構成する主要な地質の一つである名護層の主体をなす岩石である。名護層は、中生代白亜紀の形成とされ、沖縄本島の北部から中部（恩納村付近）の西岸沿いに広く分布している（木崎編, 1985）。一方、I類の主たる構成要素である堆積岩類は、形成年代は地域により異なるが、沖縄本島全域に分布している。なお、チャートについては、沖縄本島における岩石としての分布は、本部半島にはほぼ限定されるが、砂粒としてのチャートは沖縄本島南部の砂岩中に含まれている。実際に氏家・兼子（2006）は、沖縄本島中・南部に広く分布する新第三紀の地層である島尻層群を構成する中城砂岩部層の砂岩碎屑物中にチャートを確認している。いずれにしても、変成岩類を含む砂あるいは粘土の分布は、名護層の分布域内であると考えられるから、I類の原材料採取地は、沖縄本島北部から中部までの西岸沿いという地域を推定す

ることができる。

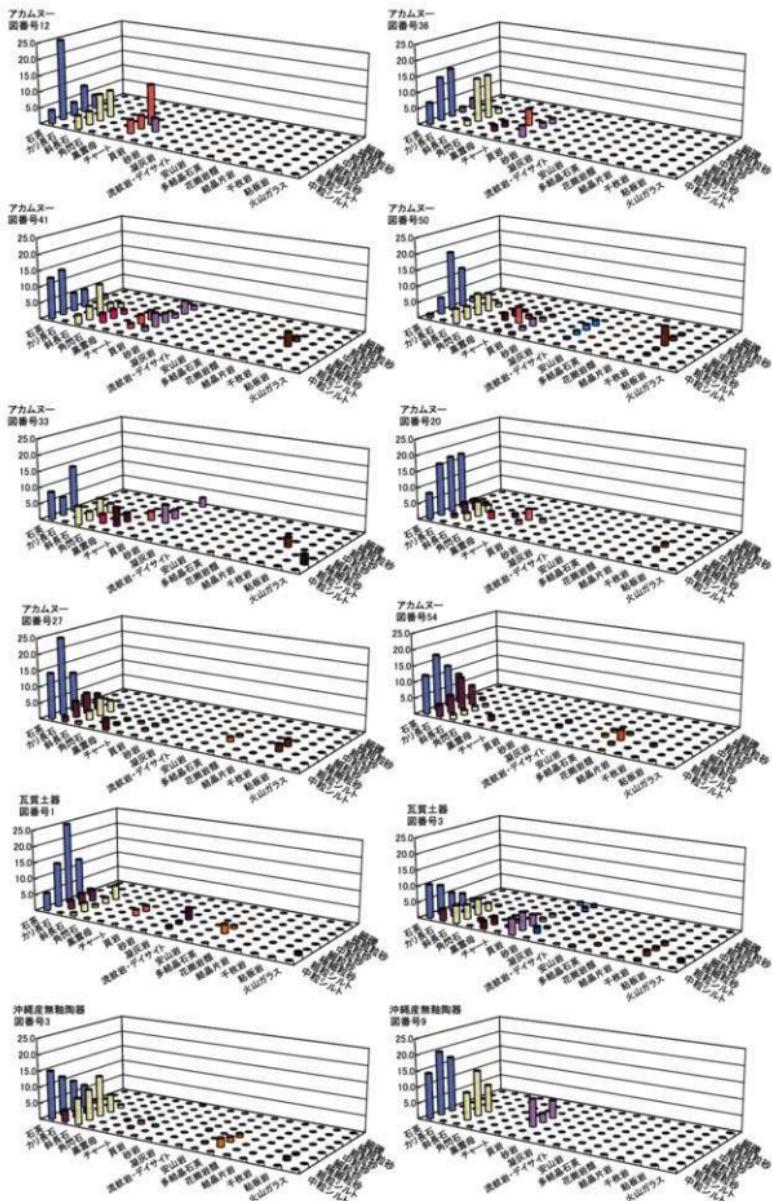
なお、I類を細分類した岩石片のうち、Ib類の特徴とした流紋岩・デイサイトは、おそらく名護層分布域に貫入する火山岩の岩脈に由来すると考えられる。岩脈の分布域は名護市から大宜味村までの西岸沿いに及んでおり、Ib類の地域性もこの範囲に入る可能性がある。Ic類は凝灰岩および花崗岩類を特徴とし、またカリ長石の多いことも特徴となる。これらのうち、凝灰岩は基質がガラス質で比較的新鮮であることから、新第三紀～第四紀の凝灰岩層に由来すると考えられる。沖縄本島では、新第三紀中新世～第四紀更新世の堆積岩からなる島尻層群中に多数の凝灰岩層が挟まれていており、Ic類の凝灰岩もこれに由来する可能性がある。ただし、島尻層群の分布は沖縄本島南部であり、上述した名護層の分布域よりも南側になる。したがって、Ic類の地域性の可能性としては、名護層の南限と島尻層群の北限の接する読谷村～沖縄市～うるま市付近を想定することができる。なお、Ic類の花崗岩類については、沖縄本島における広域の分布は認められていない。胎土中で認められた花崗岩類の岩石片は粒径が小さいことと円磨された外形および微量であることなどから、島尻層群を構成する堆積岩中に含まれる大陸起源の花崗岩類に由来する碎屑物である可能性がある。さらにId類については、その特徴としたカリ長石の由来は花崗岩類あるいは流紋岩類などの岩石が考えられる。Id類に分類した沖縄産無釉陶器図番号6には花崗岩類の岩石片が認められていることを考慮すれば、カリ長石も花崗岩類に由来する可能性がある。その場合、花崗岩類については、上述したIc類と同様の事情が考えられることから、Id類の地域性についてもIc類とほぼ同様に考えることができる。

II類の地域性については、その特徴である堆積岩類の分布は沖縄本島全域に及び、I類で地域を示す指標となつた変成岩類のような岩石がないことから、現時点では特定はできない。一方、III類については、その特徴とした凝灰岩が、上述したIc類の凝灰岩と同様の由来であると考えられることから、島尻層群の分布する沖縄本島南部の地域性が想定される。

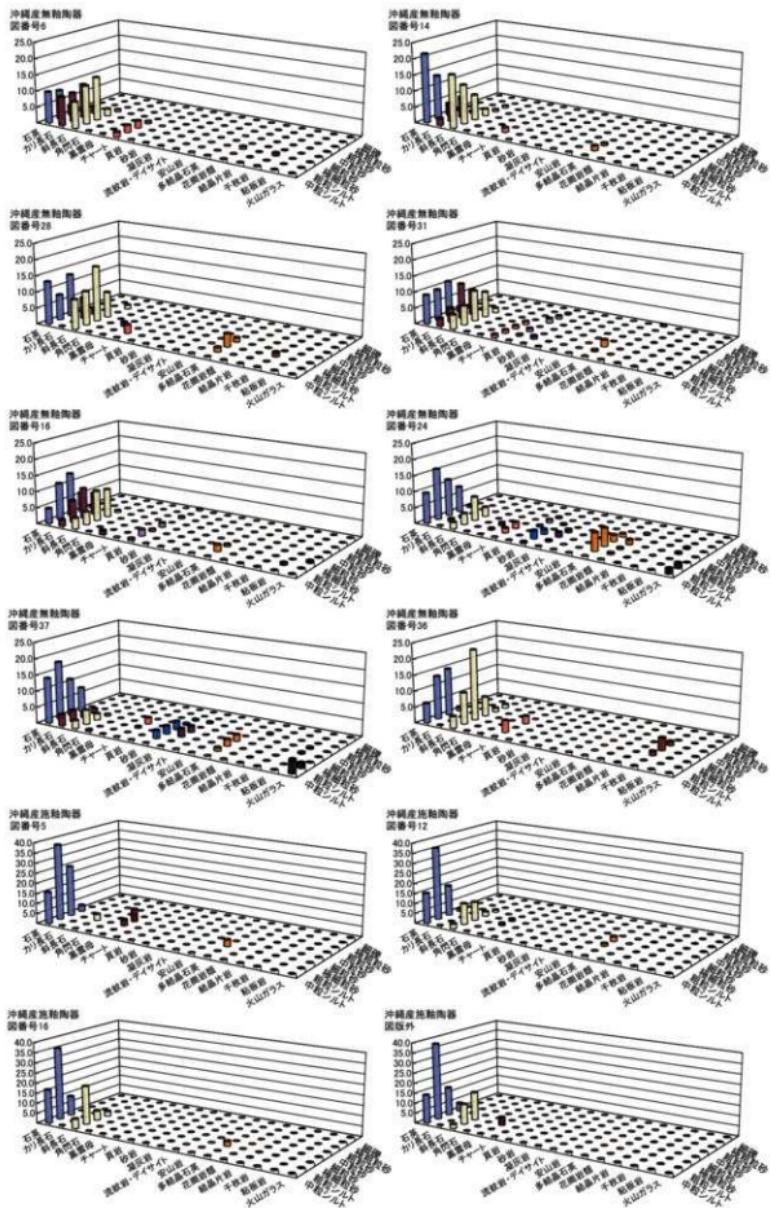
IV類は、施釉陶器に対応する胎土である。IV類の特徴は、鉱物片や岩石片の種類よりも高温焼成の状況が確認されることで他の胎土とは区別される。このような高温焼成の胎土の場合、胎土中の鉱物片や岩石片が変質や溶失を起こしていることもあることから、焼成前の素地土の鉱物片あるいは岩石片の種類構成は、IV類で認められたそれとは異なる可能性もある。現時点では、IV類には明らかに沖縄本島には産しないというような鉱物あるいは岩石は認められていないため、沖縄本島産ということに矛盾はない。今後、このような高温焼成の焼物については、蛍光X線分析などを用いた化学組成による検討も加える必要があると考える。

#### 引用文献

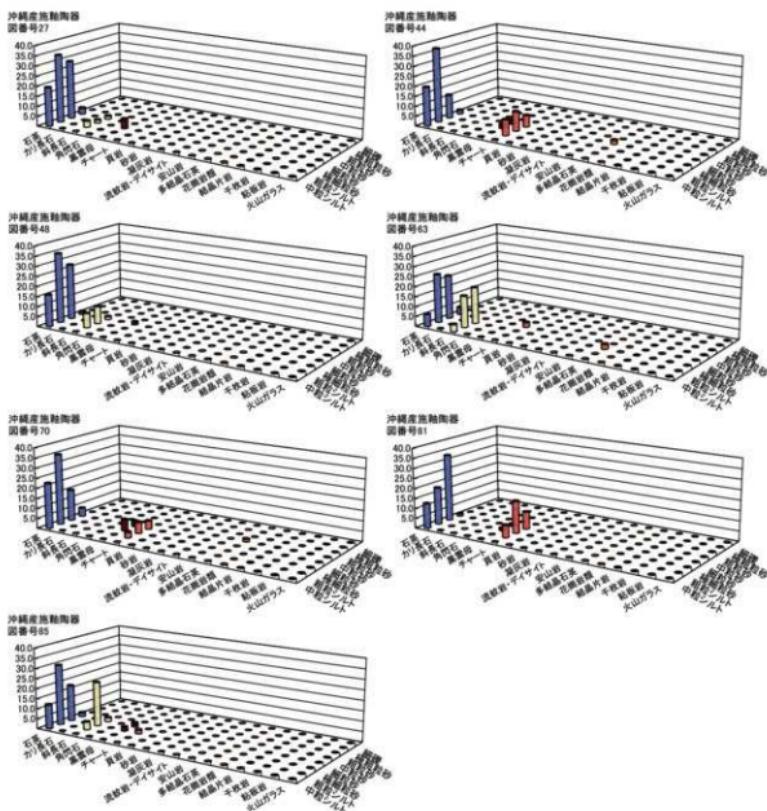
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—,日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.
- 木崎甲子郎編著,1985,琉球弧の地質誌,沖縄タイムス社,278p.
- 氏家 宏・兼子尚知,2006,那覇及び沖縄市南部地域の地質・地域地質研究報告(5万分の1図幅),産総研地質調査総合センター,48p.



第52図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%)



第53図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%)



第 54 図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%)

## 第V章 結語

嘉数トウンヤマ遺跡は宜野湾市嘉数の聖地「嘉数トウンヤマ」といわれる丘陵の裾に立地している。今回の調査地点は「嘉数トウン」や「地頭火の神」の祠が隣接し、遺跡の南側には近世來の地割制集落である嘉数区が位置していることから、グスク時代から近世集落の形成に係る成果が期待された。しかし、同地は耕作や重機による掘削を受けており、從来の包含層は消失し遺構は攪乱を免れた地山上に残るのみであった。

発掘調査により確認された遺構は溝状礫敷遺構、溝状遺構、土坑群などで、遺物はグスク時代から近代までの土器や陶磁器が得られている。特に溝状礫敷遺構の造成時に遺構内に充填された沖縄製陶器は数量、器種、復元資料とも突出しており、近世末の村落における沖縄製陶器の組成を把握する上で重要な事例である。今回の報告書では近世以降の沖縄製陶器を中心に、関連する遺構を報告する。

**遺構** 沖縄製陶器が集中的に出土した遺構は北溝状礫敷遺構、南溝状礫敷遺構、レキ充填部No.1、レキ充填部No.2で、南溝状礫敷遺構には溝3が連結している。南・北溝状礫敷遺構の基本的構造は丘陵の傾斜軸を横に切り、並列して構築している。溝内には石灰岩礫と沖縄製陶器を充填している。両溝にはそれぞれに石灰岩基盤を掘削した土坑（レキ充填部No.1・No.2）が伴い、これにも礫と沖縄製陶器が充填されている。また、南溝状礫敷遺構には丘陵の傾斜に沿った溝3が連結している。礫・陶器の充填は溝上面が埋没しても溝内は礫と陶器の充填により隙間が多く水流を妨げない過濾機能がある。レキ充填部は排水樹、溝3は排水溝で、丘陵からの雨水を丘陵下の南・北溝状礫敷遺構で受けとめ、レキ充填部と溝3に排水する機能が考えられる。第3図の明治土地台帳付属地図の嘉数村全図には他の村にはほとんど見られない水路が多く記載されている。石灰岩堤を背後にす嘉数村は古くから丘陵からの雨水の管理に苦心しており、旧道沿いに排水路を設置し処置していたという。本調査区の西側の旧道沿いにも水路が記載されており、溝3もほぼ同位置にある。

**遺物** 近世以降の人工遺物は18666点が出土した。その約58%にあたる10887点をアカムヌーが占める。範囲確認調査で得られた資料を加えると、13943点である。これは、一遺跡からの出土量としては際立つて多いと言える。そして、今次調査では当該資料の約43%がレキ充填土坑No.1から出土した。その他の沖縄産陶器も当該土坑から多く得られており、その出土割合は本報告で扱った遺物の約37%に相当する。次いで、遺構では南北の溝状礫敷遺構からの出土量が多く、遺物の約19%にあたる。このうち、南溝状礫敷遺構からの出土量が北溝状礫敷遺構のそれを大きく上回る。なお、レキ充填土坑No.2での出土割合は、約3%に止まる。また、溝1～3における出土割合は全体でも約1%となっており、出土量は最も少ない。

当該遺跡のみならず、県内遺跡における出土状況からも目を見張る量が出土したアカムヌーは、鍋や急須の出土量が最も多い。中でも鍋は、様々な容量の資料が出土しており特徴的である。また、沖縄産陶器で最も特徴的な出土状況が窺えたものは擂鉢である。多様な種類が得られており、概ね安里進による編年に沿う変遷が認められる。これらはレキ充填土坑No.1で多く出土しているが、擂鉢が長年に亘って当該土坑に投棄されたとは言えない。これらは前述された目的で、一括投棄されたと考えるのが妥当である。

一般に、沖縄産施釉陶器は高温焼成に耐え得るように、無釉陶器やアカムヌーとは異なる陶土が使用されていることが知られるが、これは今回の胎土分析の結果からも示された。また、無釉陶器とアカムヌーの陶土は大きく異なるため、胎土分析でもその違いは明確ではない。そのため、両者を分ける基準は焼成の仕方と考えられる。そのため本報告では、焼成不良の無釉陶器と思われる資料も便宜的にアカムヌーとして整理したが、これについては今後検討が必要である。なお、胎土分析の目的の1つに、各器種における陶土の選別の有無を考慮したが、これについては大きな差を認めることはできなかった。

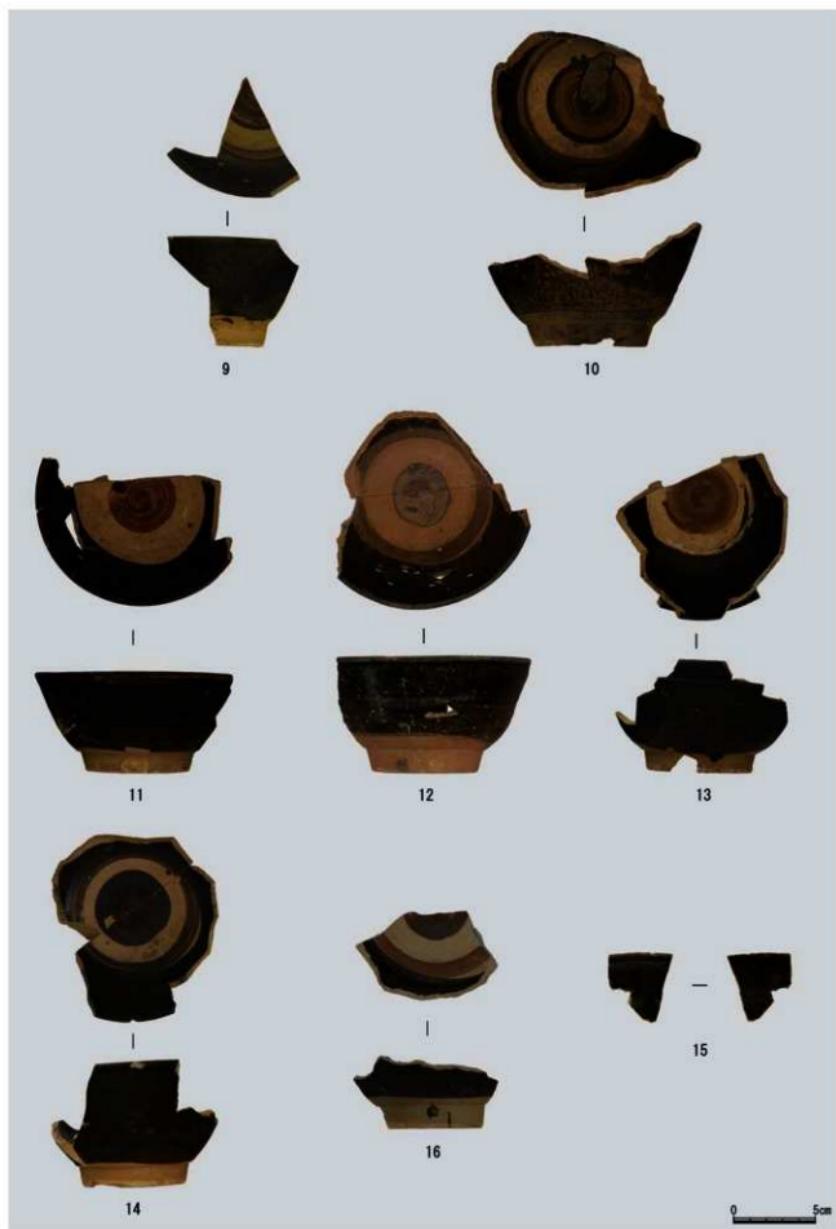
## 参考文献

- 安里 進・上原政昌・家田淳一 1987 「擂鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『あじまあ』  
(名護博物館紀要 3) 名護博物館
- 新垣 力 2000 「モデルとコピーの視点からみた窯業開始期の沖縄」『南東考古』第 19 号 沖縄考古学会
- 新垣 力 2002 「第 V 章 第 11 節 沖縄産無釉陶器」『首里城跡 - 繼世門周辺地区発掘調査報告書 -』  
(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 9 集) 新垣力編 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣 力 2002 「第 5 章 第 11 節 沖縄産無釉陶器」『首里城跡 - 城郭南側下地区発掘調査報告書 -』  
(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 19 集) 知念隆博・新垣力編 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 大城精徳 1983 「上焼」『沖縄大百科事典』中巻 (株)沖縄タイムス社
- 金城亀信 1995 「瓦質土器」『湧田古窯跡』II (沖縄県文化財調査報告書第 121 集) 沖縄県教育委員会
- 島袋まさ子 2004 「荒焼の呼称について - 陶工からの聞き取りをもとに - 」『壺屋焼物博物館紀要』  
第 5 号 那覇市立壺屋焼物博物館
- 下中直人編 1984 『やきもの事典』(株)平凡社
- 城間 肇ほか 2008 『嘉数トウンヤマ遺跡 I - 範囲確認調査報告書 -』(宜野湾市文化財調査報告書第 43 集) 城間肇編 宜野湾市教育委員会
- 瀬戸哲也 2004a 「沖縄出土の本土系瓦質土器について」『グスク文化を考える - 世界遺産国際シンポジウム 〈東アジアの城郭遺跡を比較して〉の記録 -』今帰仁村教育委員会
- 瀬戸哲也 2004b 「本土系瓦質土器の産地についての補論 - 北部九州の瓦質土器と比較して - 」『沖縄埋文研究』2 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 曾根信一 1983 「アカムヌー」『沖縄大百科事典』上巻 (株)沖縄タイムス社
- 知念隆博・新垣 力 2003 「第 IV 章 層序と遺構」「第 V 章 遺物」『御茶屋御殿跡 - 遺構確認調査報告書 -』  
(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 17 集) 知念隆博・新垣力編 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 宮城篤正 1983 「荒焼」『沖縄大百科事典』上巻 (株)沖縄タイムス社
- 山本正昭・上田圭一・矢作健二・石岡智武 2007 「首里城跡御内原西地区発掘調査出土瓦の胎土分析と  
その検証」沖縄県立埋蔵文化財センター

# 図 版



図版6 沖縄産施釉陶器1 碗

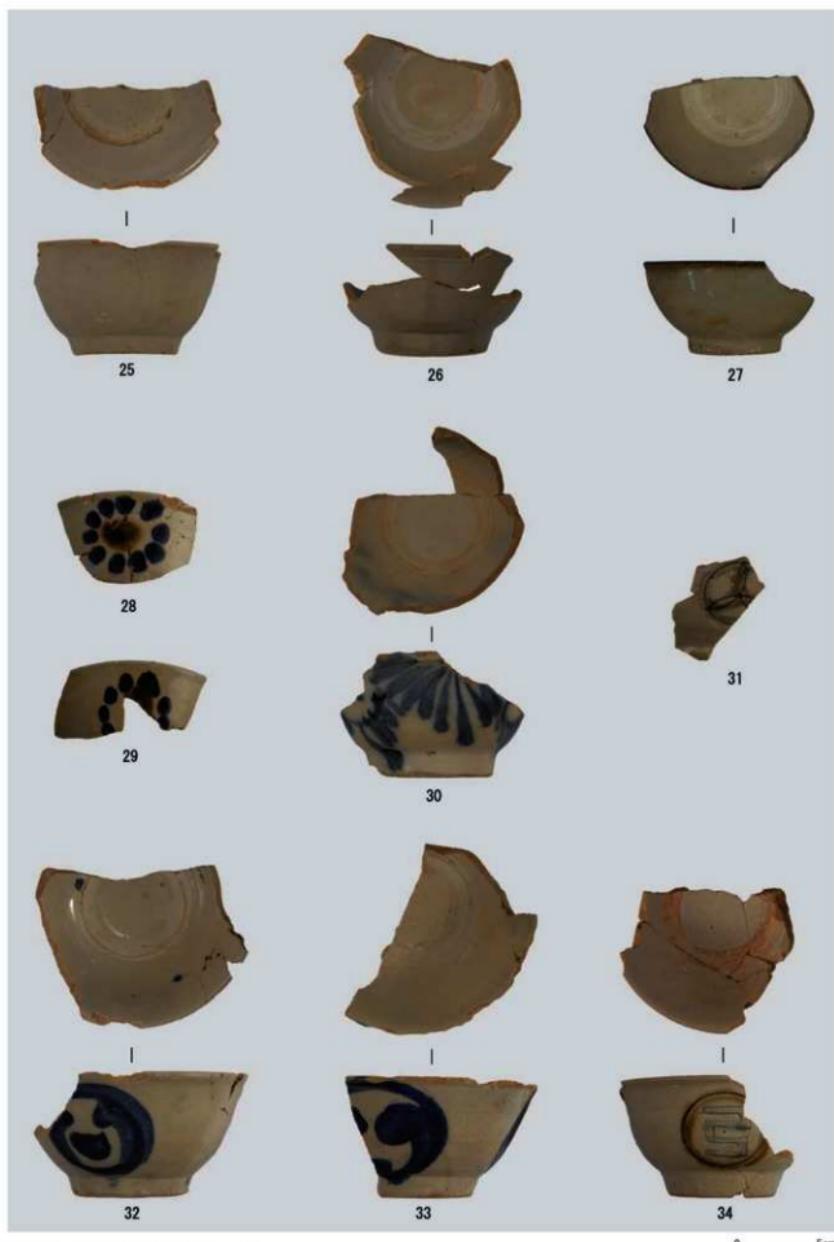


図版7 沖縄産施釉陶器2 碗



図版8 沖縄産施釉陶器3 碗

0 5cm



図版9 沖縄産施釉陶器4 碗

0 5cm



図版 10 沖縄産施釉陶器 5 小碗



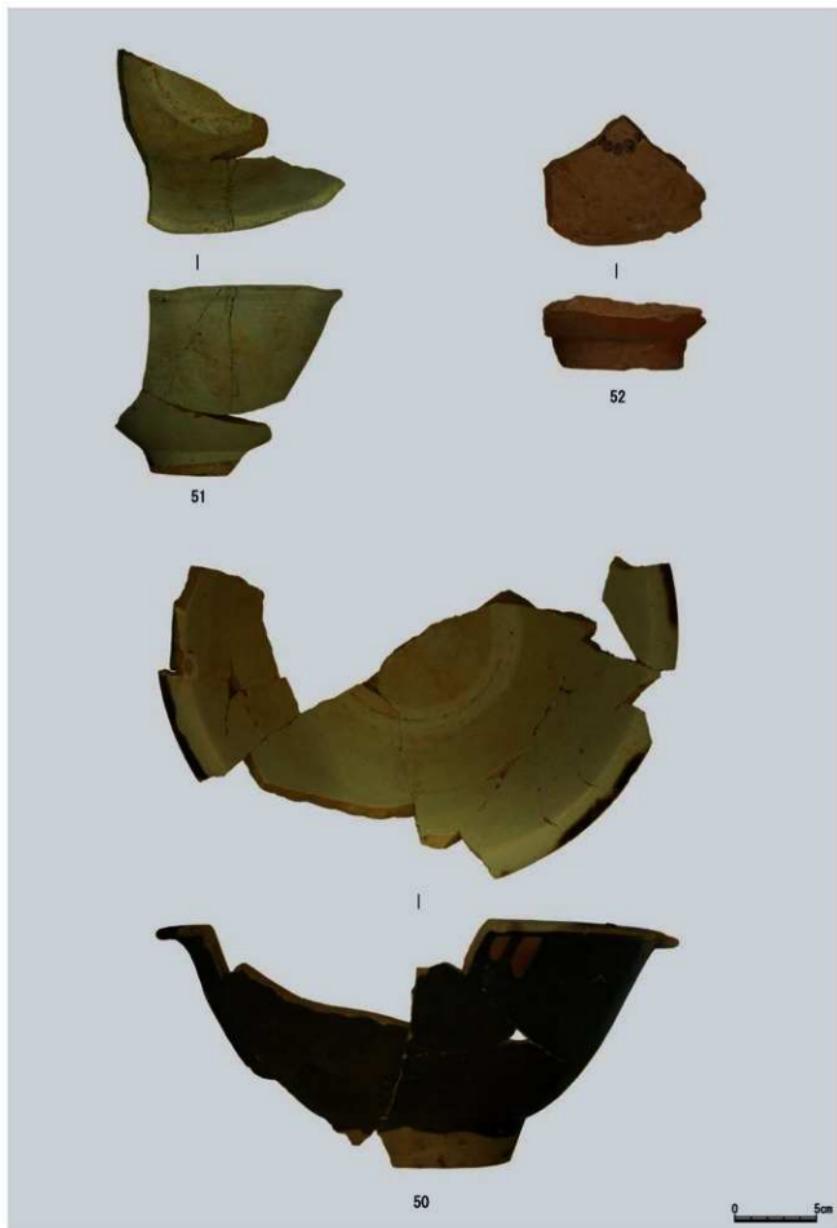
図版 11 沖縄産施釉陶器 6 鉢



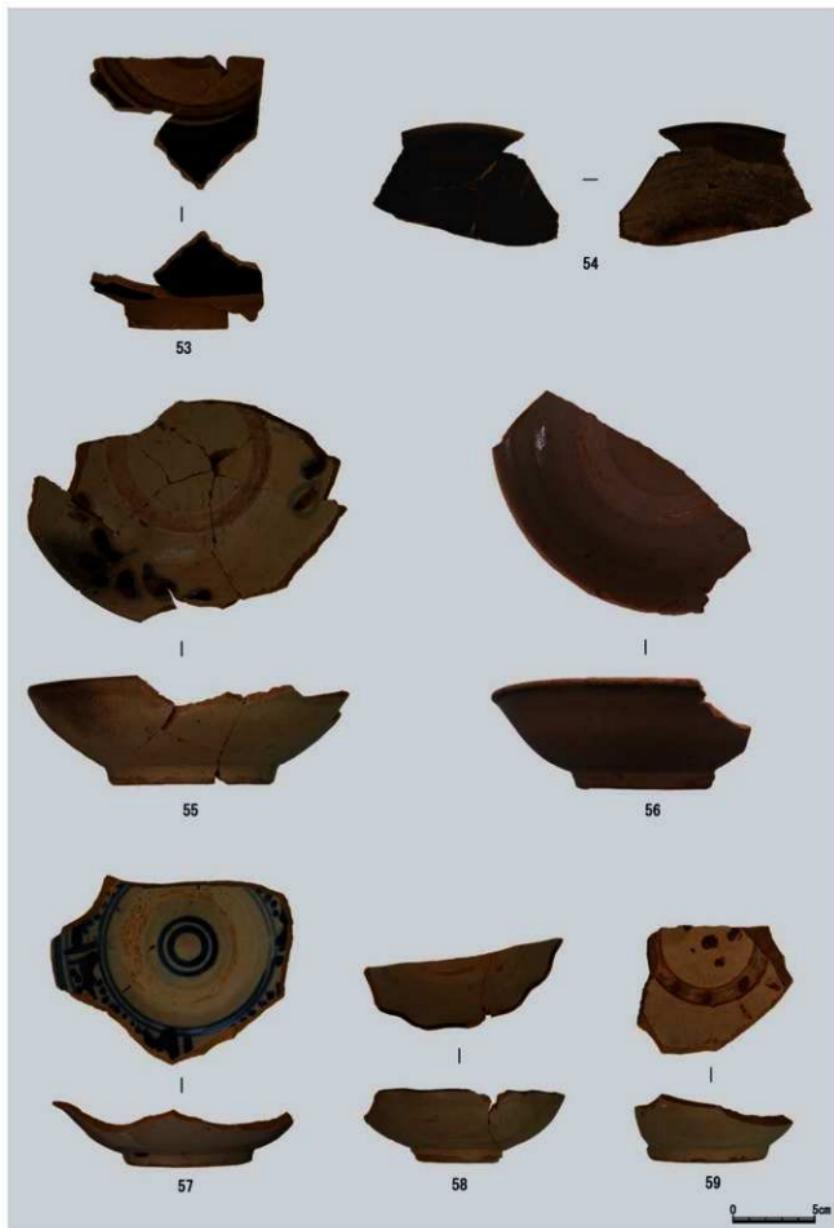
48

0 5cm

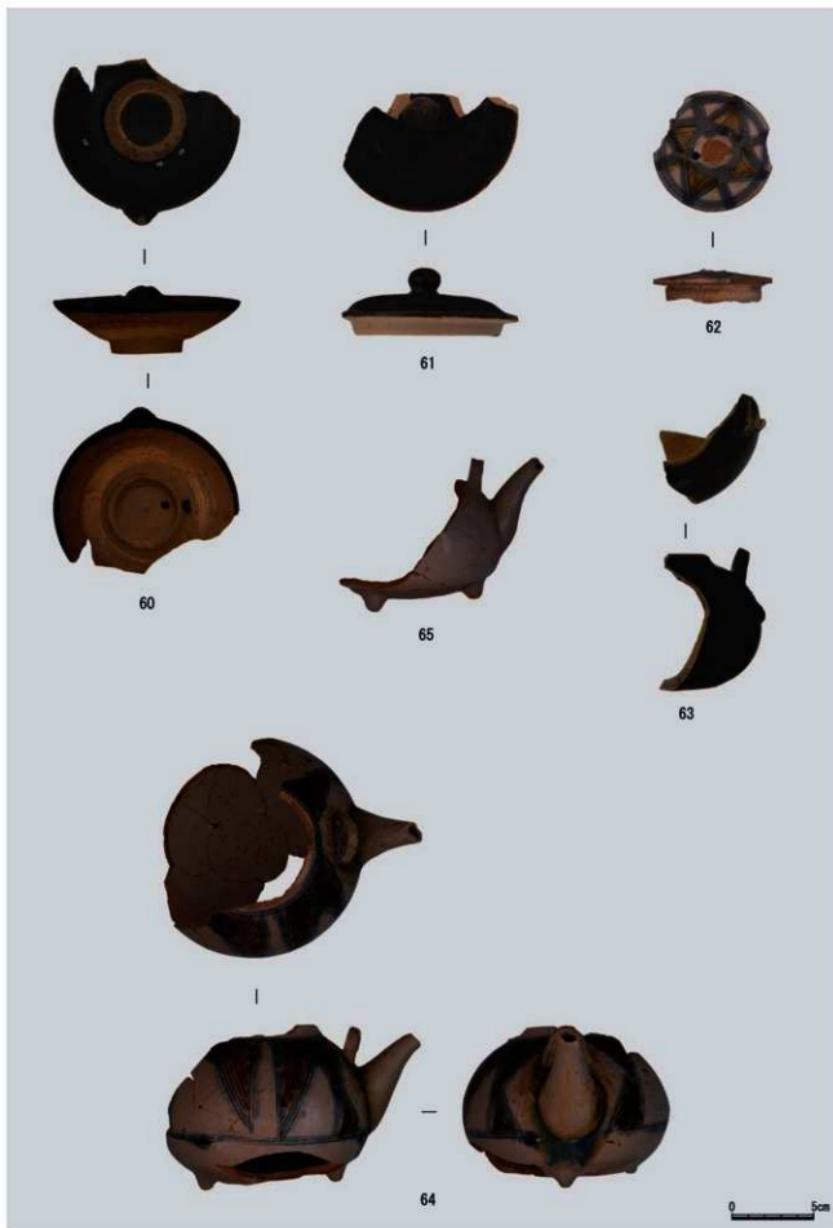
図版 12 沖縄産施釉陶器 7 鉢



図版 13 沖縄産施釉陶器 8 鉢



図版 14 沖縄産施釉陶器 9 皿



図版 15 沖縄産施釉陶器 10 灯明皿（60）、急須蓋（61～62）、急須（63～65）



66



67



68



69



73



I



71



70



72

0 5cm

図版 16 沖縄産施釉陶器 11 瓶 (66 ~ 67)、瓶子 (68 ~ 69)、香炉 (70 ~ 72)、花生け (73)



74



75



76



77



78



I



80a



80b



I



79

0 5cm

図版 17 沖縄産施釉陶器 12 火入れ (74~78)、酒器 (79~80)



図版 18 沖縄産施釉陶器 13 鍋 (81 ~ 85)、安瓶 (86 ~ 87)、壺 (88 ~ 90)



図版 19 沖縄産無釉陶器 1 壺



3



4



5

0 5cm

図版 20 沖縄産無釉陶器 2 壺



1



11



1



12

0 5cm

図版 21 沖縄産無釉陶器 3 製



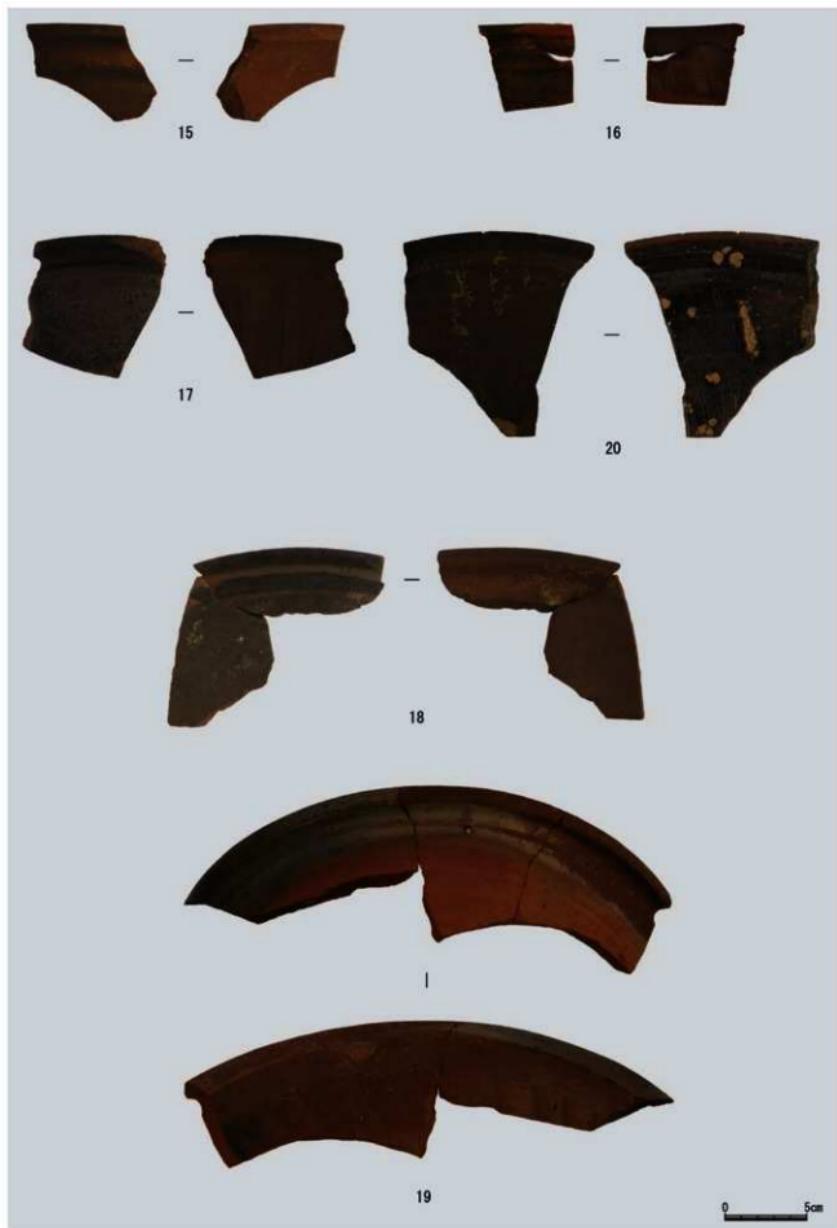
13



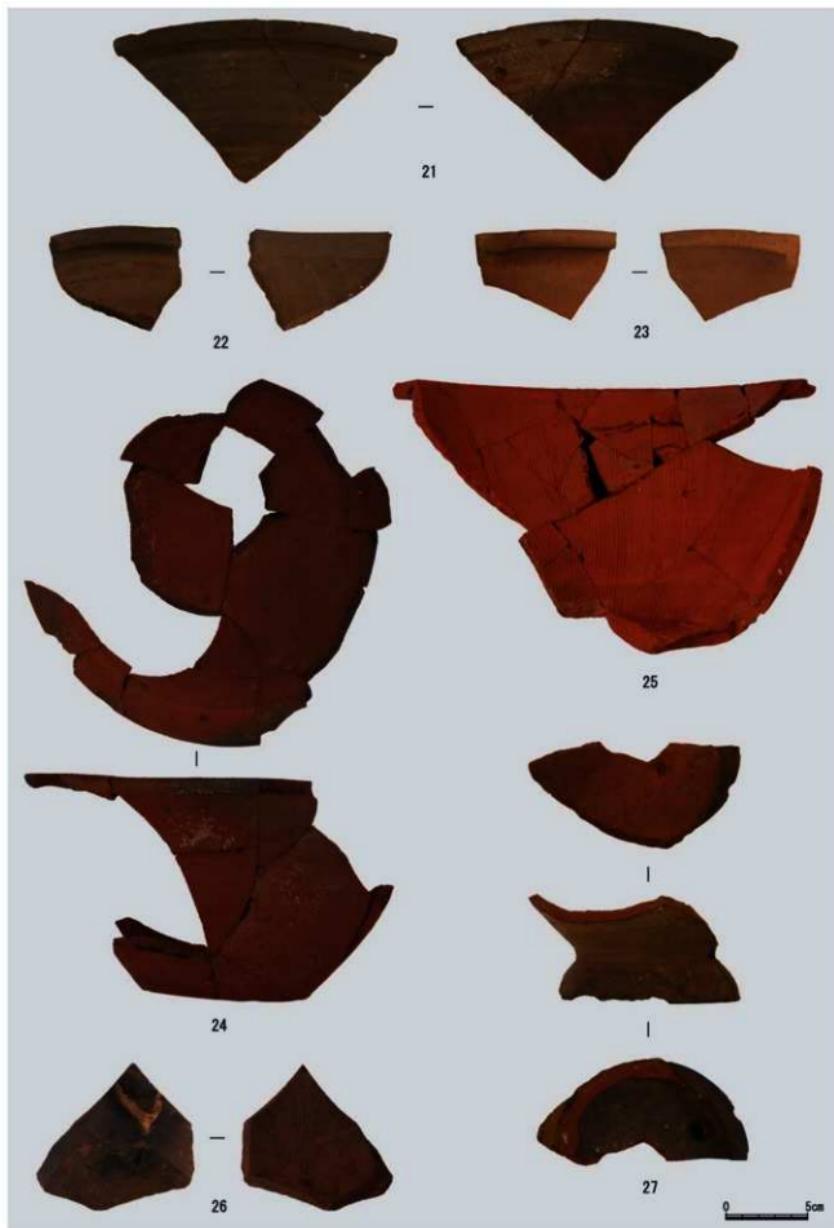
14

0 5cm

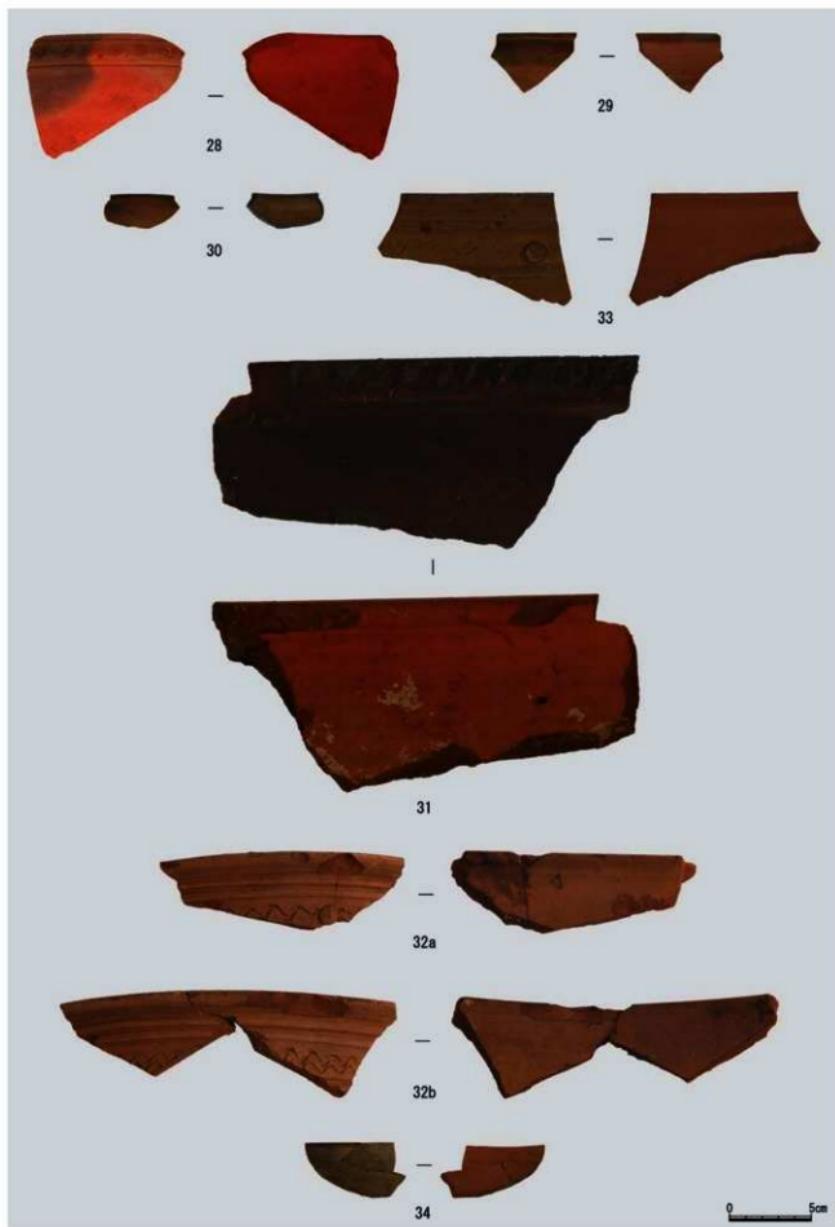
図版 22 沖縄産無釉陶器 4 瓢



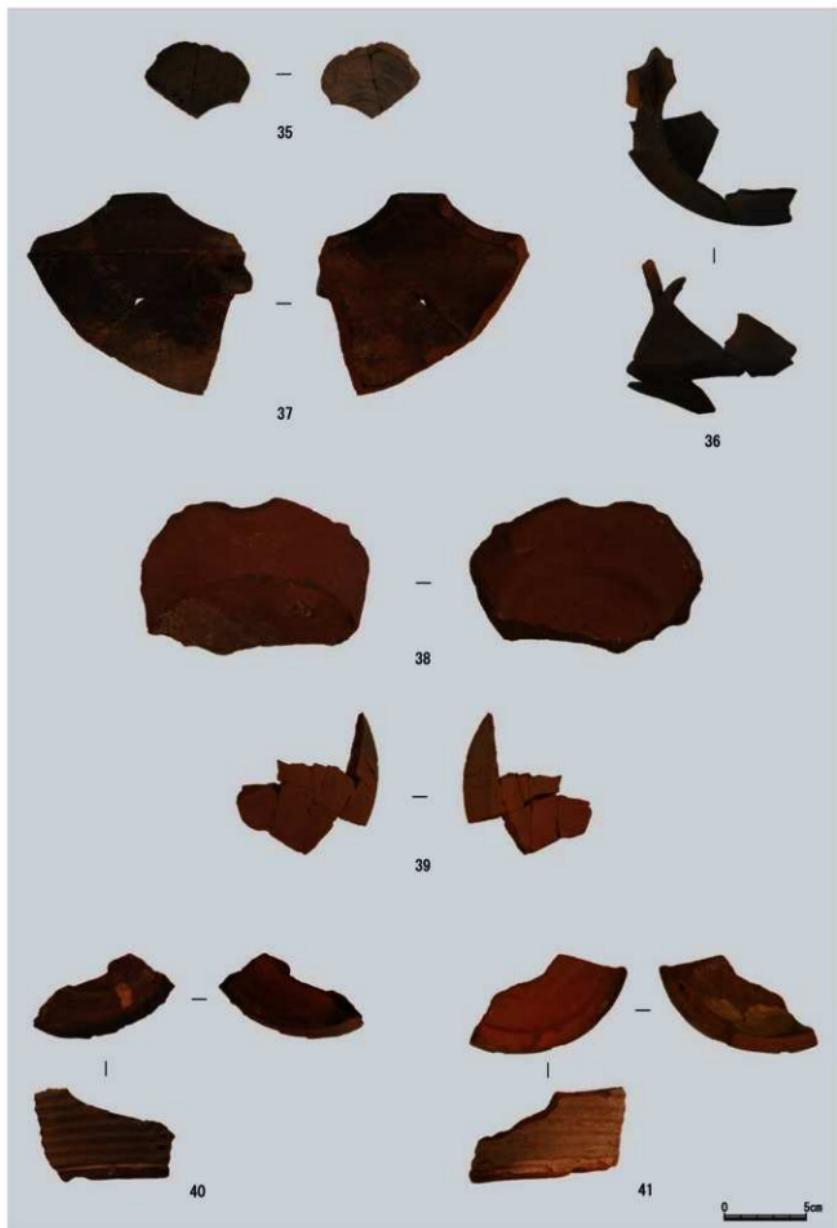
図版 23 沖縄産無釉陶器 5 捣鉢



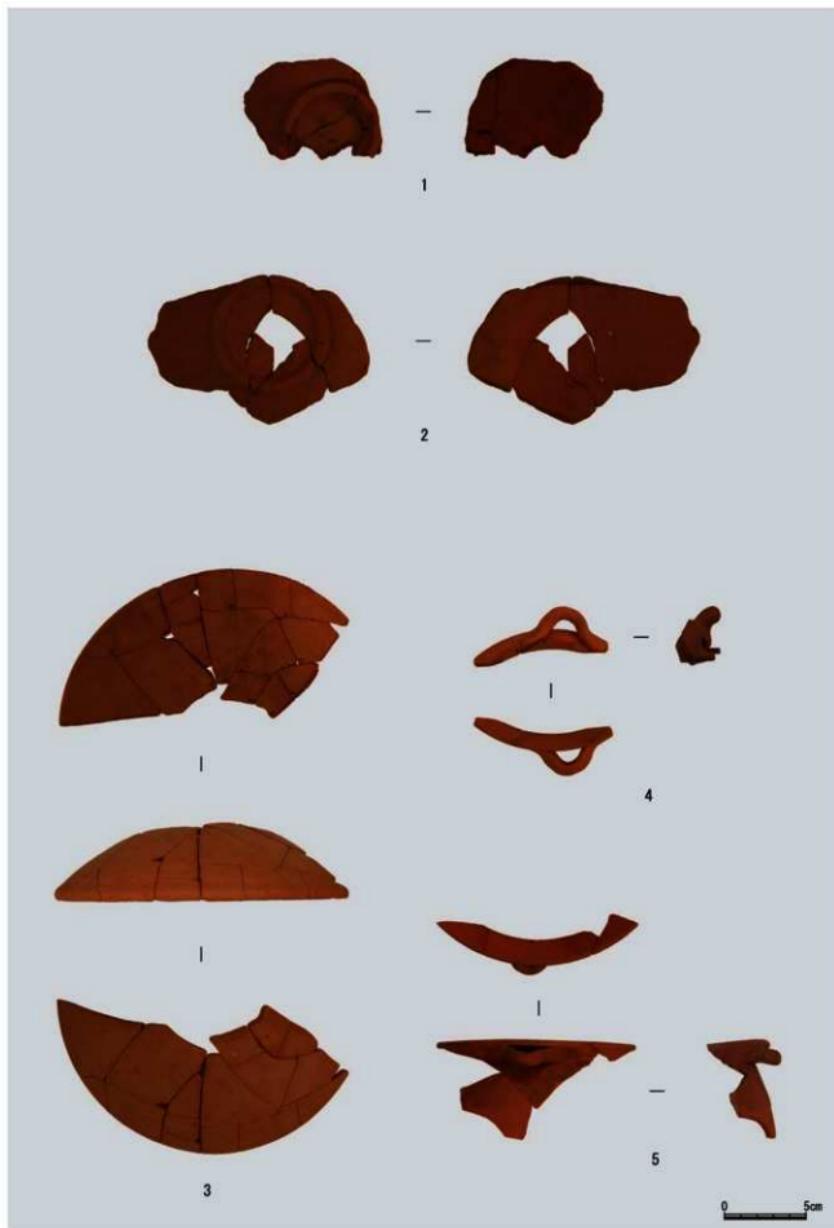
図版 24 沖縄産無釉陶器 6 描鉢



図版 25 沖縄産無釉陶器 7 鉢



図版 26 沖縄産無釉陶器 8 皿？(35)、急須(36)、火鉢(37～38)、蓋(39)、火入れ(40～41)



図版 27 アカムヌー1 鍋蓋 (1~3)、鍋 (4~5)



1



1



6

0 5cm

図版 28 アカムヌー2 鍋



1



2



3

0 5cm

図版 29 アカムヌー3 鍋



1



1



8

0 5cm

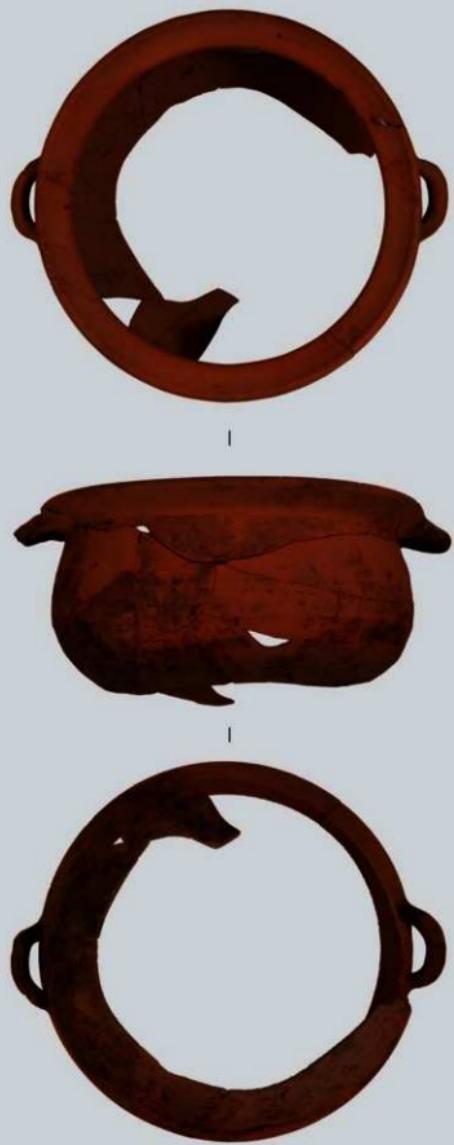
図版 30 アカムヌー4 鍋



9

0 5cm

図版 31 アカムヌー5 鍋



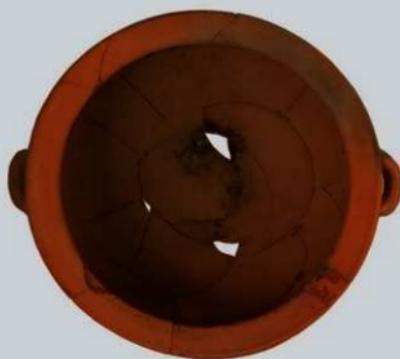
10

0 5cm

図版 32 アカムヌー6 鍋



図版 33 アカムヌー7 鍋



|



|



12

0 5cm

図版 34 アカムヌー8 鍋



1



1



13



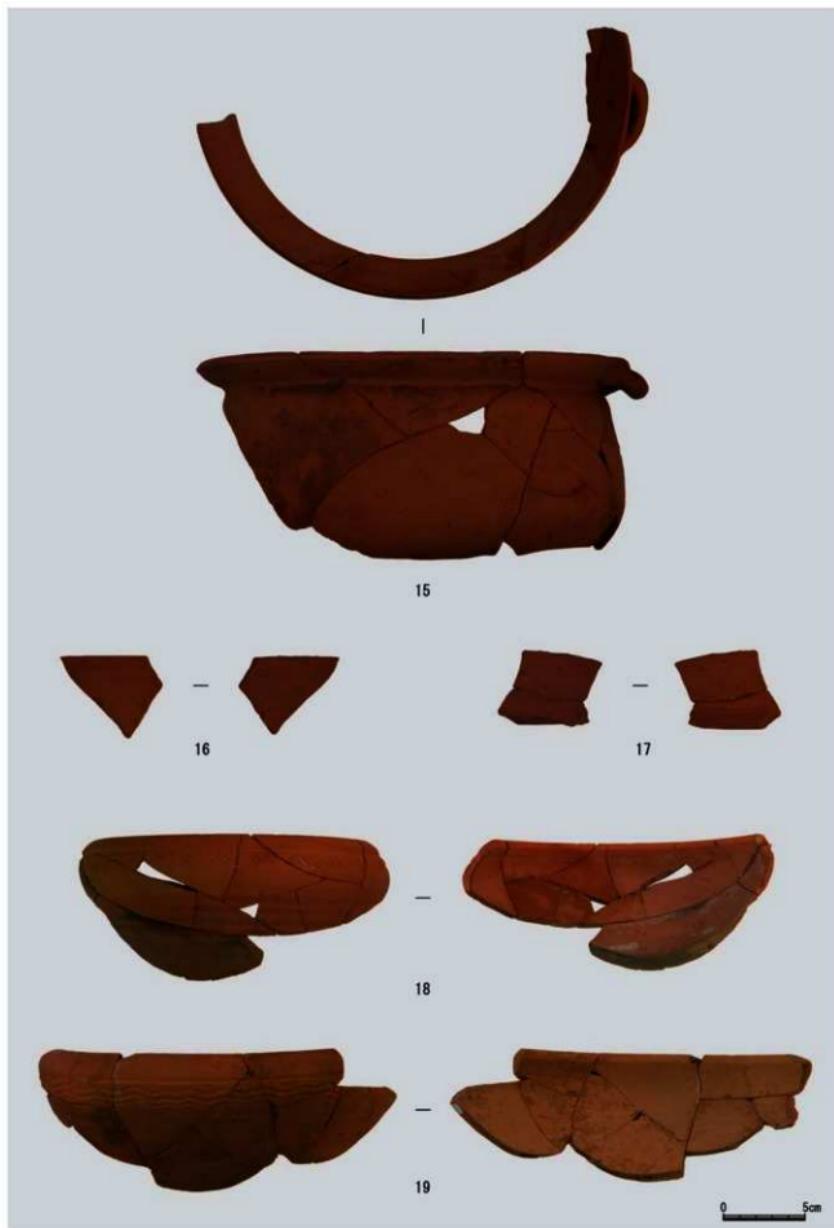
1



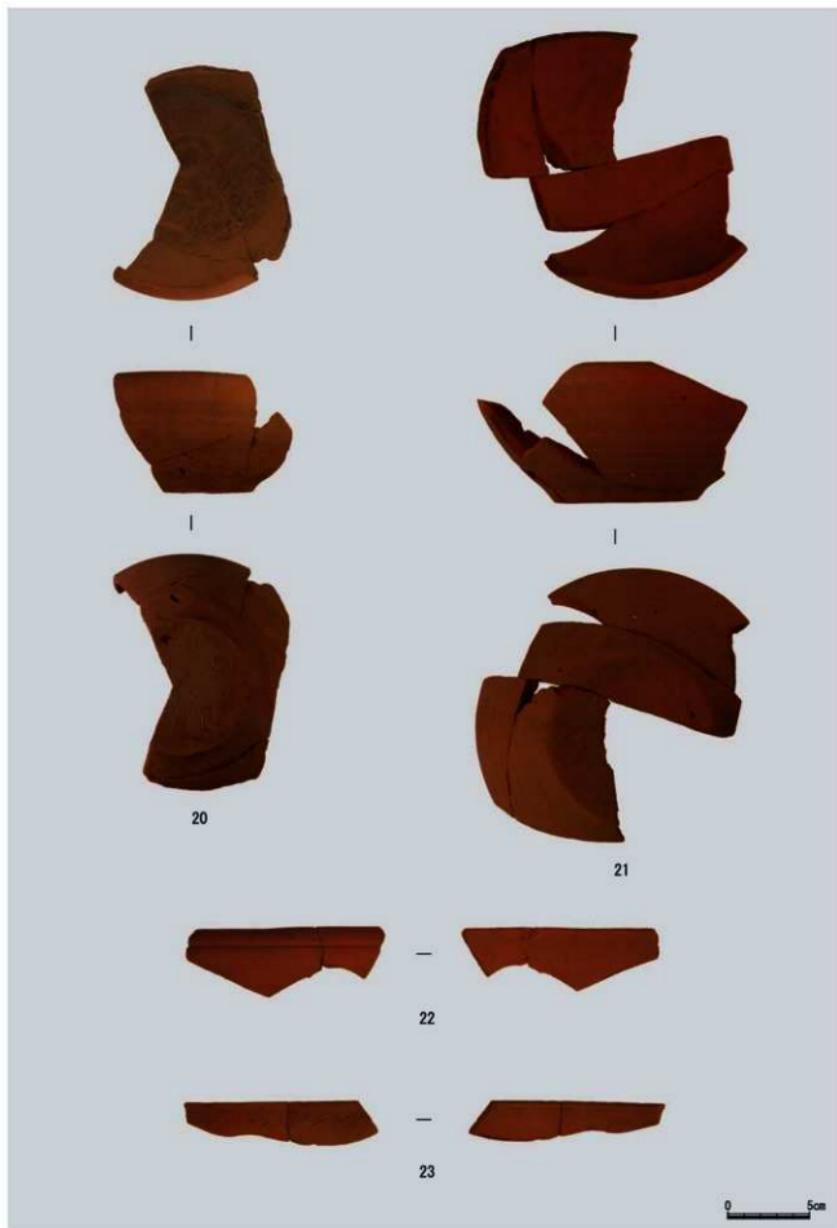
14

0 5cm

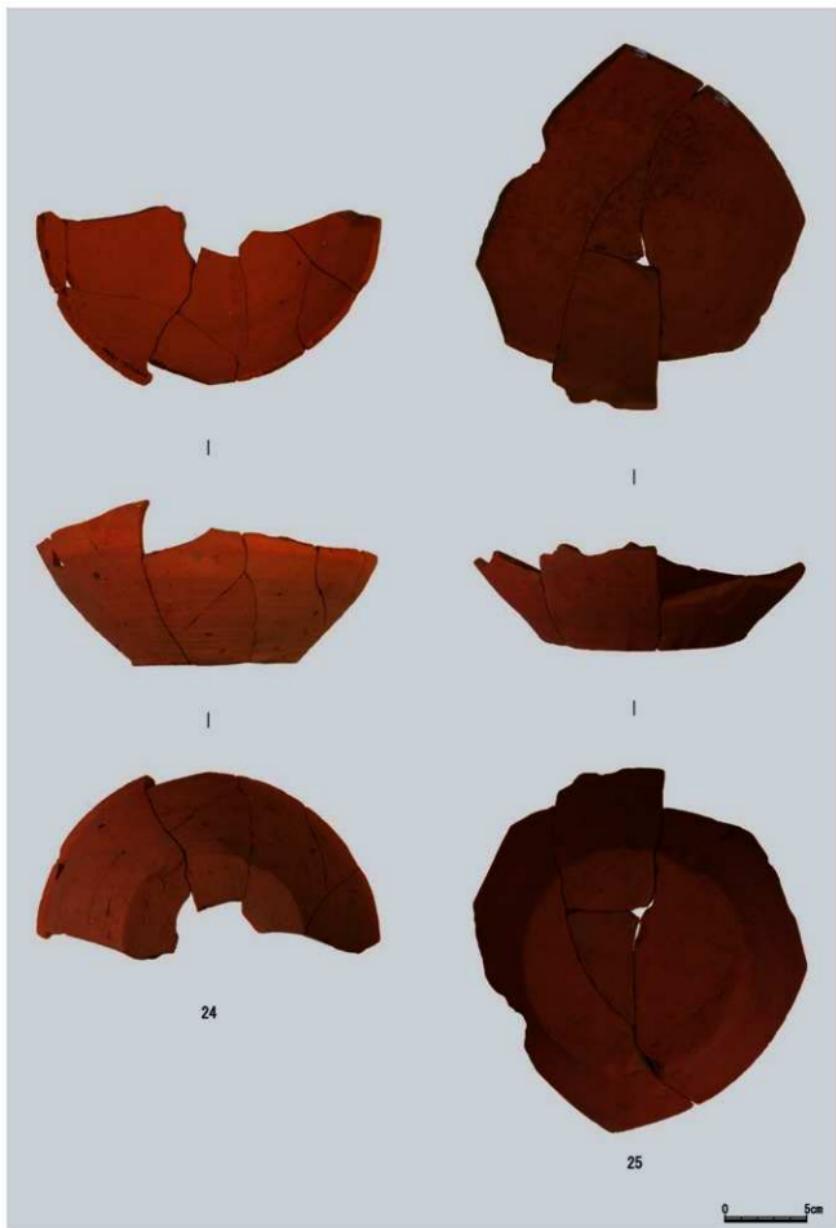
図版 35 アカムヌー9 鍋



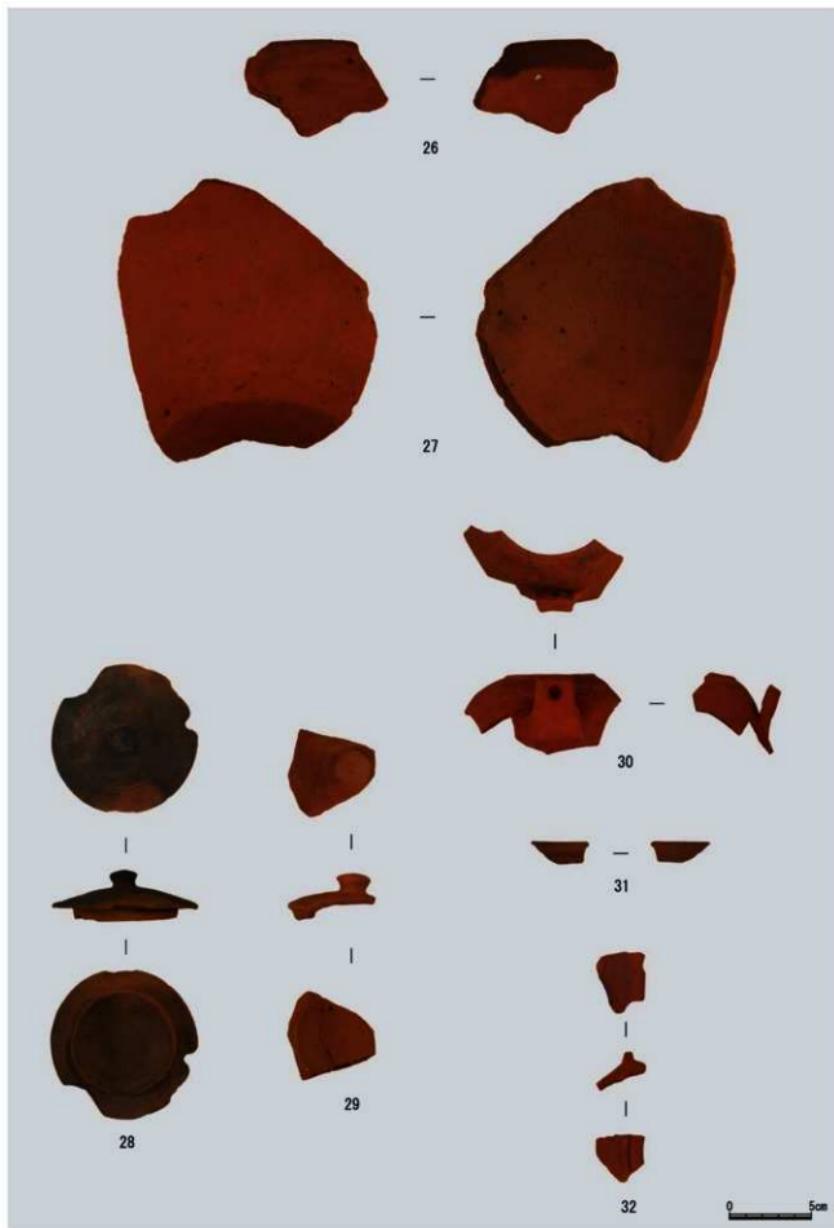
図版36 アカムヌー10 鍋(15)、羽窯(16~17)、鉢(18~19)



図版 37 アカムヌー11 鉢



図版 38 アカムヌー 12 鉢



図版39 アカムヌー13 拙鉢（26～27）、急須蓋（28～29）、急須（30～32）



33

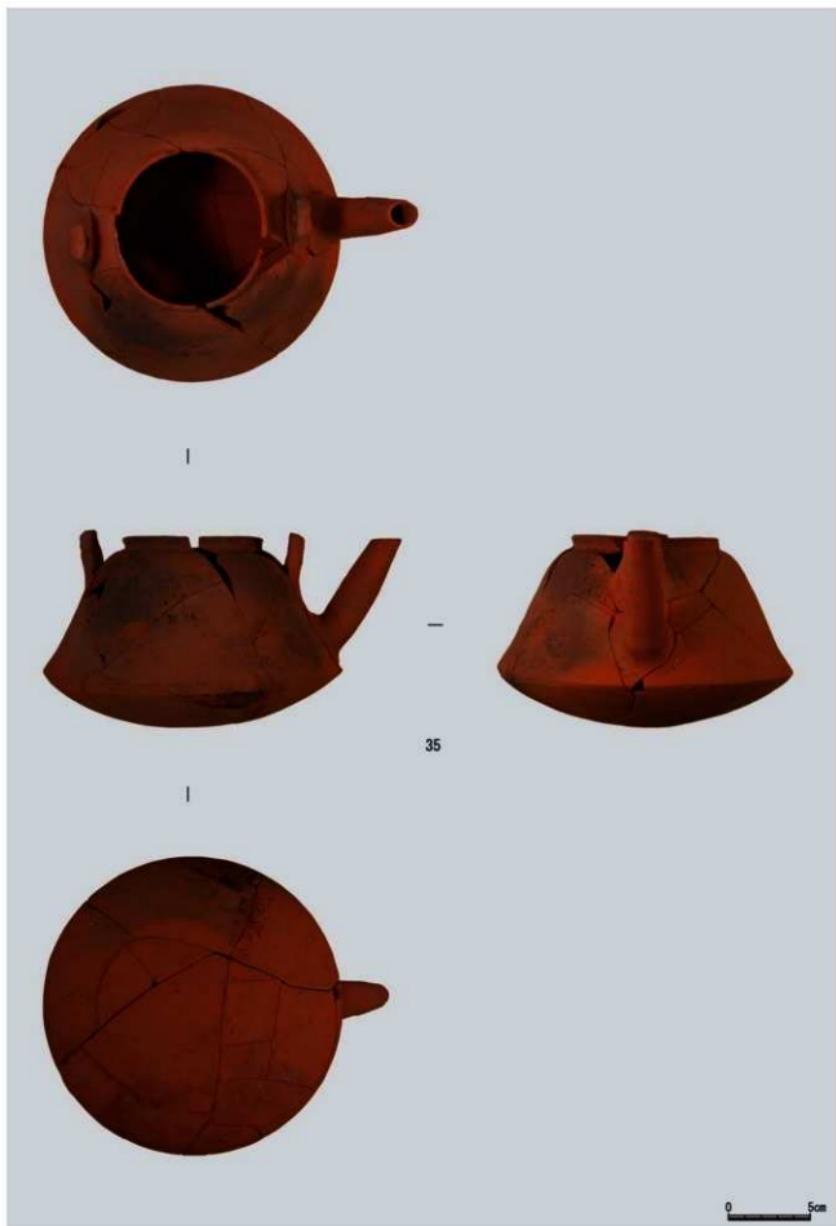


34

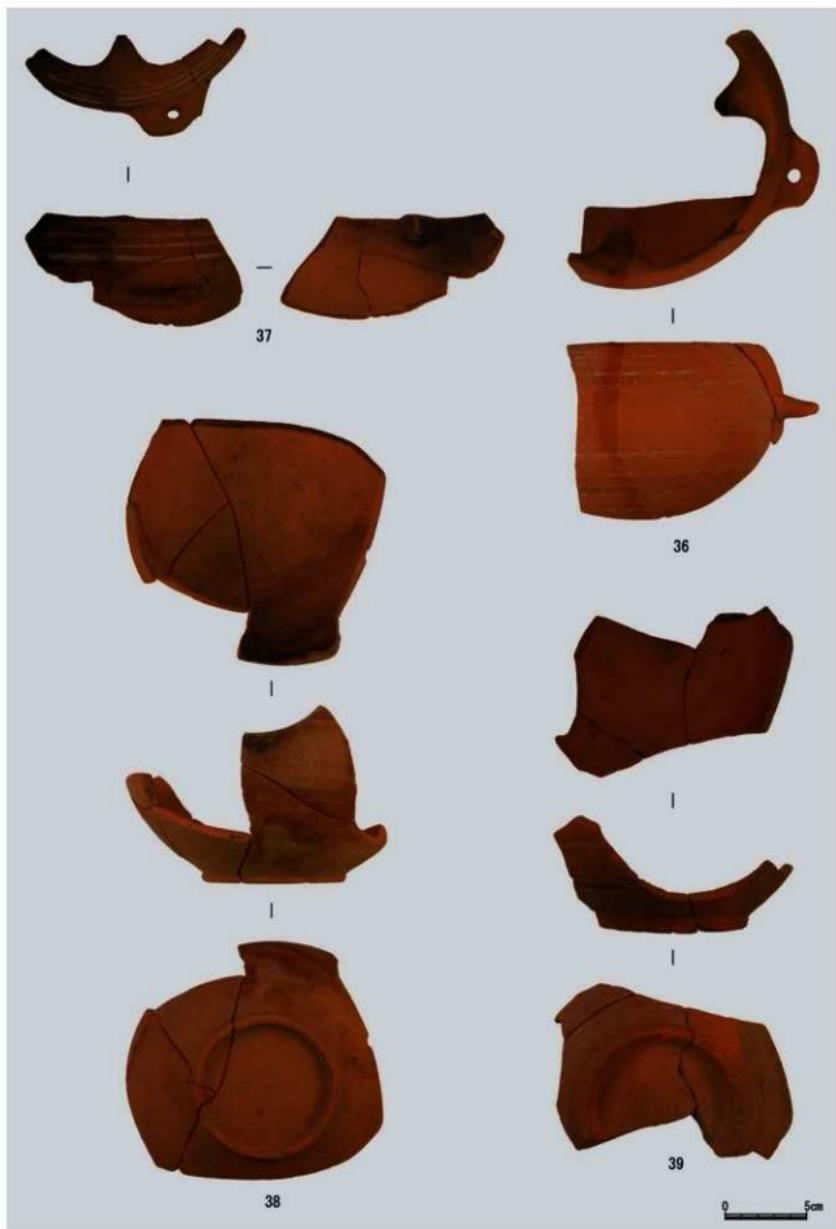


0 5cm

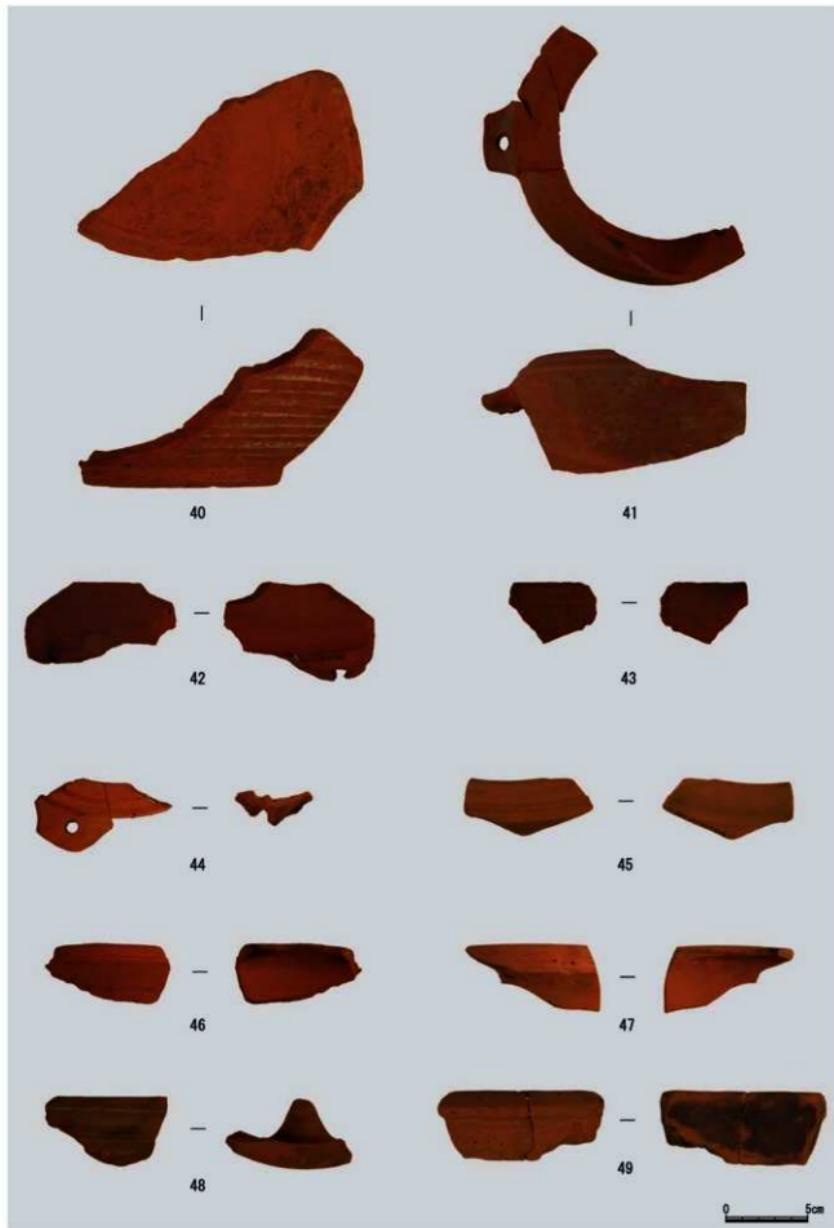
図版 40 アカムヌー 14 急須



図版 41 アカムヌー 15 急須



図版 42 アカムヌー 16 火炉



図版 43 アカムヌー 17 火炉



I



—



50



I



—



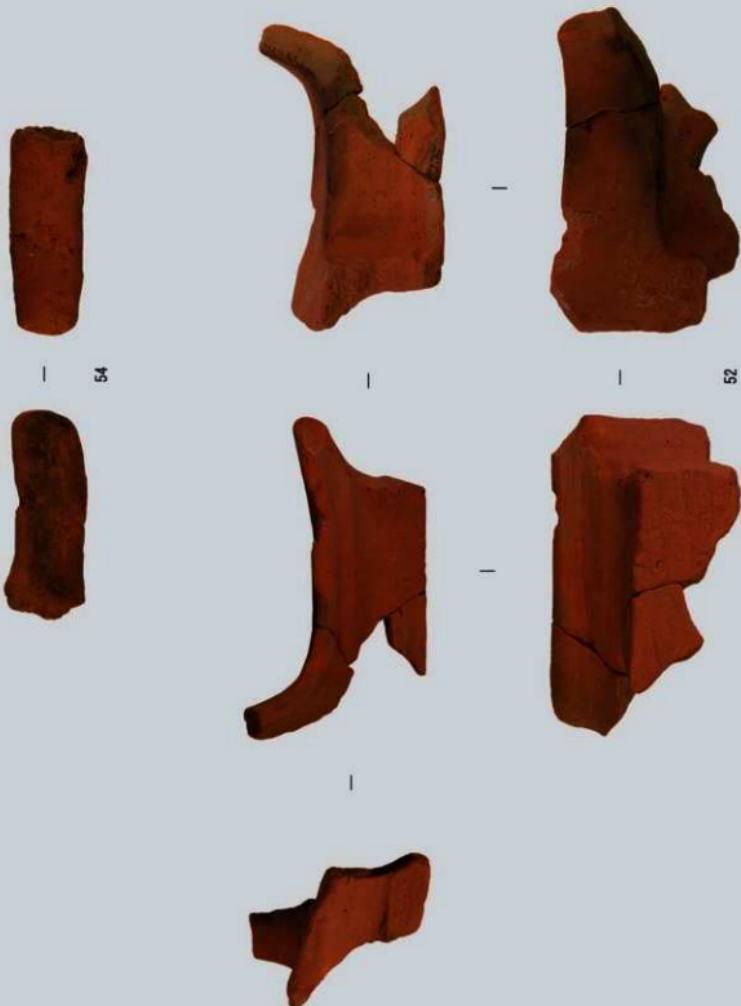
51

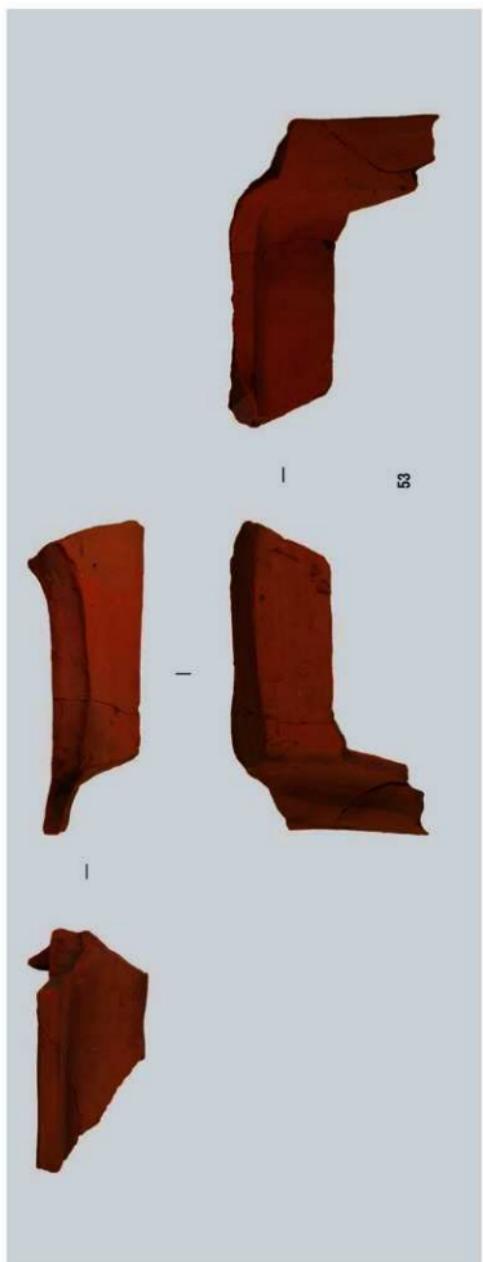
0 5cm

図版 44 アカムヌー18 火炉

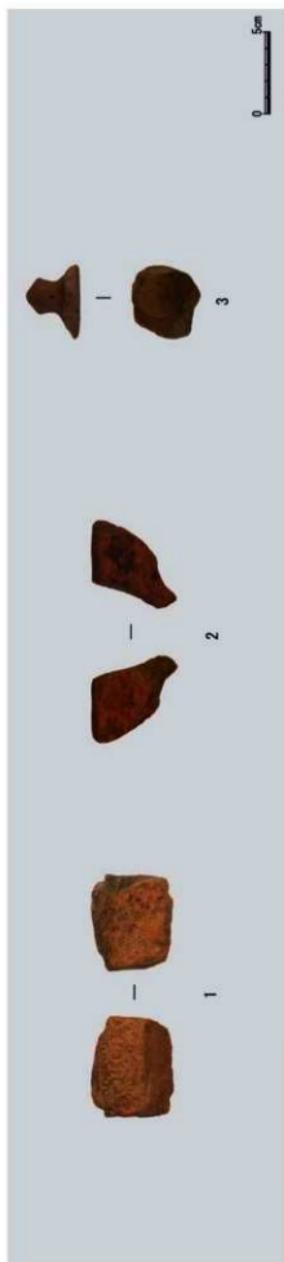
0  
5cm

図版 45 アカラヌ—19 灰陶 (52)、不明 (54)





図版 46 アカムヌー 20 火炉



図版 47 沖繩産瓦質土器



图版 48 本土产陶磁器



1



2



3



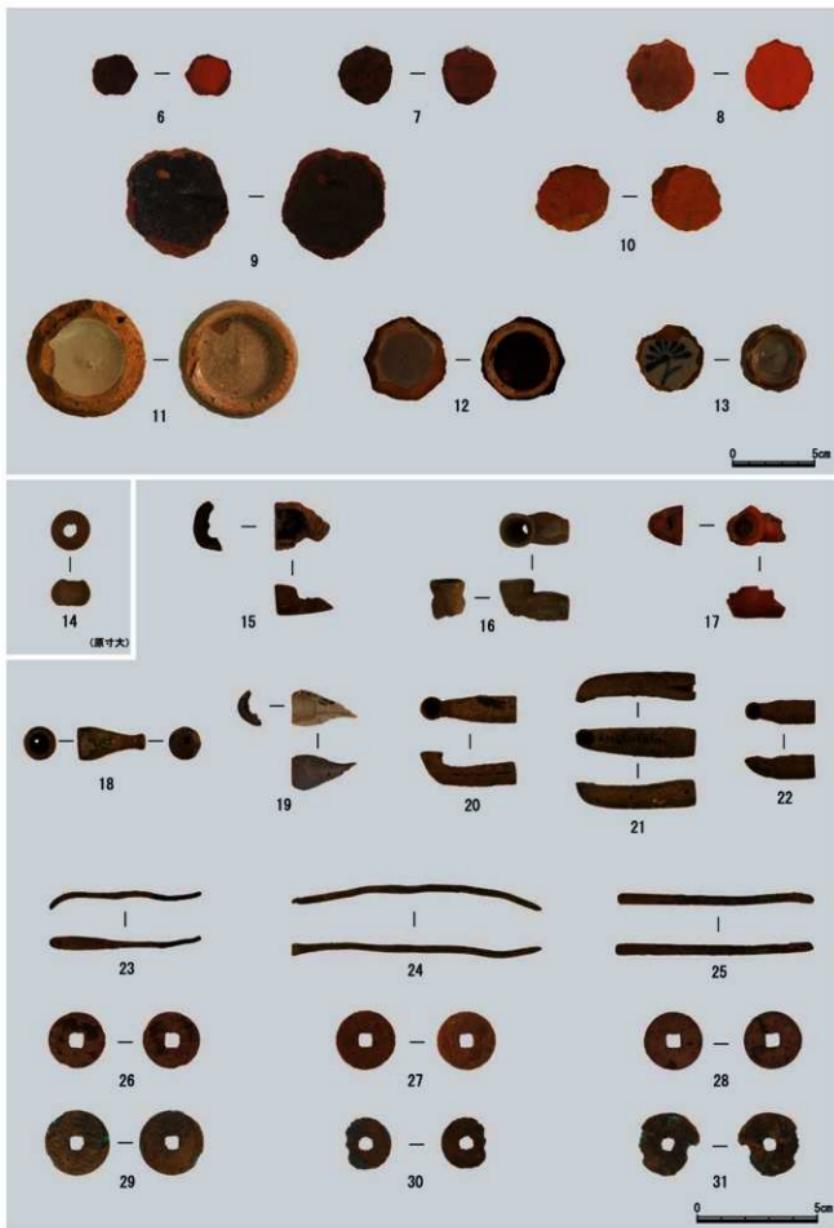
4



5

0 5cm

図版 49 その他の遺物 1 シーサー (1~4)、不明 (5)



図版 50 その他の遺物 1 円盤状製品 (6~13)、ビーズ (14)、煙管 (15~22)、簪 (23~25)、古銭 (26~31)

## 報告書抄録

ふ り が な	かかげとうんやまいせき						
書 名	嘉数トゥンヤマ遺跡 II						
副 書 名	個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査						
卷 次	一						
シ リ ー ズ 名	宜野湾市文化財調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号	第45集						
編 著 者 名	豊里友哉、城間肇、伊藤圭、玉城夕貴、上田圭一、矢作健一						
編 集 機 関	沖縄県宜野湾市教育委員会						
所 在 地	郵便番号 901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号						
発 行 年 月 日	2009年3月31日						
ふ り が な 所 取 遺 跡 名	ふりがな 所在地	コード 市町村 4720	北緯 遺跡番号 15'	東經 26° 78"	調査期間 127° 44' 50"	調査面積 m <sup>2</sup> 約 883 m <sup>2</sup>	調査原因 個人農地の 土地造成に 係る緊急発 掘調査
かかげとうんやまいせき 嘉数トゥンヤマ遺跡	ぎのわんし 宜野湾市 か か ず 嘉 数 こねぐくじゆち 小字後原				060601 070115		
所 取 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
嘉数トゥンヤマ遺跡	集落遺跡	中世～近世・近代	柱穴 列状ピット群 土坑 溝状礫敷遺構	沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 アカムヌー 沖縄産瓦質土器 本土産陶磁器 円盤状製品 ビーズ・煙管・簪・古錢	溝状遺構		
要 約	本報告書は周知の埋蔵文化財である嘉数トゥンヤマ遺跡の個人農地土地造成に係る緊急発掘調査の成果をまとめたものである。発掘調査により確認された遺構は溝状礫敷遺構、溝状遺構、土坑群などで、遺物はグスク時代から近代までの土器や陶磁器が得られている。特に溝状礫敷遺構の造成時に遺構内に充填された沖縄製陶器は数量、器種、復元資料とも突出しており、近世末の村落における沖縄製陶器の組成を把握する上で重要な事例である。						
	今回の報告書では近世以降の沖縄製陶器を中心に、関連する遺構を報告している。						

宜野湾市文化財調査報告書 第45集

## 嘉数トウンヤマ遺跡Ⅱ

—個人農地の土地造成に係る緊急発掘調査—

発行年 2009(平成21年)3月31日

編集行 沖縄県宜野湾市教育委員会

住 所 〒901-2203  
沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号

TEL 098-893-4430

印 刷 合資会社 正美堂印刷所  
TEL 098-898-4611